

北周庾信に於ける魏晉南北朝文學の集成と變換の検討

——「個」の表現をめぐって——

原 田 直 枝

目次

序 章	1
第一章 「哀江南賦」論	6
——鋪陳に於ける時間——	
第二章 庾信の碑傳文	32
第三章 從軍をめぐる詩について	67
結 語	82

序章

文學作品及びその作者について、作者の生涯の事蹟や經歷にまつわる先入観に囚われずに、その作品自體の検討を行い、その作品を通して文學史の上に位置づける。或いは、そういう作業を通じて改めてその周邊の文學史を見わたしてみる。一見當りまえのような文學研究の手順であるが、それが實現され得ていない場合は、意外に多い。例えば、波瀾萬丈と言われるような一生を送った作者の作品は、ともすればその人生に極度に引きつけた、皮相な解釋がなされるにとどまったり、丹念な読みも施されぬまま、特にその實生活とは密接な關係の無いものまでその人生の反映として處理されたり、ということは古今東西の別なく、しばしば見かける混同の例である。しかし、そのような實人生の像と作品との混同のしがらみから、作品を掬いあげた時にこそ、文學史の上に於けるその作者の、舊套を脱した、眞の位置もはつきりと見えてくる。そうではなかろうか。

中國の古代文學の流れの中で、或る時期の文學傾向に於て重要な存在と見なされながら、しかも上述のような固定したイメージの下で語られがちである文人を挙げるとすれば、その一人に、北周の庾信¹は間違いなく入るであろう。

庾信、字は子山（五一三～五八一）。『玉臺新詠』の編者徐陵と併せて「徐庾」と稱される如く、南朝梁（五〇二～五四九）の下では艶麗な宮體詩の作家として名を馳せ、やがて梁武帝太清二年（五四八、戊辰）侯景の亂に發端する梁朝滅亡と、彼自身及び梁朝遺民の北地への強制的な移動を歴て後、北周に於て過ごしたその人生後期には前期と全く作風を異にして、故國梁が滅んだうゑにその故郷を去らねばならなかった境遇に由來する故郷喪失の情・羈旅漂泊の悲哀、所謂「鄉關之思」²を主情とする佳篇を多くのこすこと、が知られる。現存する庾信の詩文は、清・倪璠注『庾子山集』十六卷³によって見られるが、そこに收められる作品は、彼の後半生に於けるものが大半を占め、梁朝に於て「徐庾」と稱されたという若い時代の作品などは、そのうちにまま紛れているにしても、數量的に少なく、しかも確證に乏しいのが實情である。

さて、庾信の文學及び人生に對して恐らく最も固定したイメージを與えているであろうキーワード「鄉關之思」という語を庾信について初めに用いた記録としては、「（庾）信位望通顯すと雖も、常に鄉關の思^ないを作す（信雖位望通顯、常作鄉關之思）」という『北史』卷八三庾信傳（『周書』卷四一同じ）が確認される。これは、明代になって『漢魏六朝百三名家集』を編んだ張溥が「庾開府集」題辭に於

て用いているのを最も顕著な例として、庾信の文學についての議論に於ては度々言及され、庾信の文學に對する一つの固定したイメージを支えてきている。例えば、庾信の時代からそう時を隔てずして、その後半生の詩文及び境涯にまつわるイメージを次のように集約して捉えたのは、杜甫であった。

庾信生平最蕭瑟、 庾信 生平 最も蕭瑟、

暮年詩賦動江關。 暮年 詩賦 江關を動かす。 （「詠懷古迹五首」一）

そして、遠く下つては清代、庾信の集に注釋をほどこした倪璠が『庾子山集』題辭において述べた、

子山入關而後、其文篇篇有哀、悽怨之流、不獨此賦而已。

子山 關に入りて後、其の文は篇篇に哀有り。悽怨の流は、獨り此の賦（「哀江南賦」）のみにあらず。

という語まで、亡國の悲哀の情をにじませた作品が多いことに特に言及する歴代の評と、庾信の文學をそうした側面から論じる例は、後を絶たない。それは現代に於ても同様の状況が大勢として續いてきている。

庾信が、梁末の混亂と北地への移住とを経験した羈旅の作家であることは固より疑いない事實であり、彼の作品中にそのことを反映した詩文も多い。それは確かである。しかし、この「郷關之思」というイメージの周邊に踏みとどまっていたは、とうてい説明しきれないであろう、庾信の文學史上の成果に光を当てた發言も、纔かながら一方には存在する。例えば、後に清・吳兆宜撰するところの『庾開府集箋註』についての『四庫全書總目』提要では、庾信の駢文が駢文史上に重要な位置を占めることが次のように述べられている。

其の駢偶の文は、則ち六朝の大成を集め、而うして四傑の先路を導く。古より今に迄るまで、屹然として四六の宗匠たり（其駢偶之文、則集六朝之大成、而導四傑之先路。自古迄今、屹然爲四六之宗匠）。

ここに「集六朝之大成」とまで評価される庾信の「駢偶之文」すなわち駢體文に當るのは、北朝に在って作られた表啓や、碑傳、銘などが主で、それら作品には所謂「郷關之思」のテーマはまるで見出されないし、また四庫館臣は、そうしたイメージと殊更に關係づけることもなく庾信の駢文史上に於ける価値を認めているのである。

さて、この四庫館臣の論は、こと駢文に限ってのものであるが、恐らく庾信の詩文について見る上で重要な示唆をなしていると思われる。つまり、羈旅の作家という固定した庾信像を持ち出さずとも、その作品作品に即して、それらを文學史の流

變の中で捉えて見るべきほどの「価値」が、庾信の詩文には本來備わっているのだ、ということ。そして、そのように庾信の詩文を見つめる必要は、たとえ煩瑣にわたろうとも、個々の作品について、それがどのような庾信以前の文學史の要素を受け継いでいるかを検討し位置づけていこうとする視点から自ずと生じること。このような視点に立って検討を加えてみるべき材料は、庾信の詩文のうちには實に幾つも見出される。まず、「四六の宗匠」と言われるその文は、いかなる點に於てそう評価されるのか。また、「江關を動かす」と言われた詩賦は、それらに籠められた羈旅のテーマはさておき、そもそもどのような構造に於てかくも羈旅・亡國のイメージの強い作品となっているのか。さらに、北朝に於ける庾信の詩賦のうち多数の、羈旅・亡國のテーマに關わらない諸篇についての検討も、忽せにはし難い。本論は、庾信の詩文について以上のような方面に互って順次検討を行っていくものである。

ところで、これらの検討は自ずと、庾信の詩文に流れこんだ、彼に先行して表れた魏晉南北朝期の文學史上のさまざまな要素の確認と跡づけを兼ねることにもなり、それはとりもなおさず、魏晉南北朝文學史をその最末端から遡り窺う作業となる。無論、一口に魏晉南北朝文學と言ってもその間に展開した文學の事象は多彩多岐に互る。何ら焦點を絞らずに取り組んだのでは、せつかくの企ても、頼り無いものになってしまうだろう。では、如何なる點に的を絞るべきか。本論では、`個、の表現、とも言うべき點に着目するつもりである。それは次のような見通しに本づく。

魏晉南北朝期の文學に於て注目すべき大きなポイントとして、作者である士大夫たちによる、さまざまな`個、の表現の顯在化とその展開とを擧げてよいだろう。ここで言う`個、とは、詩文の作者自身の`個、はもちろんのこと、詩文の内容や題材として作者から見られ語られる、作者にとっては「他」なる`個、をも含む。いまここに魏晉南北朝の間に於ける`個、の表現の展開を述べ盡くすことは不可能だし、本論の目的でもないので、概要を簡潔に述べよう。すなわち、詩文がそうした幅廣い`個、の表現の場として定着する傾向は、後漢から三國魏にかけての文學史に於てははっきりと現われてきた。後漢期の辭賦に於ける「抒情化」と捉えられる一連の傾向をはじめ、魏・王粲の「七哀詩」や「登樓賦」、陳思王曹植の五言詩、などはその代表的な例としてよいだろう。そして、それが士大夫たちそれぞれの作品を通していつそう一般化し本格的な展開を遂げたのが、魏晉南北朝期なのである。晉・阮籍「詠懷詩」に於ける哲學的思辨的な内容の表現、「三張二陸兩潘一

左」(『詩品』序)と總稱される、太康(二八〇～二八九)期を代表する文人たちによる諸篇や陶淵明の詩文をはじめ、この時期の詩文には何らかの「個」の裏づけのある作品が、もう珍しくもないほどに、多數見當る。無論それは、何か體系的に發展のすじみちが辿り得るとか、順次繼承されたとか、そういう系統だった現象として把握される性質のものではない。むしろ、今日、文學研究の對象として見る際、詩文を通してそこに作者の「個」を読みとることができるような作品が豊富に生みだされるようになっていった時代であることそのものが、長い中國文學史の中に於けるこの時代の重要な特長なのである。そういう時代の最後に出現した庾信の文學は、當然そのような流れの中に於て捉えてみるべき對象と言える。彼に先行する南北朝期の文人たちの間で詩文の中に定着してきた、それぞれ独自の「個」の表現を、さて庾信はどのような形で行ったか。

以上のような問題意識に本づいて、本論では、各章で採りあげる庾信の作品の何れについても、それぞれの作品のうちで、庾信自身の「個」或いは「他」なる「個」が如何なる形で表現されているか、という點に常に着目しつつ、分析を進めていく。順序は次の通り。すなわち、第一章に於ては、「哀江南賦」に即して、庾信自身の「個」に徹底的に即した場合の表現の一形態を分析し、次に第二章に於ては、「碑傳文」の検討によって、「哀江南賦」とは對極に位置するとも言える、描寫對象の「個」に即した場合の表現の特長を分析、さらに第三章に於て、五言詩のうち作品を示す對象を持つことが明らかなものを採り上げ、贈る相手と作者との關係が作品に於ける「場」の共有の在り方に如何に反映するか分析を試みる。では早速、本論に入ろう。

注

- ① 庾信についての專著に興膳宏『庾信』(一九八三年、集英社)がある。また「哀江南賦」のWilliam T. Graham氏による英譯“The Lament for the South”(Cambridge Univ. Press, 1980)の卷頭卷末にも庾信の人と文學について、ついでにの詳論があるほか、大陸出版の專著としては鍾優民『望郷詩人庾信』(一九八八年、吉林大學出版社)がある。
- ② 程章燦『魏晉南北朝賦史』(一九九二年、江蘇古籍出版社)第八章第三節「入北南人賦作」。曹道衡・沈玉成編『南北朝文學史』(一九九一年、人民文學出版社)第二十二章、等參照。
- ③ 『庾子山集』に寄せられた滕王道「序」には「凡所著述、合二十卷」との記載があるが、現存の『庾子山集』は十六卷である。なお本論は、庾信の作品については倪璠注に據る許逸民校點『庾子山集注』(一九八〇年、上海古籍出版社)を底本として使用。
- ④ 「南冠西河、旅人發嘆、鄉關之思、僅寄于哀江南一賦」。
- ⑤ 序章に於て掲げる駢文に關する發言のほかにも、辭賦史に於ける庾信の位置について論じたものとして、高光復『賦史述略』(一九八七年、東北師範大學出版社)第七章「他用叙事大賦那種鋪張的手法去展示廣闊的社會圖景、而同時又賦予這些作品以強烈的抒情性」一六一頁。馬積高『賦史』(一九八七年、上海古籍出版社)第六章六「庾信(513-581)南北朝賦的集大成者……」などは、注目に値する。本論第一章、「哀江南賦」の論證の手がかりでもある。
- ⑥ 程章燦前掲注②書、馬積高前掲注④書、また、伊藤正文「漢代文學抒情化と「文心雕龍」——漢賦をめぐって——」(『古田教授退官記念中國文學語學論集』一九八五年、汲古書院)、等參照。
- ⑦ 第二章第四節の検討に於て若干言及する事項も、その一つの表われである。

序

時間という、目にも見えず至って抽象的なもの、言葉はそれをどのように表現し得るのか。この「時間」と文学作品との関わり方には二通りの場合がある。一つは、作品の主題としての時間、敘述の内容としての時間であり、もう一つは敘述の装置としての時間、作品の中で具体的に機能する時間である。前者の場合は、例えば詠嘆の対象であったり、抽象的考察の主題であったりして、しばしば私たちはそこに所謂時間意識のようなものを窺ったりすることになる。一方、後者の場合は、時間的座標が作品のモチーフと如何に関わり合って作品全體にどう働いているかに於て最大の関心が拂われる。時間的座標に従った敘述という點で歴史記述との比較考察の材料とされるのもこの後者の場合で、例えば、近代以降、歐米の小説をめぐる時間論などはそのよい例であり、またその小説との對比から「絶對的過去」と言われる時間座標を持つ古典の英雄敘事詩などもその一つである。文學と時間、いや言葉による時間の表現というものを考える上で、こうした後者的な作品の研究が有効であることは確實なのではないか。ところで、よく知られる通り中國の士大夫文學に於ては所謂敘事詩的な性格のものは育たなかった。自ずと情況は歐米と異なる。しかしながら、歴史記述と見紛うばかりに時間的座標に従った敘述でしかも「文」「史」のうちでは「文」と見做されるような作品は少なくない。さらにまた、紛れもない「文」の中にも一篇一篇見ていけば、單に詠嘆の対象や高度な思弁のテーマではなくして敘述の中の装置として時間が機能するものが見出される。そこに於て、敘述の主題や内容がその時間軸に載せられることによって如何なる展開を繰り広げることになるのか。この章で採りあげる庾信「哀江南賦」は、まさにそういう視點で考察してみるべき一篇である。

一

庾信の、北遷後、國家破亡の體驗を反映した作品多數の中でも「哀江南賦」はとりわけ歴代の注目を浴びてきた。それには一見して明らかところでは、例えばこの賦が四言・六言句を基調とする本文五二八句、序文一三六句より成る長大なものであることをはじめ、本論序章に於てざっとなぞったような庾信の半生とその背景となる時代の出來事に直截に言及して、時には自傳的性格を指摘されるようなスタイルを呈すること、或いはその篇名「哀江南」が『楚辭』『招魂』で度々繰り返される祈りの言葉「魂兮歸來、哀江南」を踏まえたものである上に、同じ『楚辭』の

一篇「哀郢」をも想起させて、『楚辭』の悲壯慷慨に満ちた抒情性の繼承を直ちに予想させること等、人々の興味を喚起せずにはおかないような諸點を持つことも大いに與かるであろう。こうした各側面について「哀江南賦」へのアプローチは既に數多くなされてきている。特にその濃厚な自傳的傾向については、同時期の顔之推「觀我生賦」とともに、中國文學に於ける「自傳」の在り方を考察する上で、興味深い特長であるに違いない。しかし今、「哀江南賦」一篇を以て敢えてその輪郭を一言するならば、やはり「亡國の歌」ということになるだろう。すなわち、庾信自身の半生にまつわるエピソードは、確かにそれ自體重要な主題であるが、一方、篇中隨處で語られる庾信以外の多數の同國人たちの挿話群とともに「亡國」という事象の一面を表す構成要素ともなっていることに注目する立場から、本章はこの賦をまず「亡國」という大主題をうたう歌として捉え、それを檢證してみるものである。これは決して無暗な予測などではなく、次のように「哀江南賦」序文によって明確に察することができる。

六朝文學史の中ではそれ自體が駢儷體で書かれた文としても注目される「哀江南賦」序文は、本文に對してちょうど示意圖のような役割を果たしその梗概を知るのに便利である。當時の詩賦に冠せられた序文の中では珍しいほどに大部かつ詳細なものだが、そこで示されている内容は相當簡潔に絞ることができる。すなわち、冒頭、

粵以戊辰之年、建亥之月、大盜移國、金陵瓦解。余乃竄身荒谷、公私塗炭。華陽奔命、有去無歸。中興道銷、窮於甲戌。

粵^{ああ} 戊辰の年、建亥の月を以て、大盜國^{われ}を移し、金陵瓦解す。余身^{われ}を荒谷に竄し、公私塗炭す。華陽に奔命するに、去ること有るも歸ること無し。中興道銷え、甲戌に窮まる。

この四言十句のうちに「哀江南賦」本文で辿られる事柄は集約されている、と言ってもよい。要するに「亡國」の顛末である。以下、亡國にまつわる庾信の所感、苦痛悲哀の心情が古人故事になぞらえて披歴されるが、その核が端的に述べられているのは次の一節。

危苦の辭 無くんばあらず、惟だ悲哀を以て主と爲す（不無危苦之辭、惟以悲哀爲主）。

これは亡國にまつわる庾信の所感であると同時に、この敘述に際しての主な情感でもあるらしく、ともかく「哀江南賦」に於て「悲哀」という情感が核となることの

據りどころとしてこの一節は有力である。もう一つ「悲哀」という語を直接掲げている部分。

嗚呼、山嶽崩頽、既履危亡之運、春秋迭代、必有去故之悲。天意人事、可以悽愴傷心者矣。

嗚呼、山嶽崩頽して、既に危亡の運を履み、春秋迭いに代われれば、必ず故^{ふるき}を去る悲しみ有り。天意も人事も、以って悽愴として心を傷るべき者なり。

この「悲哀」の情が、單に亡國を體驗した個人の運命に對して催されるばかりでなく、國家破亡・北遷という環境喪失の事態にもまつわるものであることを、この一節を含む序文は予告している。そして實際本文を一讀すれば、そこでは梁朝どころか晉室の東遷時に溯って江南政權の興隆から、その約二百四十年後、事實上の江南政權崩壊とも言える梁朝滅亡までの、江南政權と庾氏一統の轉落の迹をひたすら辿る内容が確かめられるのである。

このように「哀江南賦」は、「亡國」の事態をめぐって時代や社會及び個人の「悲哀」が述べられた歌、という輪郭で捉えることができる。この輪郭は實に分かりやすい。何しろ亡國の混亂とそれに伴う悲哀、という内容は『詩經』『楚辭』の昔から歌われてきた、中國に於て比較的馴染み深い詩文の背景でありモチーフでもあるから。

では、この馴染み深いモチーフが實際「哀江南賦」では如何に表れているのか。詳細な論證は後に回すこととして、結論から先に言おう。

これまであまり重視されていなかったようだが、亡國の悲哀という文學の主題として普遍的な内容を持ちながらも、「哀江南賦」はこれを文學史の上で何がしかの系譜に歸屬させようとするとピタリと當てはまる先が意外にも斷定しにくい。けれどもそれはこの賦が文學史の上で孤絶していることを表すのではなくて、先ほど幾つか例を挙げた通り、むしろ六朝期詩文の間に多様に通じる要素がそこに集合しているためのことである。但し、その採り入れた諸要素には従前のそれに對する變換が見出され、それが實に興味深い。その第一は、亡國の悲哀というモチーフについて、その敘述の座標を當時一般的だった空間の中でのそれから、過程すなわち時間に従ってのそれへと變換させて述べていること。第二は、そのような敘述の結果、そこに所謂「推移の悲哀」に代表される、悲觀的な思念の對象としての時間、題材としての時間ではなく、具體的に敘述の中で機能しつつ存在する時間、言わば「悲哀の時間」の表現が實現していること。概ねこの二點に絞ることができる。どちらについても、まずこの作品が時間の進行に従った敘述であることが大きく關わ

っているらしい。以下に、「哀江南賦」のこうした傾向を確かめつつ、それが文學史の上でどのような展開として位置づけ得るかを考えていきたい。

二

本節ではまず、この「哀江南賦」に假に亡國の記録と言っても過言ではないほどの敘事的な側面を與えている、丹念に時間を追って梁朝滅亡の過程を述べる構造について検討してみたい。全體を一度に見わたすために、今便宜上敘述の内容によって本文を段落に區切ってみると、凡そ六段に分かつことができる。各部分の要點と句數は、左の通り。

- | | | |
|--------------------------------|---|------|
| 一：庾氏の系譜と庾信自身の青年期の經歷。 | ◎ | 六〇句 |
| 二：武帝の盛時から戊辰（五四八）侯景反亂を経て建康陷落まで。 | | 一七二句 |
| 三：建康から江陵へ長江溯上の避難の行程。 | ◎ | 五六句 |
| 四：梁元帝の中興から甲戌（五五四）江陵陷落まで。 | | 一三二句 |
| 五：江南遺臣の長安への移動中途の艱難辛苦。 | ◎ | 五二句 |
| 六：一聯の過程に對する所感。 | ◎ | 五六句 |

一見してわかる通り、初めから結びまですずっと事態の経緯を追う形、つまりこの賦の内容が時間の進行に従って配される形になっている。やはり、この長大な賦を通底する軸として「時間」の機能は無視し難い。ここでその「時」とは、庾信「哀江南賦」執筆の北周の時點から見て既に滅んだ王朝を流れていた時間、言い換えれば既に一つの完結をみた時間、所謂「絶對的過去」であり客觀可能な對象でさえある。それが座標軸となって、梁朝と庾信それぞれの得意の時期たる第一段落の「盛」を頂點としてより以下、第二～四段落と段落を追っての梁朝及び庾信の落魄衰滅の過程を経て、亡國後第五段落の「滅亡」の究極まで、述べられる事柄の性質は隆盛から衰亡へと下降傾斜の方向を辿るのをひたすら辿るという體裁になっている。

また、上で◎印を付したのは、庾信個人に關する内容の敘述が或る程度まとまって認められる段落。そこで各段それぞれの敘述の内容と句數の關係に目を向ければ、著しく句數の多い二・四段めは滅亡の軌跡を専らに述べるものであるのに對して、比較的小規模な三・五段で、庾信身邊の私的な敘述に織り混ぜるような形でそれを取り巻く江南社會の情況の描寫に相當筆が費やされている。もとより句數の多寡を萬能の目安と考えるわけではないが、歴史的な時間軸に従った篇中、庾信を取り巻く時代や社會に關わる敘述が占める割合の大きさというこの事實もまた、亡國の記録的側面を持つ「哀江南賦」を支える要素の一つとして全體の中で考えてみる

必要があるだろう。

こうして「哀江南賦」の輪郭を支える骨格は、亡國という事象について時間軸に従って時代や社會を述べる形式として捉えられるのだが、このように一代を通して辿る敘述の形と言え、やはり「史」の敘述、殊に年代を追って出來事を述べる編年體のそれが思い浮かぶ。

因みに、梁朝に関する編年體史書の一つ、何之元『梁典』⁵⁾の序に於て何之元自ら『梁典』の構成について説明するくだりを参照してみよう。何氏は、庾信と同じく梁朝の滅亡を體驗して後、陳に仕えた人物（『陳書』文學傳）。そこでは梁朝内部の情勢の變化によって「六意」すなわち六段に分けて、順に「追述」→「太平」→「敘亂」→「世祖」→「敬帝」→「後嗣主」と題している。この、時間の流れに對する節目の捉え方、そして全體を通して興隆から衰弱への下降の展開とする括り方は、「哀江南賦」の、時代や社會の相の要點を順に述べていく次第と符合するものである。王朝一代の興亡を時間軸に従って述べるというのは、「盛衰を表徴し、興廢を殷鑒」し、「一代を彌綸」することが任務と見なされる（『文心雕龍』史傳）歴史記述としてはむしろ當然な敘述の結構であろう。それと「哀江南賦」の敘述の軸が符合するのは、この賦が梁朝興亡の記録のような側面を持つ理由を、單にその表す内容（所謂「今事」）にばかりでなく、その内容を載せる敘述の軸そのものにも求めるべきであることを示唆するものではないか。

ところで、このように編年體史書の記述に準ずるような、直截に歴史的時間に伴う事象を取り上げ述べるという結構に於て、庾信に先立つ魏晉南北朝期の範圍で、「哀江南賦」と非常に近似する作品が、幾つか見當る。賈誼「過秦論」をはじめとして陸機「辨亡論」干寶「晉紀總論」等、一王朝の興隆と滅亡を主題と定めて論じた文が、それである。一見して明らかなように、いずれも五言詩や辭賦といったジャンルではなく、歴史記述「史」に、より近いところに位置するものであり、それぞれ特定の王朝の興亡の顛末を論じる形式に於て共通する。假に「興亡史論」と總稱するとしよう。

これらは、一王朝の興亡の過程を、節目節目を押さえつつ下降の時間軸に沿って一渉り語る骨格に於て共通し、その結果歴史記述と比べても引けをとらないほどに一代の歴史的流れの要所を押さええておりながらなお、究境、歴史的内容を題材として加工した「文」として認識されるものである點でも相似る。何れも「沈思翰藻」を旨とする詞華集『文選』の採録對象となっていること（それぞれ卷五三「論」・卷四九「史論」所収）が、これを裏づける根據の一つと言ってよい。一方、この一

群の中で、その論じる對象の王朝の別以外に個々の性格を異ならせているのは、各王朝に對する各作者の立場の相違であり、それは、各篇中での作者自身の表れ方——言わば「自敘性」——の濃さに直結する。つまり、亡朝の遺臣であるか否か、また亡朝を辨護する氣持ちがあるのかそれとも現王朝のために冷徹に亡朝の興亡を分析するのか、といった立場に個々違いがあり、それによって各作品の「自敘性」の度合いが異なるのである。例えば賈誼なら後者の立場で、その「過秦論」に「自敘性」は希薄、また干寶も史家として後者に當る。反對に前者の立場で「自敘性」も濃いのが陸機「辨亡論」で、「興亡史論」通有の形式プラス「自敘性」の兼備という點で「哀江南賦」と共通する要素を最も多く備えた作品と言え、それだけに對比してみる意義も大きい。ここで些か「辨亡論」を参照してみたい。

庾信或いは「哀江南賦」との類似、暗合という見方からすると、陸機「辨亡論」は實際その例に事缺かない。三國吳の名門出身でありかつその遺臣として勝朝の晉に生き長らえた陸機が著したという経緯がそもそも、庾信「哀江南賦」のそれと酷似している。無論庾信がそのことを十分意識し我が身を陸機に擬らえていたことは、「哀江南賦」に於て「陸機之辭賦、先陳世德」「逢赴洛之陸機、見離家之王粲」等、陸機が亡國の悲痛に本づいて著した他の詩賦に言及する句が見えることから察せられる。極端な話「哀江南賦」と「辨亡論」とをめぐる背景の大きな相違は、それを著した作者が、一方の庾氏が晩年に於て著し、一方の陸氏はその青年期に於て著した、ということくらいかも知れない。また内容に關しても「辨亡論」は夙に、客觀的に亡國の過程を分析する歴史論や政治論などではなく、亡吳にまつわる悲痛、陸機自身の祖先一統に對する顯彰と哀惜の念に支えられた作品であるということではほぼ共通の認識を得てきている。そうした論に對する後世の理解もまた「哀江南賦」のそれと甚だ似ている。何れも「故郷喪失者のうた」「國家破亡の悲哀」「羈旅詩人」等のイメージによって記憶される作品であること、周知の通りである。

さて『晉書』卷五五本傳では「辨亡論」執筆の事情を次のように記す。

年二十にして吳滅ぶ、…孫氏は吳に在り、而うして祖父は世よ將相と爲り、江表に大勲有るを以て、孫皓の擧げて之を棄てしを深く慨き、乃ち（孫）權の得し所以と、（孫）皓の亡いし所以とを論ず。又た其の祖父の功業を述べんと欲し、遂に辯亡論二篇を作る（年二十而吳滅、…以孫氏在吳、而祖父世爲將相、有大勲於江表、深慨孫皓擧而棄之、乃論權所以得、皓所以亡、又欲述其祖父功業、遂

作辯亡論二篇）。

すなわちこの論は國家興亡に関わる事柄（公）と陸氏一族の盛衰に関わる事柄

（私）との二つの内容を述べる、というわけである。それは具體的には、漢末の混亂の情勢から三國鼎立、就中呉の内部情勢、その滅亡までの「所以」すなわち過程に織り混ぜて、それぞれの局面に伴う陸氏一統の活躍を語る形をとっている。例えば「辨亡論」上篇の場合、「昔漢氏失御」と後漢の衰退期から始まり、「呉武烈皇帝」孫堅の興起、「長沙桓王」孫策、「大皇帝」孫權に極まる隆盛、「大皇既没」以降の孫皓に至る滅亡の経緯、といったように呉一代の盛衰を辿る軸がまず認められ、そして各所ではその段階を象徴するような事柄や人物が提示されていく、というように。「論」という體裁ゆえもちろん「嗚乎、哀哉」とか「悲矣」といった亡國に對する直截な悲哀の感情の表現こそ挟まれていないものの、「辨亡論」はこのように言わば公私二つの旋律を畳み込み、その両面から織りなす「興亡歌」の様相を呈している。こうした二つの旋律が協和し合って「悲哀」を奏でる構造は、本節冒頭での要約一覧の如くまた以下本章で論ずる如く「哀江南賦」のうちにもやはり見出だせる。「哀江南賦」「辨亡論」の相似は、單に庾信・陸機二人の亡國體驗・遺臣という境遇や立場に絡む作品の成立事情の共通ばかりでなく、作品の具體的な構造の共通としても認められるのである。もはや偶然と言うよりは、積極的に「興亡歌」の系譜の存在を想定してよいのではないか。

ここで、改めて「辨亡論」の語りの構造という一點に注目してみよう。一見「分裂した二つの要素」に見える國家興亡に関わる事柄（公）と陸氏一族の盛衰に関わる事柄（私）とは、實はまるきり「分裂」し平行し合う要素なのではなく、ともに同一の時間軸上で展開した事象という點でピタリ重なり合うもので、篇中、この二つの要素はその時間軸に従って互いに織り合って一つの語りの形を成している。すなわち「辨亡論」を支える語りの軸がこの時間軸であることは紛れもない。

いま少し、時間軸に従って語り述べる、という「興亡史論」通有の語りの形式について考えてみたい。この語りの形式は、溯って賈誼「過秦論」に於ても既に見られる。否、そこで固まったと言ってよいかも知れない。ともかく、論じる對象である秦朝について「秦孝公據崤函之固」と戰國初、秦が一諸侯であった時代から説き起こし、時勢に乗っての隆昇の過程から「及至秦王」始皇帝の絶頂期、以下「山東豪俊遂並起而亡秦族矣」の滅亡までを追ひ、そこにその興亡に對する賈誼自身の見解が付される、という形をとる。「辨亡論」にしる「過秦論」にしる何れも、過程を辿る構造は言わばそれぞれ對象とする王朝の興亡の経緯を論ずるという主旨の

下、そのために必要な個々の事柄を採りあげ、作者の論旨に適うよう再構成する際に、その再構成の軸として敷かれたものである。このように時間軸に従っての敘述を作者の主旨を展開するための場とする構造は、無論やがて「哀江南賦」に相通じるものである。ここに一つの語りの系譜を辿ることができないだろうか。

これについて錢鍾書『管錘編』の「賈誼過秦論」條（第三冊八八八頁）に興味深い記載が見える。

按ずるに、項安世の項氏家説卷八に、賈誼の過秦、陸機の辨亡は、皆賦體なり、と。洵に曲を識り眞を聽く之言なり（按項安世項氏家説卷八、賈誼之過秦、陸機之辨亡、皆賦體也。洵識曲聽眞之言也）。

この條、錢氏の論は、賦だの記だのと文體意識に縛られて文そのものを見損なうことの愚を問題とし、その枕として項氏の説とそれへの同意が示されているわけである。言うまでもなく「賦體」の基本は「鋪陳」である。錢氏のこの發言は、「過秦論」「辨亡論」に於ける、時間座標に沿った興亡の経緯の敘述の型に「鋪陳」性の一端を認めればこそなされたと考えられる。第四節で詳しく述べる通り、文學史及び文學批評史を通じて歴史的時間の座標に沿った敘述の「鋪陳」性に目を向ける積極的な意見が、空間の「鋪陳」への注目に比べて少ない中で、これは貴重な發言である。錢氏がこの條でいみじくも提起する如く、硬直した文體意識を取り拂えば、陸機「辨亡論」をはじめとする「興亡史論」と「哀江南賦」との間に見出された、時間座標に沿って事象を述べる構造の類似には、時間座標に沿って事象を述べ列ねていく「鋪陳」の類型として文學史上かなり重要な意義が見出される。これはまさに「文史の時代」である六朝を通じて存在するにふさわしく、「文」の洗練と歴史記述の方法の確立の雙方の動向に密着した「鋪陳」の型ではないか。

以上、「哀江南賦」が江南興亡にまつわる時間軸によって展開していく構造をめぐって主としてその系譜に即して考察を試みてきた。今度は、節を改めてこの軸に沿って述べられる本文の内容の具體的な傾向を見てみたいと思う。

本節初め既に觸れた通り、本文に於て、亡國の過程を辿る敘述と庾信の個人的話柄は、交互に入れ替わるように表れる。ちょうどそれは、饒宗頤氏が顔之推「觀我生賦」と比較して「哀江南賦」の敘述について「（哀江南賦は）既に時代を以て經と爲し、復た身世を以て緯と爲す」（「讀庾信哀江南賦」）と簡潔に言われた、その構圖に當るであろう。確かに賦の全體像はその通り、時代（環境）と庾信個人の

両面に互って梁朝興亡の過程に起きた事柄を述べていくものである。そのことを念頭に置きつつ、いま本論では、第二～四段落中の時代や社會の出來事を主とした敘述部分を重點的に検討するつもりである。何しろ、この部分は、この賦の二大要素——時代・社會と個人——相互の関わりに於て「悲哀」を表す、時間軸に沿った過程描寫の主要部に當るから。そして先回りして言えば、ここに、悲哀の心境告白にではなく、盛から衰へと順に配された各節の事象と事象の連續や對比によって「亡國の過程」に伴う下降の悲哀に在る、この賦の敘述の重點が、端的に窺われるのである。

三

「哀江南賦」の敘述は「用古典以述今事」（陳寅恪「讀哀江南賦」）¹⁷）とも言われるように、具體的には夥しい典故によって支えられている。その典故の大半を、個人の「悲哀」に通じるもの及びそうした個々人の「悲哀」の背景となるような國家や社會の出來事を示すものが占め、それがこれまで見てきたような「哀江南賦」の輪郭を支えているわけである。また「今事」とは、『南史』『梁書』『周書』等の記録と合致するような梁朝に関する具體的な事柄を指すが、實際のところ「古典」と「今事」との關係を正確に跡づけることは非常に困難で、今日でも倪璠¹⁸の注釋に頼らざるを得ない。無論その倪璠¹⁸の考證とて完全無關なものとは言えず、大いに検討の餘地をのこすこと、周知の通りである。但し、本論は文學史上「哀江南賦」の敘述としての価値は、そういった一つ一つの「今事」の推定の如何なるかに動かされぬところに存すると確信し、それを解明することを専らにするものであるので、「今事」の推定については概ね倪注の考證に據ることにした。むしろ重視したいのは「古典」のほうであり、それが作り上げる「亡國」のイメージである。

「哀江南賦」に於て「今事」を表すのに用いられる「古典」とは、當然と言えば當然のことながら、春秋戰國、秦漢の際、兩漢の際、漢末魏初、吳末、西晉等、梁以前の史上でも際立って凄惨な國家崩壊や政權をめぐる抗爭が展開した局面を表すことによって知られたものが壓倒的に多い。その「古典」自體が齎す「亡國」のイメージと「今事」が二層三層に重複して、梁朝亡國の過程にまつわる「悲哀」の敘述となっている。それを以下に點検してみよう。

三一（一）

梁武帝一代の間の興廢を辿る第二段落は、まずその盛時について述べる五二句から始まる。武帝時代の梁朝の繁盛ぶりを形容する言葉として後世よく引用されることになる「五十年中、江表無事」という句も、この一節に含まれる。

この盛時の敘述は、無論梁朝盛時を懐かしむメモリアルとか、或いは以下に展開する滅亡の敘述に先立って置かれることによる明暗の對比的効果とかの意義を持つだろう。

しかし、そういう定石通りの意義づけから一步踏み込んで、いまこれを盛から衰へ向かう「哀江南賦」全體の軸上で眺めてみれば、一見ありきたりな「盛」を示す言葉が併せ持ち得る亡國の「悲哀」の要素をここは分擔している、とも言える。すなわち、示す内容が究極の「盛」であればあるほど、それは同時に亡國一步手前の爛熟に通じ、やがて出現する亡國の「悲哀」を逆説的に暗示するものとして働く。そのような「盛」を表す言葉に對して既に共有されたイメージの層のようなものが、ここには窺われるのである。

例えば、その冒頭。

於時朝野歡娛、池臺鐘鼓、里爲冠蓋、門成鄒魯。連茂苑於海陵、跨橫塘於江浦。東門則鞭石成橋、南極則鑄銅爲柱。橋則園植萬株、竹則家封千戶。西^書浮玉、南^琛沒羽。吳^歆越吟、荆^艷楚舞。草木之遇陽春、魚龍之逢風雨。五十年中、江表無事。

時に朝野歡娛し、池臺に鐘鼓あり。里は冠蓋と爲り、門は鄒魯を成す。茂苑を海陵に連ね、橫塘を江浦に跨く。東門は則ち石に鞭うちて橋と成し、南極は則ち銅を鑄て柱と爲す。橋は則ち園ごとに萬株を植え、竹は則ち家ごとに千戸に封ず。西の^{おくりもの}書は浮玉、南の^{たから}琛は沒羽、吳の^{うた}歆越の吟、荆の^{うた}艷楚の舞。草木の陽春に遇い、魚龍の風に逢うがごとし。五十年中、江表は事無し。

ここで用いられている詞句の用例を從來の詩文の中に辿れば、例えば「京殿苑獵」賦系で京都の繁華や帝王の盛大な行事の場面、しかもその繁榮充實の極限でそれを歌うために用いられ、以後詩史に定着を見た類のものが多い。

一句め「朝野歡娛」について。倪注が引く張協「詠史詩」の句「昔在西京時、朝野多歡娛」（『文選』卷二一）がそうであるように、文字通りには太平を極めた世の中を表すこの語は、場合によっては繁榮の極致と背中合わせの、凋落の開始一步手前、飽和爛熟の世をも含意する。班固「東都賦」でこの語の現れる段階などは興味深い。すなわち、東都洛陽の安泰を述べ盡くしたその後に「是に於て聖上萬方の歡娛し、又た膏澤に沐浴するを觀、其の侈心の將に萌して東作に怠らんとするを懼る（於是聖上觀萬方之歡娛、又沐浴於膏澤、懼其侈心之將萌而怠於東作）」とある。そこで直接に形容する情況は確かに太平は太平だが、その情況を戒めるべき段階と認める言葉として發せられているわけである。

「池臺鐘鼓」も同様で、「宮館臺榭、沼池苑囿」（楊雄「羽獵賦」序）というように帝王の力の充實ぶりを示すものである池臺、その建物の中で奏される鐘鼓、ともに盛時のシンボルではあるが、同時に、上に立つ者の資質如何によっては却って亡國に一番近い状況を端的に示す事象にもなる。それはこの語をさらに溯った『左傳』昭公二十年の記事で、齊景公に晏子が「有徳の君」の治世に對比させて説く「淫君」の世を表すものとして「高臺深池、撞鐘舞女」が挙げられているところから、既に方向づけられていたと言える。また、これらの語が、繁榮の極點を示しつつ、その底にやがて来るべき滅亡のイメージを透かし見せるような二重の意味を持つのは『孟子』梁惠王上「文王以民力爲臺爲沼、而民歡樂之。……古之人與民偕樂、故能樂也。……民欲與之偕亡、雖有臺池鳥獸、豈能獨樂哉」にも辿ることができる。「哀江南賦」のここも當然このような典故を踏まえているであろう。それによって、字句の表面が示す隆盛の安樂の底に、悲哀、の予兆を帯びる、という獨特の、悲哀、の分擔を果たしている。

その下、梁朝の勢力範圍、物産人材の充實ぶり、外交の活況、風教の安定等、王朝賛美を旨とする文なら必ず言及される項目が一渉り觸れられる。「連茂苑於海陵、跨橫塘於江浦」などは倪注の引く通り、左思「吳都賦」「魏都賦」で陸運、水運の便利さを言う場面での用例を背景に持つものであるし、また「橘」「竹」「吳歊越吟、荆艷楚舞」といずれも江南の空間に密接に結びつく植物や歌舞の名が續けざまに挙げられていく。このどれも南方の豊かさや魅力を表す詞句として定番と言っても差し支えない歴史（ヤリ）を持つものばかりを列ねた一節、これが、庾信の江南に對する充實した記憶と思い入れを示すものであることは想像に難くない。

しかし實際には、充實した江南の状態に觸れながらもそれへの郷愁や哀惜の心情を直かに訴えるような言葉は見當らない。それは、この後に續く「哀江南賦」の他の部分でも同様で、例えば侯景によって破壊されいく王朝の過程を述べる場合などでもそれを痛切に傷む心情を顯わには挿し挟まない。

本項で挙げる例は、從來どちらかと言えば庾信が自己の經歷を述べるのに付隨する參考部分的存在として軽く觸れられる程度できた嫌いのある部分である。しかし賦の内容の實際はむしろ反對で、「哀江南」という篇名から直ちに予想される、庾信個人の「あの日に返りたい、南に歸りたい」という懸戀の情の訴えは、序文と末段に於てしか見られず、庾信と庾氏に關わる私事に類する内容である首段も含めて本文の主要部分では、庾信個人に關わる内容は、その時自分が何をしていたか、どういう状況だったか、という事柄に言及する程度の挿入なのである。その分、時代

の諸事象として語られる内容がそれぞれに、興亡の過程に伴う、悲哀、を擔當しているわけで、ここもそれが窺われる一節である。

三（二）

次に、滅亡の過程の敘述を見てみよう。言うまでもなく、侯景の決起から金陵陷落、元帝の中興及びその敗亡までを述べるこの部分で注目されるのはやはり、抗爭にまつわるモチーフである。

特に、侯景の決起進攻とその前にガタガタと崩れ去る梁朝側の雙方を描寫する第二段落後半、及び江陵に於ける元帝の中興期のさまを述べる第四段がこれに當る。

一體に戰亂後の荒涼の情景や離散の苦しみを歌う詩文なら例に事缺くことはないが、戰亂の經緯を十分に字句を費やし克明に述べた五言詩或いは辭賦となると、庾信以前の範圍ではなかなかこれと言った作品が見當らない。例えば『楚辭』九歌「國殤」などは、弓取り鎧を着て武士が戦う戦場を歌った作品と言えるかもしれない。

操吳戈兮被犀甲、車錯轂兮短兵接。旌蔽日兮敵若雲、矢交墜兮士爭先。凌余陣兮躋余行、左驂殪兮右刃傷。霾兩輪兮繫四馬、援玉枹兮擊鳴鼓。天時墜兮威靈怒、嚴殺盡兮棄原壑。帶長劍兮挾秦弓、首身離兮心不懲。誠既勇兮又以武、終剛強兮不可凌。身既死兮神以靈、子魂魄兮爲鬼雄。

吳戈を操り犀甲を被る、車轂を錯え短兵接す。旌は日を蔽い敵は雲の若く、矢は交も墜ち士は先を争う。余が陣を凌ぎ余が行を躋み、左驂は殪れ右も刃傷せらる。兩輪を霾め四馬を繫ぎ、玉枹を援き撃ちて鼓を鳴らす。天時墜ちて威靈怒る、嚴として殺され盡して原壑に棄てらる。長劍を帯び秦弓を挟み、首身離るも心は懲らず。誠に既に勇にして又以に武なり、終に剛強にして凌ぐべからず。身は既に死するも神は以に靈なり、子が魂魄鬼雄とならん。

吳戈、犀甲、車轂、短兵、旌、矢、士、玉枹、鳴鼓、長劍、秦弓といった武具が多數配されており、これらによって戦況の展開が表されている。この詩は「國殤」と題され、洪興祖『補注』ではそれを解して「國事に死する者を謂う（謂死於國事者）」ものであると説く通り、詠嘆の焦點は無論戦闘の結果死んでしまった者、死者の哀悼に違いないが、そのためにまず戦死に至るまでの經緯を事柄の連續によって示していることに注意したい。「嚴殺盡兮棄原壑」「首身離兮心不懲」など、結果として戦の凄惨な側面も表れているものの、ここではそれが主というわけではなく、むしろそれすらも抗爭の展開の一部として他の戦闘の内容と等しく國事に殉じた者への哀悼のための場を構成している。戦闘に殉じた者への哀悼の意を、綿々た

る哀悼の言葉の多用などでなく、戦闘そのものの叙述によって表すという形の明らかな一例と言ってよいと思う。

また、庾信以前の五言詩・辭賦の範囲でこのような形で抗争を表したものは『藝文類聚』『初學記』等類書の「武」部に於てまとまって見られる。それらの中には王粲「從軍詩」のように、この「哀江南賦」にも通じる個人的な征役の感慨に本づいたものもある一方、魏の曹操・曹丕の戦功を讃えてその行軍のさまなどを歌った類の勇ましいもの・公的な要素の強いものも多い。後者の場合は、いきおいその内容は軍容の勇壮さや見事さを述べることに重点が置かれる傾向を持つ。つまり、戦勝の当事者の側から發せられた聲なのであって、自ずと戦そのものを美化した表現が目立ち、抗争に伴う凄惨な要素は淘汰されてしまっているのである。

とは言え、庾信自身の他の詩文のうちにも、北周期の作として「同盧記室從軍」「侍從徐國公殿下軍行」等、戦の展開に相當字句を費やした五言詩が見える。それらが「奉和○○」「從○○」と題することからもわかる通り、北周の諸侯王の征役を壽ぐ武勲詩のような性質を帯びていることは否めないが、しかし「哀江南賦」のこの抗争場面での表現や字句と重複するものも少なくないことは参考になるのではないか。なお、これら庾信の從軍をめぐる詩については、本論第三章で詳論する予定である。

では「哀江南賦」の例を見てみよう。

始則王子召戎、姦臣介冑。既官政而離^遼、遂師言而泄漏。望廷尉之逋囚、反淮南之窮冠。出狄泉之蒼鳥、起橫江之困獸。地則石鼓鳴山、天則金精動宿。北闕龍吟、東陵麟鬪。爾乃桀黠橫扇、馮陵畿甸。

始めは則ち王子戎を召き、姦臣介冑す。既に官政にして離^遼し、遂に師言にして泄漏す。廷尉の逋囚せらるるを望み、淮南の窮冠を反す。狄泉の蒼鳥を出だし、橫江の困獸を起こす。地は則ち石鼓山に鳴り、天は則ち金精宿を動かす。北闕に龍は吟え、東陵に麟は鬪う。爾うして乃ち横扇を桀黠し、畿甸を馮陵す。...

少々繁雜にわたるが、各句の本づく典故とその表す事柄（今事）とを見てみたい。まず「王子」とは蕭正徳を指し、侯景を梁の域内に招き入れ王室内部からの崩壊を生んだ張本人としてその事蹟を西晋の趙王倫になぞらえたのが初二句。そして「師言而泄漏」は春秋時代齊の内部崩壊の張本ともされる『左傳』僖公二年「齊の寺人貂始めて師を多魚に漏らす（齊寺人貂始漏師于多魚）」の記事に、同じく「官政而

離^遼」は襄公十四年、范宣子に答えた戎子駒支の言葉「自是以來、晉之百役、與我諸戎相繼于時、以從執政、猶殺志也。豈敢離^遼」に本づく。倪璠はこれを、蕭正徳が起死回生を狙って鄱陽王に送った密書が侯景に漏れて誅せられた事實（『南史』卷五一）に結びつけて釋している。

「望廷尉之逋囚、反淮南之窮冠」の二句もそれぞれ晉の蘇峻が「我は能く山頭に廷尉を望むも、廷尉に山頭を望むこと能わず（我能山頭望廷尉、不能廷尉望山頭）」と言って反亂を起こした（『晉書』卷一〇〇）故事、三國魏で諸葛誕が淮南に據って反亂を起こした故事を踏まえる。但し、もとの故事は共に舉兵して平らげられたものであるのを、ここでは逆轉して却って反逆者侯景の勢力復活の事に當てている。次の、侯景その人を喩えた「狄泉之蒼鳥」「橫江之困獸」もやはり胡賊の侵入蹂躪に通じる故事を、それぞれ『晉書』隱逸傳・『左傳』定公四年に本づく。これらは、それぞれ上古から近古まで時代の別はあるが何れも國家擾亂の記事中、或る特定の人物の行爲や言動として記されたものを用いていて、強大化していく侯景のありさまの背後に、そうした歴代の謀叛と擾亂のイメージをだぶって見出すのはそう難しいことではない。一種の二層構造といってよいかも知れない。また、以上列ねた侯景臺頭の事態について、梁朝治下それまでに實際起きた災異の驗としての意味を添える言葉だと倪注釋くところの「地則石鼓鳴山、天則金精動宿。北闕龍吟、東陵麟鬪」は、やはり國家の凶運の予兆として既成のイメージを持つ災異の詞群である。このように、「哀江南賦」の中で最も事態の進行に従った叙述であることの明らかな部分で、それが具體的には、滅亡や擾亂のイメージを帯びた典故・故事の多用によって、常に梁朝に限らぬ歴代の滅亡・擾亂のイメージの堆積の中で梁朝のことを述べていくという構造を支えている。

いま一つ例を舉げてみよう。事態進行の叙述に於て亡國への預兆は次のようにしても示される。臺城攻防に當って梁朝のために身を賭して奮戦した諸臣武將を舉げていく部分。

遂乃韓分趙裂、鼓臥旗折。失羣班馬、迷輪亂轍。猛士嬰城、謀臣卷舌。昆陽之戰象走林、常山之陣蛇奔穴。五郡則兄弟相悲、三州則父子離別。護軍慷慨、忠能死節。三世爲將、終於此滅。濟陽忠壯、身參末將。兄弟三人、義聲俱唱。主辱臣死、名存身喪。狄人歸元、三軍悽愴。尚書多算、守備是長。雲梯可拒、地道能防。有齊將之閉壁、無燕師之臥牆。大事去矣、人之云亡。申子奮發、勇氣咆勃。實總元戎、身先士卒。胄落魚門、兵填馬窟。屢犯通中、頻遭刮骨。功業夭枉、身名埋沒。

遂に乃ち韓のごとく分かたれ趙のごとく裂かれ、鼓は臥れ旗は折らる。羣れを失いたる班馬は、輪くるまを迷わせ轍めぐを亂す。猛士は城を嬰らし、謀臣は舌を卷くのみ。昆陽の戦に象林を走り、常山の陣に蛇穴に奔る。五郡は則ち兄弟相悲しみ、三州は則ち父子離別す。護軍は慷慨して、忠にして能く節に死す。三世に將爲りて、終ついに此に於て滅ぶ。濟陽は忠壯にして、身は末將に參じわる。兄弟三人、義聲とも俱に唱わる。主は辱められ臣は死し、名は存するも身は喪う。狄人元を歸せば、三軍悽愴たり。尚書は算はかりごと多くして守備是れ長し。雲梯拒ぐべく、地道能く防ぐ。齊將の壁を閉ざすこと有るも、燕師の牆に臥すこと無し。大事去れり、人ここに亡ぶ。申子奮發して、勇氣咆勃たり。實まことに元戎を總べ、身づから士卒に先んず。冑は魚門に落ち、兵は馬窟うまに填まる。屢しばしばば通中を犯して、頻りに骨を刮えぐらるるに遭う。功業は夭くして枉げられ、身も名も埋没す。

庾信の集を繙くと、しばしば重複する内容の表現を何箇所かに互って見かけるが、「五郡則ち兄弟相悲、三州則ち父子離別」は「傷心賦」にもほぼそのまま見える句。但しそちらでは次のようにして表れる。

在昔金陵、天下喪亂、王室板蕩、生民塗炭。兄弟則五郡分張、父子則三州離散。

まず北周の今から「在昔」へと時を一氣に溯り、「金陵」という空間を設定。以下「天下→「王室」→「生民」と句を追ってその視界が絞られていき、そこで最も個別的な局面として五郡兄弟、三州父子が示される。こういう形では、極めて個別的な例でありながら、同時に唯一の代表的な例として一般的な意義も付加される。對してこの「哀江南賦」の二句は、そういうコンテキストで捉えられない。ほぼ全く同じ言葉によりながら、こちらは前後に配する幾つかの事例とともに金陵陷落直前、梁朝諸臣の奮闘の事蹟の一端を擔なう、そういう部分として組み込まれている。

「護軍」とは韋粲、「濟陽」の兄弟とは江子一・子四・子五の三兄弟、「尚書」は羊侃、「申子」は柳仲禮。それぞれ官名・郡望等によって人物を直截に示している。一方、個々の事蹟について付け加えられる二句一對の評「三世爲將、終於此滅」「主辱臣死、名存身喪」「大事去矣、人之云亡」「功業夭枉、身名埋没」等は『國語』『詩經』『左傳』『史記』等に本づくもので、何れも「滅亡」に結びつくイメージを帯びたものばかりである。このような典故の多用によって自ずと、個々の事蹟がどうこうという臺城攻防の一件にまつわる特殊性よりは、そこに潜在する「滅亡、必至の側の情勢として普遍的なイメージのほうが強調されることになる。

因みに、ここでの語り手庾信はと言うと、以上の出來事に自身の存在を絡ませるということもなく、専ら事態に深く結び付いた烈士の提示とそれらに對する評論を爲す存在として機能している。

三一（三）

第四段落には、この「哀江南賦」全篇の中で第六段落以外に唯一往時を哀惜し回想するモチーフの明らかな一節を含む。

「是に於て西楚霸王、劍を繁陽に及ぼす（於是西楚霸王、劍及繁陽）」から始まるこの段落では「西楚霸王」項羽に比される元帝蕭繹の代の中興と敗亡とが述べられる。が、その中で元帝の先代簡文帝の辿った命運に觸れる一段があるのである。實際の歴史的な順番としては簡文帝蕭綱のほうが元帝の先代に當る。とは言え、ほとんど名を留めるのみで在位期間らしい期間を持たないこの簡文帝は、「哀江南賦」の時間座標の目盛りからは外れ「西楚霸王」元帝が決起して侯景を平らげ一息ついたところで、金陵に因む武帝代回顧がなされる中での回想對象として述べられるのである。その結果、この一節は「哀江南賦」本文中、時を追って述べ繼いでいく語りの座標軸が一時頓挫し、時間を遡る回想的敘述形式による唯一の部分として注意を引くことになっている。

昔之虎踞龍盤、加以黃旗紫氣、莫不隨狐兔而窟穴、與風塵而殄瘁。西瞻博望、北臨玄圃。月榭風臺、池平樹古。倚弓於玉女窗扉、繫馬於鳳凰樓柱。仁壽之鏡徒懸、茂陵之書空聚。若夫立德立言、謨明寅亮。聲超於繁表、道高於河上。更不遇於浮丘、遂無言於師曠。以愛子而託人、知西陵而誰望。非無北闕之兵、猶有雲臺之杖。

昔の虎の踞うづくまり龍の盤わだかまり、加うるに黃旗紫氣を以ってするも、狐兔に隨いて窟穴し、風塵と與に殄瘁せざるは莫し。西のかた博望を瞻て、北のかた玄圃に臨む。月榭風臺、池は平らぎ樹は古びたり。弓を玉女の窗扉に倚かけ、馬を鳳凰の樓柱に繫く。仁壽の鏡は徒しく懸かり、茂陵の書は空しく聚まる。夫の立德立言、謨はかりごと明つつしみあきるく寅亮らかなるが若きは、聲は繁表より超え、道は河上より高し。更に浮丘に遇わずして、遂に師曠に言無し。愛子を以って人に託するも、西陵と知りて誰か望まん。北闕の兵無きにはあらざれども、猶お雲臺の杖あるがごとし。

「仁壽之鏡徒懸、茂陵之書空聚」については、北周明帝を悼む庾信の詩「和宇文内史入重陽閣」にもほぼ同様の表現「徒懸仁壽鏡、空聚茂陵書」が見える。晉洛陽仁壽殿中の巨大な銅鏡、漢武帝が自らの墓陵に斂めさせたという道書數十卷、どちら

も生きて用いる主あってこそ価値ある贅澤品であり、嗜好品である。その前二句の「玉女窗扉」「鳳凰樓柱」もともに驕奢の世界に属する事物。殊に鏡・玉女・窗扉・鳳凰・樓柱いずれも南朝宮體詩の艶麗な世界を彷彿とさせる語彙である。加えて「博望」「玄圃」も、武帝の先の皇太子昭明太子蕭統に因む宮苑の名。王朝が危殆に瀕する前に亡くなった昭明太子に係わる、南朝末期梁朝の艶麗なイメージを帯びる言葉である。そういった名詞群が、ここでは本来置かれるべき華麗繁榮の情景ではなく、むしろ正反對の衰落や荒廢の情景に結びつけられている。「昔」から王者の兆しが幾つも立った江南の地が、今は「狐兔」の跋扈する野に、「玉女窗扉」「鳳凰樓柱」には、雅な宮女の代わりに武具の「弓」「馬」が配され、「仁壽之鏡」も「茂陵之書」もそれをを用いるべき主が不在の空虚な状態を表す。そして簡文帝本人に関する回想にしても、人品・學問を稱するかのような語句を用いながら、結局その行爲を空しいものとして結んでいる。

ここでは、華麗で豊かな常態のイメージを持った事物を、その本来の目的と正反對の空虚や荒廢の状態を表す言葉に繋聯することによって、眼前の寂涼感を強調する、という六朝期の詩文にはむしろ常套的とも言える手法が認められる。時間の推移に伴う事物の下降というモチーフを踏まえることによって、²⁹「悲哀」は他の部分に比べてよりはっきりと表れている。

三一（四）

最後に梁朝滅亡後、梁朝遺民が江南から北地へと移される旅途についての敘述を見てみよう。ここには樂府や古詩以來建安詩を通して詩文の主題として定着した流氓・離別にまつわる哀感のモチーフが色濃く出ている。

水毒秦淫、山高趙陲。十里五里、長亭短亭。饑隨蟄燕、暗逐流螢。秦中水黑、關上泥青。於時瓦解冰泮、風飛電散。渾然千里、淄澠一亂。雲暗如沙、冰橫似岸。逢赴洛之陸機、見離家之王粲。莫不聞隴水而掩泣、向關山而長嘆。

水は秦の淫に毒せられ、山は趙の陲よりも高し。十里五里ごとに、長亭短亭あり。飢えては^{ふゆごもり}蟄^おの燕を^{やみ}随い、暗には流^とぶ螢を^お逐う。秦中 水は黒く、關上 泥は青し。時に瓦のごとく解かれ氷のごとく^い泮^なかれ、風のごとく^{いなずま}飛^まび^は電のごとく散る。渾然たる千里、^し淄^{じょう}も^{ひとえ}澠も一に亂る。雲は暗きこと沙の如く、氷は横たわること岸の似し。洛に赴く陸機に逢い、家を離れし王粲に見ゆ。隴水と聞きて泣^{なみだ}を掩わず、關山に向かいて長嘆せざるは莫し。

四言句を基調として、疊みかけるように連ねるこの一節で、「雲」「水」「氷」の「暗」「黒」など、感觸の冷たさを直感させる天象類をはじめ、「隴水」「關山」

まで、「苦寒行」「度關山曲」等、征人行役の辛苦をモチーフとした樂府詩に常用される語句が目立つ。しかし、そのように直接には北地の自然環境の厳しさや險しさを表す効果を持つ語彙であって、更に歴史的な艱難にまつわる典故を踏まえているものも多い。例えば「饑隨蟄燕、暗逐流螢」二句などでも、それぞれ西晉末、後漢末の争亂下の悲惨を伝える故事が背景にある、というように。

況復君在交河、妾在青波。石望夫而逾遠、山望子而逾多。才人之憶代郡、公主之去清河、栩陽亭有離別之賦、臨江王有愁思之歌。別有飄飄^{いよい}武威、羈旅金城。班超生而望返、温序死而思歸。李陵之雙鳧永去、蘇武之一雁空飛。

況んや復た君は交河に在り、妾は青波に在り。石に夫を望めば^{いよい}逾よ遠く、山に子を望めば^{おも}逾よ多し。才人の代郡を憶い、公子の清河を去るや、栩陽亭に離別の賦あり、臨江王に愁思の歌あり。別に武威に飄飄とし、金城に羈旅するもの有り。班超は生きて返らんことを望み、温序は死するも歸らんことを思う。李陵の^{とこし}雙鳧 永えに去って、蘇武の一雁 空しく飛ぶ。

庾信には、かつて梁元帝らとともに王褒の樂府「燕歌行」に唱和して競作した³⁰「燕歌行」があるが、出征兵士を待つ妻の思いの形を取って述べたとは言えそれはいかにも閨怨詩らしい、艶なものである。「哀江南賦」のこの一節に於ける、出征した者或いは出征する者の立場からの生別離苦を訴えるモチーフと比べると、「燕歌行」に現實の緊張感が缺如していることは言うまでもない。前一節の「赴洛之陸機」「離家之王粲」及びこの節の「班超望返」「温序思歸」「李陵之雙鳧」「蘇武之一雁」等、羈旅漂泊の境涯であまりにも有名な古人の名はこの賦の中で他所に見えるものもあるし、「擬詠懷二十七首」など庾信の羈旅感を歌う他の作品でも往々用いられてお馴染みの、庾信自身及び庾信同様の羈留の境遇に在る梁朝遺臣の比擬對象。

この段に至って、やはり「今事」を述べる事柄中心の敘述には變わりないものの、それを表す語句は直接に生別離苦に関わるものが主となって、事柄の悲哀性は先に見た(一)(二)(三)の例のどれよりもはっきりと窺われる。ちょうど梁朝滅亡が決定的になって時代環境も庾信個人に関わる内容も下降していくのと反對に、その内容が帯びる³¹「悲哀」、性だけが顯著になっていく、という関係になっているのである。

以上「哀江南賦」本文、興亡の過程の具體的な表現について四點ほど挙げてみた。江南での太平謳歌の世に始まり、侯景の亂を境とする争亂と崩壊の過程、元帝中興期からの金陵回顧、王朝滅亡後羈旅に伴う生別離苦まで、個々のモチーフはど

れも一代の興亡に関わるものである點で一致する。が、他方、六朝期を通じて既に詩賦の中で馴染み深いものもあれば、庾信以前の詩賦ではあまり見られないか、或いは前例としては檄文や史論などの文の中に常用されるものもある、というようにそれぞれの來歴は異なり多彩でもある。個別でも國家興亡の諸側面に關わる内容として十分に用を成すようなこれら多彩なモチーフが、この梁朝興亡の時間軸上で、前後の他のモチーフとの係わりの中に改めて配されることによって、一つの完結した「時間、世界を形づくる。これはまさに人事＝事柄の鋪陳ではないか。しかもその相互の關係は、時間軸の進行に伴って、より深刻な「悲哀、性を帯びたモチーフが配されるものとなっている。一言で言うなら、治→亂→亡、と次第に深刻さを加えていくモチーフの配列が、時間とともに下降する一時代の相を表しているのである。これは、下降するから「悲哀、が生じる、というよりは、むしろ各モチーフの「悲哀、の強まりが、下降の表現を生む、という仕組みと言えよう。

ここで「哀江南賦」に於ける敘述の在り方をめぐって、是非参考したい意見がある。何焯『義門讀書記』卷四五の一條、潘岳「西征賦」札記の中で「哀江南賦」に言及した部分及び何焯の説を繼承した李詳の發言がそれである。すなわち、何焯言う、

（潘安仁西征賦）刺取史事爲賦、故主於人物、稍以征途所歷山川羅絡其中。筆力適壯、不累於繁釀。拓宇班氏父子、文辭不妨代興、所學則非矣。子山哀江南賦、體源於此。庾賦今事、故尤有關係能動人、此善變者也。

（潘安仁西征賦は）史事を刺取して賦と爲す、故に人物を主とす。稍く征途歴る所の山川を以て其の中に羅絡するに、筆力適壯にして、繁釀に累わづらわされず。

宇みなもとを班氏父子に拓くも、文辭は代こもごも興るを妨げざるは、學ぶ所は則ち非なればなり。子山の哀江南賦は、體は此に源もとづく。庾は今事を賦す、故に尤だ關係して能く人を動かすこと有り、此れ善く變ずる者なり。

そして近人李詳は「哀江南賦集注」^⑩序で次のように述べている。

子山哀江南賦、體放西征〔原注：本何義門説〕、近募郊居。適文巨製、取精用宏。…

（庾）子山の哀江南賦は、體を西征（賦）に放い〔何義門の説に本づく〕、近くは郊居（賦）に募う。適文巨製、取るに精しく用うるに宏し。…

兩氏の發言は直接には、無論大量の歴史故事の典用についての相似を採りあげたものであろう。が、そればかりであらうか。何焯・李詳が「哀江南賦」を繋聯させて

いる潘岳「西征賦」沈約「郊居賦」は、いずれも六朝を代表する大賦。抒情小賦全盛の趨勢の中で、大賦に於ても漢賦からの脱皮を示す独自のスタイルを形成していたことは周知の通りである。ところで、その展開は、主として辭賦の「鋪陳、性から由來する敘事的表現と抒情的内容との融合、という點で辿ることができるもので、かつ「西征賦」などはその好例^⑪に當ると、私は考えるのだが、そういう視點にとって、兩氏の言は、この「哀江南賦」の亡國にまつわる事柄（人事）を時間軸に沿ってする鋪陳も、その展開の中に位置づけ得ることを、提起するものと受け取られるのである。

四

最後に、「哀江南賦」に於ける「悲哀、のモチーフとその敘述の在り方を、魏晉南北朝文學の中に還元して考えてみたい。

言うまでもなく、「悲哀、は、人が生きていく中できつと心に體驗する感情の一つである。個人の思惟・感情の表出としての「自敘、の文學に見られる情感の中でもこの「悲哀、は代表的なものである。何がしかの折に觸れての悲哀や苦痛の表明、それには例えば生別離苦にまつわる個人の具體的な實感に根ざしたものから、人生一般に對するやや抽象的なものまで、實に多様な内容（場合）が存在する。魏の建安以來、六朝の詩文の中でそうした「悲哀、の表現が、その内容に於てもまた手法に於てもめざましく成熟を遂げたことは誰しも異論のないところであろう。この時代の「自敘、文學の流れを特に「悲哀、の表現の展開によって迹づけることとて決して無理ではない。ところでその「悲哀、を表現する場或いは背景

（situation）として「國家破亡」は誰もが容易に聯想し得る情況の一つであり、しかもこの國家破亡の下での悲哀を詩文に詠ずる營みの歴史は古くかつ長い。例えば「麥秀」歌「黍離」詩。これらは長らく亡國を悲しむ歌として伝えられ、その篇名が亡國の代名詞にさえなっている。下って南宋末、明末清初、そして清末に至るまで、中國文學の歴史を辿ってみれば、大は王朝交替、小は内紛政争の混亂を経るたびに、そういった時世に伴う人々の不安や怒り、恨み、悲しみを綴った詩文が實に多量に綿々と表されてきた。大雑把な括り方をすれば、一種の「焼け跡文學、^⑫「亡國文學、の系譜ということもできる。

さて、魏晉南北朝期。後漢も合わせて約六百年の間に八代の王朝が入れ替わり、しかも各朝代の間にも政權爭奪が常習的に重ねられたこの時代は、まさに焼け跡に佇まぬことのほうが難しいような、つまり「悲哀、をうたう場には事缺かぬ時代であった。實際、後漢末の争亂による荒廢を詠じた王粲「登樓賦」「七哀詩」、廣陵

の荒蕪のさまを詠じた鮑照「蕪城賦」、呉の亡國にまつわる悲痛を籠めた陸機の「赴洛道中」等五言詩、など争亂のもとらす社會の荒廢と個人の不安をモチーフとした詩賦は少なくない。そしてこの時代最後の大きな動亂とも言える梁朝滅亡を背景として著されたのがこの「哀江南賦」と、概観すればざっとこう要約し得るものの、実はそう簡単なわけにはいかない。すなわち、本論ですっと確かめてきたような「哀江南賦」の在り方を通して、これに先立つ魏晉南北朝期に於ける展開を顧みると、興味深い重なりと相違が見えてくるのである。

例えば、同じく辭賦の形で、戦亂の荒蕪を詠じたものとして名高い鮑照「蕪城賦」。

王室内部の抗争絶えない宋朝という時代環境の下で実際に戦亂を経た鮑照が「廣陵の故城」(『文選』卷十一題下李善注引『鮑照集』)の荒蕪を歌ったものとして知られるこの賦は、作品を取り巻く情況からすると「哀江南賦」と共通するところも多い。が、手法上の對照のほうが、むしろ目を引く。第一に、戦亂を経た後の廢墟に語り手が立ってその荒蕪の空間を眼前にしながらうたう、という體裁であることに於て。第二に、廣陵という一つの空間をめぐるの興亡の事實が、肝腎の滅亡に到る過程には露ほども觸れずに、單に「今の荒蕪」と「昔の繁榮」という兩極の価値の對比から提示される點に於て。それはちょうど暗轉を挟んで舞臺背景がガラリと一變してしまうような運びなのである。

例えばその冒頭は、

瀾^{かじ}池^{かじ}たる平原は、南のかた蒼梧・漲海に馳せ、北のかた紫塞・雁門に走る。柁^{かじ}とるに漕渠を以てし、軸するに崑岡を以てす。重江^{ちようこうふくかん}複關^{おう}の隄^{しかい}、四會^{ごたつ}五達^{そう}の莊あり(瀾池平原、南馳蒼梧漲海、北走紫塞雁門。柁以漕渠、軸以崑岡。重江複關之隄、四會五達之莊)。

とあって、廢墟に立って「南は……北は……」とまず語り手を取り巻く空間についてその封域を設定することから説き起こす。この空間がどれほどに廣くどのような地勢か、それをまず前提する。これが、後に続く戦亂にまつわる感慨の表明の場ともなる。次いで「當昔全盛之時」以下、戦亂前の往時の繁華と充實のさまの陳述。それを「觀基^き之固護、將萬祀而一君、出入三代、五百餘載」と最大限に盛り上げたところで、一轉「竟瓜剖而豆分」という僅か一句を挟んでもう「澤葵依井、荒葛罥塗。…」と、有名な荒蕪の描寫に移る。このように、まるで廣陵の荒蕪が一時に出来たような錯覚さえ誘う、古と今の對比の構圖は、明らかに「哀江南賦」が繁榮から滅亡に至る過程を多くの言葉を費やして敘述しているのとは、手法を異に

するものである。

一體に、「蕪城賦」に限らず、庾信以前の魏晉南北朝期の詩賦に於ては、興亡にまつわる悲哀等の感慨を述べる語り手の場は、廢墟そのものであった。すなわち、「哀江南賦」に先立つ時代の五言詩・辭賦に於て、國家破亡の「悲哀」のモチーフは、亡朝の遺臣が廢墟に佇みその場の光景に悲歌慷慨するスタイルをとるのが最も一般的であった。例えば溯って『詩經』王風「黍離」を亡國羈旅歌として位置づける毛序では次のように説く。

黍離は、宗周を^{あわ}関れむなり。周の大夫行役して、宗周に至り、^{いにしえ}故の宗廟宮室^この^{ことごと}盡く禾黍と爲るに過る。周室の顛覆を^{あわ}関れみ、彷徨して去るに忍びずして是の詩を作る(黍離関宗周也。周大夫行役、至于宗周、過故宗廟宮室盡爲禾黍。関周室之顛覆、彷徨不去而作是詩也)。

それは、同じ空間について在りし日の記憶を對比して示すことによって眼前の廢墟に對する悲哀を強調する手法をしばしば伴うが、ともかく「悲哀」の場は眼前の空間に在る。

後漢末の擾亂に伴う社會の荒廢を背景とし、故郷を離れた羈旅の身の上で作られた王粲「登樓賦」もやはり、眼前の空間を語りの場としつつ或いは望郷の思いを述べ、或いは世の混亂を憂え、という詩人の心中の表現を展開する一篇として名高い。その亂世を背景にした羈旅・不得志、といった個人の苦痛を象徴するのが所謂蕭條の原野の表現であるのに端的に窺われる通り、これも心情の表現の場として空間が重要なのであった。すなわち、「登茲樓以四望、聊暇日以銷憂」樓に登って四方の空間を見渡す、という冒頭以下「挾清漳之通浦兮、倚曲沮之長洲。背墳衍之廣陸兮、臨皋隰之沃流。北彌陶牧、西接昭丘、華實蔽野、黍稷盈疇」と、自己を中心とする空間をなぞって、その後の心情を語る場を設定している。王粲はその空間を「とてもよい所だけれど、でも私の心に適う場所じゃない、腰を据えることはできない(雖信美而非吾土兮、曾何足以少留)」と評して、この意に適わぬ環境に甘んじねばならない原因である世の亂れへの嘆きや望郷の思いを述べていくわけだが、ともかく意に適わぬはずのその空間を寫して敘述の場としていることに變わりはない。

このような表現の場としての空間と、自己が身を置く環境への否定・不満を強調する装置としての往時回顧、古今對比の構造が、長く典型的な亡國の悲哀のモチーフであったように見える。

これに對して「哀江南賦」の場合は、語り手が自己を取り巻く環境について意を得ざる状態にあり、それを述べるという情況は、従前の詩賦のそれと重なるにも拘わらず、哀惜の対象である江南の空間を甦らせるとか、或いは北周の地で語る自己を取り巻く現環境を描寫するといった、空間的な設定をしていない。空間を悲哀の場とする代わりに、北周當時とは不連続の、既に閉じられた江南期の時間軸に従って、北周の「今」にまで通じる悲哀を生じる過程——興亡の過程——そのものをうたったもの。これは「悲哀」の生成に係わる一部の時間だけを流れから切り取って特別な意味を帯びさせた、一種の「時間」の再現とも言える。その再現された「時間」は「今」の「悲哀」を導き出す原因でもあるが、只だ結果として悲哀を生むばかりでなく、同時に、それ自體、再現に関わる個々のモチーフが帯びる「悲哀」性の連鎖によって、既に「悲哀」の内實を持つものとなっていることは本章で見てきた通り。「悲哀の時間」の表現、である。

結び

江南という空間への復歸も許されず、ましてや時間が不可逆性のものである以上は梁朝の時代に立ち戻る事など不可能、そういう實際的條件が詩の内容を左右することは往々あっても、詩の型については必ずしも決定要因になるとは限らない。現に庾信の北遷後作品のうちにも、羈旅感は多様な表れ方をしている。その中で、また古今多数の「戦乱歌」の中で「哀江南賦」の佳篇たる所以は、「哀江南賦」が、自身を取り巻く環境の背景に當る事柄を、單なる歌の背景に濟まらず、それそのものを徹底的に歌って示すものであることに在るだろう。それは、羈旅の身の自己にとって意を得ざる眼前の時空間を徹底的に外し去って、言わば時間空間兩面で回復不可能な哀惜の対象の世界のみを「言葉」の力でもって再現するという形をとった^⑨。そのため、この一篇のうちには、梁朝末のその時まで蓄積された種々の「興亡の悲哀」のモチーフが凝集して、梁一代の時間軸に沿って再構成された重層的世界さえもが見出せるのである。これはやはり、鋪陳文學の展開の上で、その新たな可能性を示した一篇に數えるべき作品と言えよう。

注

① 序章で觸れたように、杜甫の「詠懷古迹五首」其一で稱揚されて以後、庾信北遷後の詩文全般が廣く受容されてきているのはもちろんであるが、「哀江南賦」一つを殊更にめぐる動きも目立つ。例えば張溥「庾開府集題辭」の「南冠西河、旅人發嘆、鄉關之思、僅寄于哀江南一賦」が「哀江南賦」をその代表作のように扱ったものであるのをはじめ清に入ってから徐樹穀・徐樹炯兄弟は王潛・王洞・歸莊・吳兆宜・陸繁弢五家の「哀江南賦」注釋を纂めて「哀江南賦註」を編み、近人李詳も未完ながら「哀江南賦集註」を試みており、また王闓運は、清末の動亂の下で擬作「哀江南賦」をのこす。最近では陳寅恪・饒宗頤兩氏（本章注⑩⑪参照）他の論考、自傳的性格を專論したものに土屋昌明「自傳としての庾信「哀江南賦」」（『國學院中國學報』三八號）があり、參考させていただいた。

② 姜書閣『駢文史論』第十二章七「庾信及其駢文」（一九八六年、人民文學出版社）を參照。

③ 本章第四節に詳述。

④ 吉川幸次郎「推移の悲哀——古詩十九首の主題——」（『全集』卷六、二六六～三三〇頁）。

⑤ 『隋書』經籍志史部「古史」類に「何之元梁典三十卷」の著録が見える。その「序」は『陳書』本傳に録される。

⑥ 「梁有天下、自中大同以前、區宇寧晏、太清以後、寇盜交侵、首尾而言、未爲盡美、故開此一書、分爲六意」という方針の下に、各段の要點を次のように述べている。

「以高祖創基、因乎齊末、尋宗討本、起自永元、今以前如干卷爲追述。高祖生自布衣、長於弊俗、知風教之臧否、識民黎之情僞。爰逮君臨、弘斯政術、四紀之内、寔云殷阜。今以如干卷爲太平。世不常夷、時無恆治、非自我後、仍屬橫流、今以如干卷爲叙亂。洎高祖晏駕之年、太宗幽辱之歲、謳歌獄訟、向西陝不向東都。不庭之民、流逸之士、征伐禮樂、歸世祖不歸太宗。撥亂反正、厥庸斯在、治定功成、其勲有屬。今以如干卷爲世祖。至於四海困窮、五德升替、則敬皇紹立、仍以禪陳。今以如干卷爲敬帝。驃騎王琳、崇立後嗣、雖不達天命、然是其忠節。今以如干卷爲後嗣主」。

⑦ 本章第三節に引く陳寅恪氏の説を參照。

⑧ 昭明太子『文選』序「事出於沈思、義歸乎翰藻」。

⑨ 本論に於ては「自叙」を必ずしも「自己について語る」という範圍に限定せ

ず、個人の思惟や感情の表出という廣義の意味で捉えている。第四節を参照。

- ⑩ 高橋和己「陸機の傳記とその文學」（『中國文學報』第十一・十二冊、一九五九・一九六〇年。のち『高橋和己全集』第十五卷所收）には「辨亡論」製作の動機について「…この分裂した二つの要素、國家興亡に關する政治的見解と、父祖の功業の稱揚との結びつきかたに注意する必要がある」と言い、また「（「辨亡論」は）名分論的正當化にはあまり熱意のない」「もっぱら、輔佐の臣、とりわけ祖父や父の戰勝の記録を中軸として動いてゆく」ものであることを論じている。また興膳宏『潘岳・陸機』（一九七三年、筑摩書房）には「「辨亡論」には冷徹な歴史評論のスタイルを装いながら、實はきわめて熱っぽい調子で亡國の怨みが語られている。上下二篇のこの論文のねらいは、吳の興亡の原因を分析し、祖父と父の功業を稱揚することにあつた」（一四〇頁）とある。
- ⑪ 庾信については、序章注①鍾氏書の表題『望郷詩人庾信』がその最も顯著な例と言えよう。陸機については、前掲注⑩各書を参照。
- ⑫ 前掲注⑩高橋氏論文に見える。
- ⑬ そこに用いられる語句は、大體現存史書の記述（例えば「過秦論」なら『史記』『漢書』等、「辨亡論」なら『三國志』『後漢書』等、無論正史以外の史書もこの中に入る）と合致するものが大半であるが、必ずしも執筆の際に一々それに本づいたとは考え難い。この興亡史論の構造についても、大変興味深いものがあるが、本論ではまだ推論に止まる。
- ⑭ 本論では「鋪陳」を、辭賦の修辭・内容兩面に關わる性質を指す言葉として用いている。詳細な定義については劉勰『文心雕龍』詮賦篇「賦者、鋪也。鋪采摛文、體物寫志也」及び中島千秋『賦の成立と展開』（一九六三年）第一章「歌い方としての賦」を参照。
- ⑮ 森三樹三郎『六朝士大夫の精神』第二章「玄儒文史」（一九八六年、同朋舎）を参照。
- ⑯ 『文叢』（上）（一九九一年、臺灣學生書局）所收。
- ⑰ 『金明館叢稿初編』（一九八〇年、上海古籍出版社）所收（原載一九三九年昆明清華學報）。
- ⑱ 他に、近人瞿蛻園『漢魏六朝賦選』（一九六四年、上海古籍出版社）、譚正璧・紀馥華『庾信詩賦選』（一九五八年、上海古典文學出版社）も存在するが、やはり詳細な考證という點で倪注を凌駕するまでには至っていない。
- ⑲ 『漢武帝内傳』「帝崩、三月、葬於茂陵。又帝崩時、遺詔以雜書三十餘卷、常

讀玩之、使隨身斂」。

- ⑳ 「燕歌行」題下倪注は『周書』王褒傳の記事「褒曾作燕歌行、妙盡關塞苦寒之狀、元帝及諸文士並和之、而競爲悽切之詞」を引いて「故（庾）信亦有此歌矣」と説く。
- ㉑ 『李審言文集』（一九八九年、江蘇古籍出版社）所收。
- ㉒ 序章注②程氏書第四章「兩晉賦」及び序章注⑤高氏・馬氏各書を参照。また潘岳「西征賦」については拙論「潘岳「西征賦」攷」（『中國文學報』第四四冊、一九九二年）に於て些か論じている。
- ㉓ 鈴木虎雄『中國戰亂詩』（一九六八年、筑摩書房。もと『禹域戰亂詩解』一九四五年）は『詩經』大明から清末黃遵憲「降將軍詩歌」まで、歴代の「戰亂詩」を収める。その序に「太平の時は常に稀にして戰亂の世は常に多し。…他國にも戰亂多し、而して果して中國の如く各時代にわたりてこれを敘出せる詩人ありや否や」との一節が見える。この序文及び卷末の小川環樹「解説」の通論を参照。
- ㉔ 「哀江南賦」をめぐる諸問題の一つにその制作時期の推定がある。從來の陳寅恪氏の考證（前掲注⑰書）を代表とする庾信晩年期に制作されたと見る説に對して、北遷後間もない頃（五五〇年代後半）に繰り上げる説が幾つか提出されている（加藤國安「梁朝社會下の庾信」〔『愛媛大學教育學部紀要』第Ⅰ一十九卷、一九八七年〕以下、同氏によって詳論されている）。作品を検討する上でそれがいつ成立したかということは、特にこの「哀江南賦」のように自傳的傾向を帯びるものの場合には、無論無視しては通れない問題である。本論ではその制作時期について敢えて深く拘わらずにきたが、以上のように眼前の時空間を徹底的に排除し去って、遠く隔たった過去の時空間を再現するこの賦の構造を確認してみると、この賦の帯びる「悲哀、の痛切さとは、再現の對象（江南）からの時空雙方の距離・庾信が無視した在北期間の長さにおそらく比例するものではないかという感觸が得られたことを、附記しておく。

第二章 庾信の碑傳文

序

私たちは、一人の人間についての記述を通して、少なくとも二人の人間の「個」を読み取ることができる。第一に記述対象の人物。場合によってはその人物をとりまく環境——近くは家族から遠くは國家社會まで——をも読み取ることができる。第二に書き手自身。その記述のしかたを通して他者＝対象の捉えかた、見方、といったもの、廣く言えば世界の捉え方、を窺うことができるが、それは往々にして當時の文學環境を反映していることがある。してみれば、そうした記述のしかたの變遷に、時代時代の人々の形象の捉え方の變化を読み取ることも可能かも知れない。

中國の詩文の中で、人物を捉えた記述はさまざまな形式で行われてきた。^①正史の本紀や列傳は無論その一つだが、單行の詩文でも、例えば歴史的人物についての論、詠史詩や江淹「雜體詩」のような題詠的な詩、果ては『世說新語』に於けるような細大とり混ぜた人物評、そして碑誌傳狀の文まで、幅廣い。いま最後に挙げた碑誌傳狀は、「碑」「誌」が元來それぞれ文を刻む媒體「墓碑」「墓誌」を指すことから明らかなように、一人の人物の生涯を対象に、當人の死後ほどなく墓葬に前後して書かれる、という実用的な由來を持つジャンル。さらには、公式の傳記である正史の列傳に對してその資料を提供する存在でもあって、名稱を異にする

「誄」や「行狀」も普通このジャンルに算え得る。^②これに關する早い時期の解説としては、例えば同一篇で「碑」「誄」を扱う『文心雕龍』誄碑篇では、「碑」をめぐる沿革と特長を次のように簡潔に述べる。

自後漢以來、碑碣雲起、才鋒所斷、莫高蔡邕。…其敘事也該而要、其綴采也雅而澤、清詞轉而不窮、巧義出而卓立。…夫屬碑之體、資乎史才。其序則傳、其文則銘、標序盛德、必見清風之華、昭紀鴻懿、必見峻偉之烈、此碑之制也。

後漢自り以來、碑碣雲のごとく起る。才鋒の斷ずる所、蔡邕より高きは莫し。…其の事を敘するや該にして要、其の采を綴るや雅にして澤なり。清詞轉じて窮まらず、巧義出でて卓立す。…夫れ碑を屬するの體は、史才に資る。其の序は則ち傳、其の文は則ち銘、盛德を標序すれば、必ず清風の華を見わし、鴻懿を昭紀すれば、必ず峻偉の烈を見わす。此れ碑の制なり。

ここに見える通り、死者の生前の行迹を哀悼をこめて記述する文としての碑文は、後漢の蔡邕以來本格的な系譜を辿り始める。また、一種の「個人史」でもある縁

で、これを草するには「史才」が物を言うジャンルでもある。晉の潘岳が「馬汧督誄」序（『文選』卷五七）で、自分がいま誄を草する所以として、「史臣班固」が司馬叔持のために誄を草したという例を引き、それを承けて「忠孝義烈の流、慷慨して非命にして死んだ者」については「綴辭之士」がその行蹟を見放しにはしないもので、「微臣」自分も「舊史之末」に連なる者として馬氏のために誄を草するのだ（然則忠孝義烈之流、慷慨非命而死者、綴辭之士、未之或遺也。天子既已策而贈之。微臣託乎舊史之末、敢闕其文哉）と明言しているのなど、碑傳文が書き手に「史」的敘述を意識させる性格を具えるものであったことを伝える好例と言えよう。要するに碑傳文は、もともと實際的用途に即して生まれ、かつ「文」「史」の範疇の交わる部分に位置するようなジャンルであった、とりわけ、劉勰の指摘する如く「傳」記的内容・スタイルをとる、碑銘・墓誌銘・誄にそれぞれ先行する無韻部分、しばしば「序」と通稱される文の部分に於てはそうであった、と見て差し支えない。

その後、中唐の韓愈に於て古文の碑傳文が試みられるまで、六朝期の碑傳文は駢儷體で書かれ續けたが、周知の通り、これは從來評価が芳しからず、たとえ駢文を奉ずる立場からであっても、全面的支持は與えられていない。例えば清代に『皇朝駢文類苑』を編んだ姚鼐は、その敘録「墓碑誌銘類」の条で「齊梁周魏之世」の碑傳文の名手に王儉・沈約・温子昇・庾信の名を挙げながらも、韓愈以降の古文のものに及ばないことを明言している。かく、中國文學史に於て、碑誌傳狀の文と言えは普通には中唐の韓愈以降の古文によるものが想起され、中唐以前の文は從來少なくとも「文學」としての検討対象とは扱われにくい傾向があった。^③その理由を探てみると、書き手及び記述対象の「個」が浮かんでこない、言わば没個性、という評価に求められるように見える。今日に於て人物像とは、十人いれば十様に、百人いれば百様に異なるのが當り前のものとされ、同時にその差異を巧妙に描き出す書き手の主體性が重視される。その目で見れば中唐以前の碑傳文に對する右のような評価も仕方ないものかも知れない。

しかし、たとえ今日から見て「文學」の範疇には入れ難いものでも、より廣い文章史の目で見れば、六朝期碑傳文に於ける諸特徴は、當時の人物の捉え方、その表現の仕方を考察する上では重要な手がかりにできるものなのではあるまいか。まして中唐を界とする大きな轉換を視野に入ればなおさら、ここには古文・駢文の相

違という現象のさらに根底をなす、本質的な問題が横たわってさえいるように見える。すなわち、たまたま文體の相違として識別されるその相違を必然たらしめている、人が人の「個」を把握する認識の仕方そのものの相違或いは變化について解明する端緒が。こうした點から、本章では、人物についての記述の流變を、特に六朝から唐に至る時期の碑傳文に即して檢證する作業は十分に意味があると考え、些か論述を試みるものである。

—

さて、六朝期の碑傳文數ある中でも、目を引くのは、その末期に當る北周期に庾信が作った諸篇である。本論序章に於て既に掲げた通り、後に「其の駢偶の文は、則ち六朝の大成を集め、而うして四傑の先路を導く。古より今に迄るまで、屹然として四六の宗匠たり（其駢偶之文、則集六朝之大成、而導四傑之先路。自古迄今、屹然爲四六之宗匠）」（『四庫全書總目』「庾開府集箋註」提要）とも稱され、駢文史上に重要な位置を占める庾信が草した碑傳文で、今日に傳わるものは、全部で三十一篇。具體的には「神道碑」及び「墓誌銘」と題されているものがこれに當る。比率は前者が十二篇に對して後者は十九篇、墓誌銘のほうは婦人を對象とするもの十篇を含む。この篇數は、同時代の他の文人に比べてかなり多い。因みに嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』に輯録されて傳わる碑傳文で見れば、梁の簡文帝十七篇・沈約十三篇・梁元帝九篇、任昉八篇、江淹七篇、齊の謝朓六篇、さらに誄・祭文等も含めれば、哀悼の詩文に優れることで知られる西晉の潘岳で二十餘篇、陸機九篇など。何よりも庾信の場合は三十一篇のどれもが首尾の缺落なき完篇であるという點で、碑傳文の流變を辿る緒として恰好の存在とすることができる。

一方、庾信自身の詩文の中で碑傳文は、約三分の一の分量を占めるのみならず、質的にも注目すべき一群であることは、滕王道「庾子山集序」で庾信の詩文を稱揚していく段で「誄は（潘）安仁の美を奪い、碑は（蔡）伯喈の情有り（誄奪安仁之美、碑有伯喈之情）」と「誄」「碑」を擧げているのを最も早い例として、既に幾つか指摘されてきている。さらに注意しておきたいのは、庾信がそれ以外の詩文に於ては強烈な自己表白を織り込んだ、抒情性に富む作品を残している文人であることで、その代表作とも言える「哀江南賦」では、歴史的故事等の典故を自在に驅使して、國家の盛衰とともに下降する自己の人生の悲哀を時間の推移に沿って述べ

る、という独自の自傳的世界を構築している。それは第一章で證した通りである。かく自己の經歷を社會等外界との相關に於て文章に投影することに力量を發揮する庾信であってみれば、他者に對しては如何なる筆を振るったのか、當然關心の趣くところではないか。碑傳文が、彼の詩文について論ずる上で是非檢討を要する一群であることに、異論の餘地はないであろう。

はじめに、三十一篇の概要を簡單に見ておきたい。『北史』卷八三本傳に、

明帝・武帝、並雅好文學、信特蒙恩禮。至於滕・趙諸王、周旋款至、有若布衣之交。羣公碑誌、多相託焉。惟王褒頗與信埒、自餘文人、莫有逮者。

明帝・武帝、並びに雅だ文學を好み、（庾）信は特^{ひと}り恩禮を蒙る。滕・趙諸王に至っては、周旋して款^{よろこ}び至り、布衣の交わりのごときもの有り。羣公の碑・誌は、多く^{これ}焉に相託す。惟だ王褒のみ頗る信と埒しきも、自餘の文人に、逮ぶこと有る者莫し。

とあり、これは北周に於て庾信の文章が王室をはじめとする支配層から氣に入られ尊重されていた事情を示す記事として知られる。その具體例の一つ「羣公碑誌、多相託焉」の結果の中に、現存の三十一篇は間違いなく含まれるであろう。撰述の期間は、各碑傳文の序文に記載されている被敘述者の卒年に據ると、凡そ北周武帝保定五年（五六五）から隋開皇元年（五八一）までの十六年間と推定されるが、最後の隋開皇元年は庾信自身の歿年にも當る。次に、敘述對象となる人々であるが、鮮卑系・漢人系、或いは北朝叩き上げ系・南朝系、と出自は雜多であり、地位で見れば最高は王室で、誅殺された齊王宇文憲（神道碑）がこれに當り、他も柱國大將軍、驃騎大將軍などを贈られるような高位の人物、北周の功勞者——所謂「羣公」——或いはその夫人、である。惜しいことに、それらの人々と庾信の關係については、文獻史料の類も乏しく、それぞれの碑・誌そのもの以外に庾信自らの詩文に於て生前の交流の迹が確認できるのは、倪璠の注に「齊煬王憲に代わりて作るなり（代齊煬王憲作也）」とある「齊王進白兔表」（卷七）及び「齊王進蒼烏表」「齊王進赤雀表」（同）三篇の存する齊王憲のみである。これは、趙王招や滕王^①道が、庾信の集中にその存命中の交流を背景とする詩文がふんだんに見られるおかげで、庾信より先に亡くなった彼らを對象とする碑傳の類は無いにも拘わらず、庾信が彼らと北周に於て親密な交流を持った情況が知られるのと好對照をなす。

結局いま、庾信による大部分の碑傳文をめぐって確信できる情況は、前掲本傳に見える通り、庾信が羣公の遺族の「委託」に應じて執筆したもの、という単純な一點に盡きる。周縁的情報が乏しい、というのは一見物足りない。が、實のところは⑧そうでもない。すなわち、庾信の多くの詩文のうち、「傷王司徒褒」詩・「思舊銘」などの例で知られるように、少しでも自身と境遇の近い人物、言わば自身にとって完全な「他、として距離をおき得ない対象に對して、亡國にまつわる情等を通じて自己を重ね表わす傾向が、庾信にはある。それに對して、こと碑傳文群に於ては、庾信との生前の交流に関する情報に事缺くほど、おそらくもともと「自、

「他、の距離のある対象についての敘述が大半を占める、となれば、この碑傳文群は、庾信が自身にとって「他、なる対象について敘述する立場に徹した場合に如何なる書き手であったか、を窺うための有効な手がかりとなし得るのではないか。書き手としての庾信というものをより多面的に把握するためには、これはむしろ恰好の検討材料と言えるのである。

ところで、敘述対象と書き手との關係は、當時の碑傳文の中でどのように把握できるものであったのか。庾信に至るまでの歴代の碑傳文の中でも、誄の場合は曹植「王仲宣誄」や潘岳「楊荊州誄」（ともに『文選』卷五六）などの例を擧げるまでもなく、「私とあなたは、…（吾與夫子）」（「王仲宣誄」）といった形で、誄の中に書き手と故人との生前の交流が詠み込まれ、それが一篇を締め括る一節となるものも多いが、碑文・墓誌文の場合はやはり死者と書き手との生前の關係がさほど反映されないのがむしろ普通のようなのである。例えば、晉の孫綽はその手に成る誄が『世說新語』注所引の斷片として見られる一方、墓碑でなく頌德碑らしいが同時代の人物を対象とした碑文も『藝文類聚』所收により數篇見ることができるので、この場合参考になる。まずその誄の斷片のほうではやはり死者と孫綽自身との關係を述べる一節が含まれていたことが確かめられる。

咨予與公、風流同歸、擬量託情、視公猶師。君子之交、相與無私、虛中納是、吐誠誨非。雖實不敏、敬佩弦韋、永戢話言、口誦心悲。

咨 予は公と、風流は歸を同じうす。量を擬し情を託し、公を視ること猶お師のごとし。君子の交りは、相與に私なし。虚中にして是を納れ、吐誠して非を誨う。實に敏からずと雖も、敬んで弦韋を佩び、永く話言に戢め、口誦して心悲しむ。
（「庾公誄」）

余與夫子、交非勢利、心猶澄水、同此玄味。

余は夫子と、交りは勢利に非ず。心は猶お澄水のごとく、此の玄味を同じくす。
（「王長史誄」）

「庾公誄」引用部の末句「口誦心悲」は、誄がもともと「口誦」読みあげられる文であることを改めて印象づける一句である。會葬者の前で読みあげるといふ場があればこそ、そこに朗誦者が、故人に對する個人的感情を表白する内容を盛り込むのは、哀悼の實際的效果を増すに有効であつたろう。各種ある碑傳文のうちでも誄に於て、早くから個人的感情表白の内容が認められる所以である。一方頌德碑文のほう、例えば「太尉庾亮碑」「司空庾冰碑」等では、孫綽と敘述対象との交流は話題にされていない。どうも、墓碑であれ頌德碑であれこの時期の碑文では、文の上で対象と書き手の間に一定の距離がおかれるらしい。これは、中唐の、例えば韓愈に於ける「殿中少監馬君墓誌銘」「河東薛君墓誌銘」などが、知人であつた故人の、生前の細かいエピソードを盛り込んで、書き手韓愈と対象との親しい距離がそのまま碑文に反映したものとなっているのと、明らかに異なる。六朝期碑文と中唐期碑文との相違點の一つである。それはさておき、もし誄のように生前の交流關係が話題となっていれば、そこに籠められた死者への哀悼の意を介して書き手自身が顔を覗かせているわけで、書き手自身と対象の雙方の表れかたを平行して見ていく態度が當然要求されるだろう。が、それに全く觸れない碑文・墓誌文の場合、文は全面的に対象についての敘述の場となり、それだけに、書き手が文中で死者をどう捉え、どう表しているか、そこに検討の重點は自ずと定まってくるのである。

二

さて碑文や誌文というのは、或る程度構成が決まっていて、凡そ対象となる人物について出自・經歷・頌の順に述べていき、最後に銘を寄せる、という部立てを持つ。そのような規格のはっきり決まっているジャンルの場合、その枠内でどのように表現するか、に關心は注がれる。そして今、庾信の碑傳文の特長的事項は、主に敘述対象の經歷を述べる部分に於て多く認められるのであるが、その検討は次節以降に譲るとして、本節では先に、「頌」の部分に即して點檢を試みたい。と言うのもこの部分は、庾信の碑傳文中次のような點に於て經歷部分とはまた別に興味深い部分であり、本章に於て碑傳文全體に對する見通しを得るに必要と思われるからである。

二 (一)

「頌」の部分、碑文・墓誌文の最後、すなわち経歴敘述が終わって篇末押韻の銘部分に入るまでを結ぶところに置かれ、故人の人柄を文字通り「頌」する内容の一段である。婦人以外を対象とする碑傳文では二十一篇中十二篇に存在し、またその有無は碑文・墓誌文の別には特には左右されないようである。實に、この「頌」では、類似表現、重複表現が相當露骨に認められる。それは、庾信の碑傳文も六朝期碑傳文に於ける人物表現のマンネリズム、類型的側面を踏襲していることを裏づけるものに違いないが、よくよく見ていくと、ここには書き手と敘述対象との距離が、三十一篇全篇に互って常に一定して保たれているのか否か、もし兩者の距離が作品によって変わることがあるとすれば、それは如何なる形で読みとれるのか、という關心を或る程度満足させてくれる一つの傾向が読みとれもするのである。

まずは、この部分に於ける表現の重複、類似の程度を見ておきたい。ついては「司馬裔神道碑」がさまざまな篇との比較の足がかりとして好便なので、始めに必要な部分を抜粋しておこう。

公資忠履孝、蘊義懷仁、直幹百尋、澄波萬頃。逢蒙射法、力牧兵書、星辰高下之占、風雨逢迎之氣、故得出師以律、天幸將軍者也。… (A)

渭南千畝之竹、更懼盈滿、池陽二頃之田、常思止足。身死之日、家無餘財。… (B)

公は忠に資り孝を履み、義を蘊み仁を懷き、直き幹の百尋なるがごとく、澄き波の萬頃たるがごとし。逢蒙の射法、力牧の兵書、星辰高下の占、風雨逢迎の氣あり、故より師を出だすに律を以てするを得、天の將軍に幸いせし者なり。…

渭南千畝の竹、更に盈滿を懼れ、池陽二頃の田、常に止足を思う。身死するの日、家に餘財無し。…

例えば、傍線を付した部分に注目されたい。これは「豆盧公神道碑」との間で、實に二箇所互ってそれぞれ四句まるごとびたり重なることが確認される部分である。「豆盧公神道碑」の當該箇所を對照させてみよう。

公資忠履孝、蘊義懷仁、直幹百尋、澄波千頃。留心職事、愛玩圖籍。 (A')

渭南千畝之竹、尚懼盈滿、池陽二頃之田、常思止足。… (B')

ともに頌の冒頭に當る (A) (A') では、「公」司馬裔・豆盧公がそれぞれ「資

忠」忠義で「履孝」孝行で「蘊義懷仁」義や仁を具えた、節あり器量の廣い人物であることを稱える。「直幹百尋、澄波千頃」はそれぞれ『世說新語』に見える和嶠（「賞譽篇」）黃叔度（「德行篇」）の故事を踏まえる句。見ての通り、四句が「千」か「萬」かの一字の違いを除いてすっかり重なっている。その後しばらく異なる文が続いて後、必要以上の蓄財に走らず「止足」の節を持った生きかたであったこと（『漢書』貨殖傳・『史記』蘇秦傳）を喩える (B) (B') でもまた「尚」と「更」との一字違いだけの對句が出てくるのである。無論これは三十一篇中最も甚だしい重複の例に當る。

ところで、司馬裔については別に「墓誌銘」も存在するが、そちらの頌部分との関係はどうか当然氣になるところである。見てみると、唯一「神道碑文」(B) で傍線を付した二句「身死之日、家無餘財」が墓誌文でも一致するくらいのものである。それ以外は、冒頭が「公は愛敬純深にして、隱なること有るも犯すこと無く、忠貞亮直、知りて爲さざる無し（公愛敬純深、有隱無犯、忠貞亮直、知無不爲）」と、「神道碑」のそれ (A) とは異なることをはじめ、「豆盧公神道碑」との露骨な重複ほどのだぶりは見當らない。尤も文中、「墓誌」で「在戎四十二年、身經六十九戰」となっているのが、「神道碑」では「在朝四十一年、身經一百餘戰」とあり、修辭的な操作に過ぎないかも知れないにせよ、同一人物について數字が一致しないのも、それはそれで問題のような氣もするが。それはさておき、決して乏しくはないはずの使用可能な故事・成句、數々の語彙の中で、よりによって全くの別人に全く同じ典故を、しかも配列までそのままに用いるというのは、これは「通套莫分彼此」の誹りを免れないことかも知れない。まして、同一人物については碑文・墓誌文の間でむしろ使い分けているらしいのを目にすれば、手抜きを邪推さえしたくなる。なお、一連の「頌」部分では、経歴敘述部分に見られるような「駢散兼行」のスタイルは影を潜め、ほぼ當りまえの對句リズムが主流となっている。

次に、前の「豆盧公碑」との間のように露骨にびたりの重複に至らぬまでも、軍事的才能の優秀さを表すくだりで、他の約三篇との間で大同小異の典故使用が認められるのも、目を引くことである。該當するのは「長孫儉神道碑」「紇干弘神道碑」「慕容公神道碑」で、みな鮮卑系の人物であることには、注意しておいてよいかも知れない。「司馬裔碑」の中では前掲 (A) の點線部分がこれに當る。

至如風后陰陽之占、力牧星辰之度、魏公子之兵書、李將軍之射法、莫不成誦在心、取爲時用。 (「長孫儉神道碑」)

青烏甲乙之占、白馬星辰之變、九宮推步、三門伏起、手弧射法、太乙營圖、並皆成誦在心、若指諸掌。虜青犢之兵、甚有秘計、燒烏巢之米、本無遺策。

(「紇干弘神道碑」)

太乙風角之占、常從星辰之候、樓船戰陣之錄、強弩馳射之書、莫不動會機神、發符雷電。梯衝所向、地靡百樓之城、長戟所臨、野闕三門之陣。

(「慕容公神道碑」)

このほか、一句単位で複数の人物に同じ語彙を使用している例などは呆れるほど多い。概して、前掲「司馬裔碑」「豆盧公碑」(A) (A')のように、忠義であった、思慮深かった、親孝行であった、などということは、頌の性格をそのまま反映して、ほとんどどの人物についても四字句を列ねて觸れ、さらに、文武の何れかに優れていたとか、どちらも優れていたとか、清貧清廉であった、という項目が追加されるのが一つのパターンを成している。孝に忠、信、と言え、これらはどれも儒家の重視する徳目に當る。このこと自體、既に對象の所謂個性の把握などということからはほど遠いが、實際本當に、對象の人物についてはそうした事しか頌めるべき材料がなかったのかも知れないにしても、それをこれほど露わな典故の使い回しに據るなどは、確かに類型的表現の「典型」をここに認めざるを得ないだろう。

二 (二)

一方これに對して、全體の中では少數派ながら、異色な「頌」部分を持つ碑傳文が、ある。「柳遐墓誌銘」がその一つで、少なくとも柳遐の生き方の特徴を反映した内容と、その内容にふさわしい典故運用がなされている。

「柳遐、字は子昇、河東解縣の人」と「墓誌銘」冒頭でも紹介される柳遐は、『周書』卷四二『北史』卷七〇に傳があり、この墓誌銘で述べられているエピソードは概ねそれら正史の記事と重なる。梁末の混亂期、岳陽王蕭譽に従ったが、曾祖が居を置いた襄陽が北朝の支配下に入ったのを看過できずそこにある祖先の墳墓を守るため、蕭譽の江陵政權には仕えず郷里に留まった、それが北朝との縁の始まり、という人物。何しろ仕官や屬する王朝より先祖への孝養を擇る生きかたをした人だから、官職歴より祖先孝行のエピソードを中心として語ることになるのは、當然と言

えば當然かも知れないが、そういう極めて個別的な事情を墓誌銘の文が強く反映していること自體、他の碑傳文の傾向とは異なるのである。

頌に至るまでの構成は、定石通り出自・世系・經歷と續くが、經歷部分は概ね次のような形で展開している。

及乎大盜移國、王室騷然、月動星搖、雲平虹直。岳陽王承制陝左、當壁漢南、天網所頓、英賢畢集、授君散騎侍郎、吏部員外郎、散騎常侍、兼太子侍讀。

大盜國を移し、王室騷然たるに及んで、月動き星搖き、雲平らぎ虹直くなる。岳陽王制を陝左に承け、壁を漢南に當つるに、天網の頓く所にして、英賢畢く集まれば、君に散騎侍郎、吏部員外郎、散騎常侍、兼太子侍讀を授く。

「大盜移國、王室騷然、月動星搖、雲平虹直」は、政權篡奪とそれに伴う騷亂ぶりを言う常套句。「大盜移國」と言え、庾信の場合、「哀江南賦」序の劈頭「粵以戊辰之年、建亥之月、大盜移國、金陵瓦解」と、梁武帝太清二年(五四八)侯景の亂の勃發を示すくだりが想起されるが、ここでも無論、侯景の亂を言い、梁末の混亂した時世を表している。次いで岳陽王蕭 が江陵で政權に就いたこと、そこへ南朝貴族たちが従ったさまを述べて、そこで「君」柳遐に「散騎侍郎、吏部員外郎、散騎常侍、兼太子侍讀」の官職が授けられた、と言う。このような運びは、時を几帳面な形で直示せず、典故・常套句に由って「時世」として表すスタイルであって、次節で詳しく論じる庾信碑傳文の半分餘を占める經歷敘述のスタイルとは、異なる型を呈している。

さて、頌部分の冒頭は「君は器宇祥正にして、風鑒弘敏なり、身を澡ぎ徳に浴し、藝に遊び仁に依る、汝南の令望にして、扶風の長者たり(君器宇祥正、風鑒弘敏、澡身浴徳、游藝依仁、汝南令望、扶風長者)」と四言主體の對句によって「長者」の風格があったことを賞賛するもので、この邊は他篇とさほど差異はない。が、これに次いで柳遐の人柄と生きざまを故人・故事への比擬によってたて續けに示していく部分は、興味深い。

不言財利、王夷甫之爲徳；

不談人物、阮嗣宗之爲人。

張衡渾儀之後、即賦歸田；

杜預沈碑已來、遂停鄉里。

從容亂離之機、保此令名；

舒卷風雲之際、無妨貴仕。

王仲宣有讀書之樓、

諸葛亮有彈琴之宅。

實欲因此謝病、閑居終焉。

財利を言わざるは、王夷甫の徳爲り、人物を談ぜざるは、阮嗣宗の人爲り。亂離の機に従容として、此の令名を保ち、風雲の際に舒卷して、貴仕に妨げ無し。張衡は渾儀の後、即ち歸田を賦し、杜預は沈碑より已來、遂に郷里に停まる。王仲宣に讀書の樓有り、諸葛亮に彈琴の宅有り。實に此に因りて病に謝し、閑居して終えんと欲す焉。

前半、四六對の一組と六四對の一組とは、まさに冒頭部分を故事によって具體的に述べる部分である。その後の張衡・杜預の故事は彼らの「歸田を賦」し「郷里に停ま」ったことに、柳遐が官を捨てて襄陽へ歸ったことを擬えたのであり、歸田しての暮らしぶりを王粲の「讀書の樓」諸葛亮の「彈琴の宅」、ともに盛弘之『荊州記』中の襄陽の地に因んだ故事に擬えている。最後の句に見える「閑居」が、この一連の對句を束ねるキーワードに當る。北周時代の庾信には「小園賦」（卷一）を代表格として「歸田」「山齋」と題する詩もあって、六朝期士大夫の憧れであり重大關心事でもある「歸田」、「閑居」に對する複雑な志向がそこに投影されていることは周知の通り。結局庾信自身は終生「歸田」、「閑居」を實現せずに過ごしたが、心寄せる生きかた、ではあったに違いない。自分と同じ梁朝遺臣である柳遐が祖先大事に貫いた生きざまの中に、その實現を見、感慨を覚えたであろうことは十分予想し得る。無論、引用されている故事は、張衡や杜預など格別なものではないし、對句の構成も定石通りのこの一段。まして「歸田」や「閑居」、自體、儒家の徳目ではないにしろ、世俗に背を向けて生きる士大夫の高潔な人格を表わすイメージの定番でさえあることも、無視できない。それでもやはり他篇に比べて、柳遐の「個」に即して行われた、と見えるこうした敘述を促したものが、「歸田」の姿勢への庾信の共感であった、という可能性はある。するとこの一篇は、書き手からする敘述對象への思い入れが、碑傳文の特徴を左右し得る場合の一例ということになるのである。

これに關しては、庾信が自らと同じ北周羈旅の身の上に同情を寄せた内容であり、佳篇であるとして夙に有名な「吳明徹墓誌銘」に於て、頌部分のみならず、次節以下で論じる經歷部分でも、この「柳遐墓誌銘」と非常に相似た傾向が認められることが、實に大きな補強材料となるのだが、それはしばし預かりとして、次節に移って、庾信の碑傳文全般に亙る敘述の特長を把握するという所期の目的に従って、經歷敘述について概観することにした。

以下の本節で見る通り、庾信の碑傳文を特長づけている諸點は、六朝期の碑文・墓誌文・誄ほかの碑傳文の間に培われてきた駢儷體の表現を繼承しつつ、いっそう發展させたものとして把握される。駢儷體の要件と言えはやはり對偶・典故の二點であるが、典故方面のあり方については追いつ追いつ検討していくとして、論述の便宜も兼ねて、ここに豫め對偶の特徴について見通しをつけておくことにしたい。

さて、庾信碑傳文の對偶で注意を引くのは、四六のリズムに緩急の呼吸が具わっている點である。そのリズム上の傾向は、大きく次の三點に要約できる。

- (一) 四言對句の連續以外に、六言七言といった長句による對句との併用が多い。
 - (二) (一)とも關連して、四六四六など長短組み合わせの四句からなる對句と二句一組の對句が併用されている。
 - (三) 對句の前後に散句を交える結構が、多用されている。「駢散兼行」。
- これら對偶について検討するに際しては、庾信當時の駢儷體の流れの中での位置が氣になるが、差し當って『文心雕龍』章句篇の一節が参考されよう。

夫れ文を裁し筆を匠するは、篇に小大有り。章を離ち句を合するは、調に緩急有り。變に隨い會に適えて、定準を見ること無し。…若し夫れ筆句は常無くして、字に常數有り。四字は密にして促ならず、六字は裕にして緩に非ず。或いは之を變ずるに三五を以てするは、蓋し應機の權節なり（夫裁文匠筆、篇有小大。離章合句、調有緩急。隨變適會、莫見定準。…若夫筆句無常、而字有常數。四字密而不促、六字裕而非緩。或變之以三五、蓋應機之權節也）。

と、文に於て臨機應變の「章句」をなすことの重要さが説かれている。庾信に於ける右の諸特徴はその主旨に適うもの、と言える。

對偶をめぐる説はさらに、下って『文鏡秘府論』中にも幾つか認められる。すなわち、南卷「定位」では「句長ければ聲は彌いよ緩く、句短ければ聲は彌いよ促し。文筆に施すには、須く參え用うべし（句長聲彌緩、句短聲彌促。施於文筆、須參用焉）」と、まず句の長さ（字數）が違えばリズムに緩急を生むから、長短適宜交え用いるのがよい、と『文心雕龍』を襲う説が見えるほか、(二)の四句一組の對偶についても次のように述べる。

假りに令し一對の語は、四句にして成る、便ち四言を用て、以て其の半ばに居

き、其餘の二句は、五言六言等を雜え用いよ。或いは一對兩對を経て已後は、乃ち須く全て四言を用うべし、既に四言を用いて、又た更に其の雜體を施し、循環反覆して、通利に歸せんことを務む（假令一對之語、四句而成、使用四言、以居其半、其餘二句、雜用五言六言等。或經一對兩對已後、乃須全用四言、既用四言、又更施其雜體、循環反覆、務歸通利）。

この、四言一組を無韻文の對句の基本とする説は、西卷に引く『文筆式』にも見える。

製作の道は、唯だ筆と文のみ。文とは、詩・賦・銘・頌・箴・讚・弔・誄等、是なり。筆とは、詔・策・移・檄・章・奏・書・啓等なり。即きて之を言わば、韻ある者を文と爲し、韻に非ざる者を筆と爲す。文は兩句を以て會し、筆は四句を以て成る（製作之道、唯筆與文。文者、詩賦銘頌箴讚弔誄等、是也。筆者、詔策移檄章奏書啓等也。即而言之、韻者爲文、非音者爲筆。文以兩句而會、筆以四句而成）。

一方（三）の散句を交えて駢儷體特有の對のリズムを破る結構については、『文心雕龍』麗辭篇に、「奇」散句と「偶」對句を交え用いるのが、對句運用の上で肝腎なことだ、と述べる一節がある。

若し氣に奇類無く、文に異采乏しく、碌碌たる麗辭は、則ち耳目を昏睡せしむ。必ず理をして圓に事をして密ならしめて、璧を其の章に聯ぬ。迭いに奇偶を用い、節するに雜佩を以てすれば、乃ち其れ貴きのみ（若氣無奇類、文乏異采、碌碌麗辭、則昏睡耳目。必使理圓事密、聯璧其章。迭用奇偶、節以雜佩、乃其貴耳）。

この「迭用奇偶、節以雜佩」の法は、同篇中さきに、對偶の史的な展開を辿る中で古えの「詩人」「大夫」の文章をその典型として言及されている。

詩人の偶章、大夫の聯辭に至りては、奇偶變に適し、經營を勞せず（至於詩人偶章、大夫聯辭、奇偶適變、不勞經營）。

こうした、當時の駢儷文の對偶技法としてかなり模範的と考えられた形を、庾信の碑文・墓誌文が（一）～（三）の如く豊富に示す存在であることは、以下の論述の際に引く諸例に於て十分に確かめられる。

三一（一）

それではまず、如上のリズムの緩急の要因の一つにもなっている、經歷部分での

履歷書的傾向について、些か検討を加えてみたい。何よりこれは視覚的にも明瞭な特長だから、取りかかりとして最適な検討事項と思われる。

死者の生前の官職歴を順を追って記す形式は碑傳文にはむしろ當りまえと言ってよいものだが、庾信の草する碑文・墓誌文の場合は、「〇〇年、〇〇を授けられ××公に封ぜらる、食邑△△戸」と、いつどういう官歴を持ったかが、几帳面なまでに詠み込まれているのが目を引く。例えば「齊王憲神道碑」だと、冒頭北周王室の縁起と宇文憲の生來の聰明さを示す逸話を披露したところへ「後魏二年、封城縣開國公、時年五歲也」と、第一の記年。その後三組の對句を擱いてさらに、齊王憲の職官歴は次のように辿られていく。

周元年（五五七）、進爵安城郡公、食邑二千戸、仍授使持節、驃騎大將軍、開府儀同三司。…

武成二年（五六〇）、授使持節、大將軍、都督益壽寧等二十四州諸軍事、益州刺史、改封齊國公、食邑萬戸。公時年十有六。…

保定四年（五六四）、與大司馬蜀國公圍金墉城。…

天和元年（五六六）、徵還、行雍州牧。…

（天和）二年（五六七）、拜大司馬、仍理小冢宰、營室殿軍器太監。…

建德元年（五七二）、進爵爲王、仍拜大冢宰。…

（建德）五年（五七六）、拜上柱國。…

宣政元年（五七八）六月二十八日薨、春秋三十有四。

むしろ行狀の形式に近いとも言える、まるで履歷書のようなこの細かい編年式の記述法は、北周に續く初唐の時期、楊炯の碑文などには往々認められるものである^④が、一方、庾信の先人たちの碑文・墓誌文に於ける、官職歴の表示のしかたとは、些か傾向を異にするものでもある。次章で扱う王褒の「陸逞碑銘」も然り。また溯って蔡邕の碑文などでは職官歴を記すにしてもやはり、これほど逐一編年という體裁ではない。例えばその「陳太丘碑文」（『文選』卷五八）を見ると、官職歴についての記述は、次の通り。

四爲郡功曹、五辟豫州、六辟三府、再辟大將軍、宰聞喜半歲、太丘一年。

四たび郡功曹と爲り、五たび豫州に辟せられ、六たび三府に辟せられ、再び大將軍に辟せられ、宰たること聞喜に半歲、太丘に一年。

とやや端折った提示になっている。對句とまではいかずとも、「△たび××とな

り、△たび××に辟され、…」と回数を織り込んだ同型の句の繰り返しには、官歴を記すことそのものよりもむしろ、文のリズムへの配慮が伺われる。こうした、履歴書的事項をも碑傳文全體のリズムの流れに融和させて語る傾向は、蔡邕の後、やや時代が下って齊の王儉「褚淵碑文」(同)あたりになると、いっそうはつきりしてくる。當然對句主體の文であるが、その中で官歴は褚淵の生涯の經歷を辿る本文の進行に沿って、一區切り一區切り提示される。

釋褐著作佐郎、轉太子舍人。…出參太宰軍事、入爲太子洗馬、俄遷秘書丞、贊道槐庭、司文天閣、光昭諸侯、風流籍甚。

泰始之初、入爲侍中。曾不移朔、遷吏部尚書。…

車寧領太子右衛將軍、固讓不拜。尋領驍騎將軍。以帷幄之功、膺庸祇之秩、封都縣開國伯、食邑五百戶。既秉辭梁之分、又懷寢丘之志、所受田邑、不盈百井。

久之重爲侍中、領右衛將軍。…

一目でわかる通り、官職の提示が前後の内容の句と切れ目なく配されている。時の表示があっても例えば「泰始元年」とか「二年」とかではなく「泰始之初」と幅をもった時期の示し方であったり、「之を久しくして(久之)…」と、前の句の示す情況と次に示す官職の情況とを一種橋渡しする効果を持つ語彙で繋いだり、と少なくとも、時期と官職名を直截に出して、内容の上でもリズムの上でも前後を寸断するような形にはなっていない。

やがて沈約(四四一～五一三)に至ると、興味深い發言が「齊故安陸昭王碑」(『文選』卷五九)に見える。

若夫彈冠出仕之日、登庸莅事之年、軍麾命服之序、監督方部之數、斯固國史之所詳、今可得略也。

夫れ彈冠出仕の日、登庸莅事の年、軍麾命服の序、監督方部の數の若きは、斯ち固より國史の詳らかにする所なれば、今略するを得べし。

要するに官職歴については「國史」史官の記述というちゃんとしたものがあるので、この自分が草する碑文の任ではない、という聲明であり、實際その言葉通りにこれに續く本文でも安陸昭王の官歴を明示することはしていないし、沈約のこの他の碑傳文にもやはり單純な編年的な形式は見當らない。同時期の徐勉(四六六～五三五)にも「故永陽敬太妃墓誌銘」序で、沈約と同じ趣旨の發言が認められる^㉑。庾信に一步先だつ世代の文壇を代表する徐・沈に於て相似る發言がなされているの

は、何とも興味深いことであって、履歴書的事項の過度の詳細さを抑える姿勢が、當時の碑傳文に於て推進されつつあったように窺える。そして、それと庾信の行っている編年式の記述とは、確かに方向を異にしている。

してみると、當時實際にあったであろう碑傳文の數量に對して、現在完全な形で見られるものは少なく、その限られた中での推定ということにはなるものの、とりあえず今日に傳わる範囲で見ると、行状ふうの編年形式によって官職歴を示す例を、庾信の碑傳文は魏晉南北朝を通じての流れにやや逆らうような形で、最も顯著に導入した存在と言えそうである。

三一 (二)

誤解のないように附言すれば、庾信の碑文・墓誌文が皆々前掲「齊王憲碑」並みに編年式の履歴書傾向が強いわけではないし、また履歴書的に時間を追う記述のうちにはままだ「時」を典故に本づいた對句で示した上で官職を言う、という六朝在來の様式を混用していたりもする。決して一概にはできないのである。ただ、履歴書的なケースがほぼ半數を占める^㉒からには、やはりこれを一つの特長と見ることは妨げられないだろう。その中で、編年的形式が採られずにむしろ六朝在來の形式となっている顯著な例は二通りある。それをここで確認しておきたい。

一つは、前章でも些か觸れた「周大將軍瑯邪定公司馬裔墓誌銘」。庾信が神道碑・墓誌兩方を草している人物は二人いるが、司馬裔がその一人である。因みに神道碑の銘を除いた碑文部分は約千六百五十二字、對する墓誌文はやや規模が小さく五百七十五字。「墓誌」に比べ、より公式性の強い^㉓「神道碑」のほうでは編年式に官歴が辿られている。長くなるので一部抜粹するに止めるが、前掲「齊王憲碑」と同じパターンを踏んでいること、次の通りである。

天保二年、除信州刺史、都督信州諸軍事。

朝發白帝、氣振巴丘之兵、
暮宿江陵、威警建平之戍。

(天保)五年、遷潼州刺史。益州柱國公、

隆帝子之重、延閣擬於叢臺、
鎮天井之星、岷山方於代郡。
公仰稟雄謨、故得身預舞陽之功、
參謀遠略、位極長平之寵。

(天保)六年、授使持節、大將軍、大都督西寧州諸軍事、西寧州刺史。…

天保二年、信州刺史、都督信州諸軍事に除せらる。朝^{あした}に白帝を發し、暮^{ゆうべ}に江陵に宿る。氣は巴丘の兵に振るい、威は建平の戌を警しむ。(天保)五年、潼州刺史に遷さる。益州柱國公は、帝子の重きを隆にし、天井の星に鎮たり。延閣は叢臺に擬え、岷山は代郡に方ぶ。公は雄謀を仰ぎ稟け、遠略を參謀す、故に身舞陽の功に預かり、位長平の寵を極むるを得たり。(天保)六年、使持節、大將軍、大都督西寧州諸軍事、西寧州刺史を授かる。

官職名を列ねた後にはやはり、その官職についての勤めぶりが二、三組の對句で續いている。さてその墓誌文では、上記の天保年間の記述が、こうなる。

蠻夷恃險、高山尋雲、九地縱横、峰危馬束、遂得谷靜山空、
狼顧鴟張、深谷無景、三門起伏、水險橋飛、冰消霧散。

仍爲信州刺史、都督信州諸軍事。

精兵守於白帝、足懼巴州之城；
船柿下於荊州、彌動西陵之戍。

即授使持節、大將軍、都督西寧州諸
軍事西寧州刺史。…

蠻夷險を恃んで、狼のごとく顧鴟のごとく張る。高き山は雲に尋ぎ、深き谷に景無く、九地縱横として、三門起伏あり。峰危ければ馬を束ね、水險しければ橋を飛ばし、遂に谷の靜まり山の空しきこと、冰の消え霧の散ずるがごときを得。仍りて信州刺史、都督信州諸軍事と爲る。

精兵白帝に於て守れば巴州の城を懼かすに足り、船柿荊州に下れば、彌いよ西陵の戍を動かす。即ち使持節、大將軍、都督西寧州諸軍事、西寧州刺史を授かる。

その官に至るまでの事情や理由が、對句構成で述べられたのを承ける形で「仍」「即」等助字の仲介によって、スムーズに斷絶なく官職名が列舉提示されていて、さきの神道碑の形式との相違は一目でわかる。因みにここに引いた「墓誌」最初の四言對五組十句の表す信州討伐の内容は「神道碑」では「天保二年」の直前に於て、かなり似通った語彙を交えて示されている^㉑。長くなるので省略したが、そこから續けて「神道碑」を読めば、直接年を示す形によって對句特有の流れが絶えず途切れ、こま切れのリズムがそこに生じていることが、いっそうはっきりする。司馬

裔についての兩碑傳文でこのような差異が確認されるからと言って、直ちに碑傳文＝編年式履歷書型、墓誌銘＝在來型などという紋切り型の結論に繋がるわけでは、もとよりない。例えば、碑文・墓誌文兩方が草されているもう一人、宇文公鄭常のほうは、官職歴の示しかたは碑文(千六十字)・墓誌文(六百五十四字)どちらも編年式で、より詳細か簡略かの差異程度であって、この司馬裔の例ほどに、碑文と墓誌文との間での明瞭な對比は認められないのも事實である。とは言え、次に引く例も全て墓誌文であって、結果として墓誌文に編年式履歷書型が少ないということは、一つの傾向のようなものとして記憶しておいてよいだろう。

もう一つの例は、北周社會の中で庾信の立場に相通じる何らかの側面を持った人々についての墓誌文である。例えば三十一篇の對象人物のうち、もと梁朝側に在つて後何がしかの理由で北周に羈旅の身となり、その經歷に庾信と似る部分があるのは、柳霞、蕭世怡、吳明徹の三名で、ともに墓誌銘の對象となっている。うち蕭世怡についての「周大將軍義興公蕭公墓誌銘」は編年式だが、他二人の墓誌文はそうではない。「柳遐墓誌銘」については前章で言及した經歷敘述の一節を参考することにして、ここでは「吳明徹墓誌」を例に引いてみよう。『陳書』卷九『南史』卷六六に傳のある吳明徹は、つまり北周政權側の人物ではない。父は梁の右軍將軍、明徹は陳に仕える身であったが、陳太建九年(五七七)北周との戦で捕らわれた結果、北地に羈留せられ北周大象二年(五八〇)長安に客死する。その墓誌銘を庾信が書き、その文は、從來庾信の碑傳文のうちの佳篇として論じられることの多い作品^㉒ともなっている。

蕭湘之役、馮陵島嶼。風船火艦、周瑜有赤壁之兵；
蓋舳櫓、魏齊有橫江之戰。

仍爲平南將軍、開府儀同三司、都督湘衡桂武四州刺史。

蕭湘の役には、島嶼を馮陵す。風船火艦、周瑜に赤壁の兵有り；蓋舳櫓、賀齊に橫江の戦有り。仍りて平南將軍、開府儀同三司と爲り、湘・衡・桂・武四州刺史に都督たり。

これは『陳書』本傳で陳廢帝中の記事^㉓として見える湘州刺史華皎の討伐をめぐる功績とそれに伴う昇進を述べる段であるが、「湘州」という舞臺に因んで「蕭湘之役」と暗示し、その水戦を「風船火艦」以下四七對で擬えている。「魏齊有橫江之戦」の「魏齊」について倪璠注には、戰國魏の公子「魏齊」には「橫江」の記事は

傳わらないが、三國呉の賀齊についてなら『呉志』にその旨傳わる（『呉志』卷十五賀齊傳）から「魏」は「賀」の誤りであろう、との考證があり、今それに従いたい。このような、その官歴がいつのことであるのかを直示せずに、故事に本づいて時世を表した後で官職を述べる形が「呉明徹墓誌銘」では常にとられていて、その結果、歴史的廣がりを持つ時代社會の相のイメージの中に、呉明徹なる一人の個、の像が綴られていく構圖となっている。

四

經歷の敘述部分に於ては、もう一つ、より重要な特長が認められる。典故運用をめぐるものがそれで、具體的には次のように把握される。

典故運用については、どの篇もそれ相當に検討の材料となし得る。三十一篇もある碑傳文のうち、いったいどこから検討の手を入れていくのがよいか、正直言って迷うところである。そんな中でいま、庾信の碑傳文に「周太子太保步陸逞神道碑」という一篇がある。これは前節で見た「齊王憲碑」と共に、後に王志堅『四六法海』の輯録するところとなっていることからしても三十一篇中の佳篇の一つと予想されるのだが、この陸逞については、同じく北周の王褒が「碑銘」を書いて現存している。しかもこの兩者を仔細に見るとかなりの相違が認められる。一般に、一人の人物について複数の碑傳文が存在するような場合には、相互の比較を通して、これほど規格の固定したジャンルの中で、著述する人間の個性や工夫に當るものがどれほど、どのように發揮されるかが或る程度検討できるはずなのだが、現存する數量自體に限りのある魏晉南北朝期の碑傳文についてそれはなかなか難しい。であるから、とりあえず陸逞をめぐる同時代の二人の碑傳文を比較できるという、希有な機會を活用して庾信の碑傳文三十一篇把握への手がかりにしたいと思う。

さて、同一人物を扱いながらの、王褒・庾信各作品の違いとは何か。大雑把に言えば、王褒が恐らく當時在來の駢儷體碑傳文の形式をより忠実に繼承した文であるのに對して、庾信のほうには、當時のものとしてはやや獨自の展開が認められる、ということである。より具體的には、履歷書的内容が積極的に記述されていること、その記述が駢儷體の基調の中でしばしば散體の句を交えて、リズムの上で破調とも言える形を呈していること、この二點である。兩碑文の對象である陸逞（『周書』卷三二・『北史』卷六九）は、西魏の時定められた北族の「八姓」の一つ步六

孤氏を賜った陸通の弟に當る^④。まさに北周「羣公」の一人であって、庾信はこの陸逞の姪に當る婦人「周譙國公夫人步陸孤氏」のための墓誌銘も草している。

初めに王褒による碑銘序のほうであるが、そのあまりに短いことから、『藝文類聚』卷四六「職官」に收録されて存する序が完全なものか或いは一部分に過ぎないのかは今ひとつ確かではないことを念頭に置きつつ、とりあえず目を通してみると、四字句を主體として内容もほぼ典故づくしであることが、わかる。「公は本と三吳郡三吳縣に居り、丞相遜の後なり（公本居三吳郡三吳縣、丞相遜後也）」と本籍・世系を記した後、父祖の履歷を辿る約二十三句を擱いて、陸逞自身についての記述は次のようになっている。

公識度深詳、尚標閑遠、處衆撝謙、居簡行敬。風鑒外明、潛機内敏。

建章門戶、張華立成；	昔處文房、	或傳冰華、
原陵松柏、虞延盡記。	又居内職、	時遊甲邸。

魏祖軍謀、還豫南陂之宴；	出内優隆、
梁王師傅、猶對宣室之談。	通籍營寵。

升降榮歩、便頌宮禁。銘曰、…

公は識度深詳にして、尚標閑遠なり。衆に處しては撝謙、簡に居りては行敬、風鑒外に明らかにして、潛機内に敏なり。建章の門戶は、張華立ちどころに成し、原陵の松柏は、虞延盡く記す。昔文房に處りて、又た内職に居る；或いは冰華に傳たり、時に甲邸に遊ぶ。魏祖の軍謀は、還って南陂の宴に豫かり、梁王の師傅は、猶お宣室の談に對う。内より出ては優隆、籍に通じて營寵、升降は歩を榮にして、便ち宮禁に頌せらる。

二句一組或いは四句一組の對句のリズムが守られている、この行蹟の記述は、實際に陸逞が何という官職であったのか、如何にそれを遂行したのか、という個別性よりも、張華や虞延の故事をはじめ、典故が示す類型に陸逞をひたすら重ね擬えることに終始している。ここに於て陸逞自身の個、は、類型のイメージの中に溶けこんだ形で、言わば歴史的人物群像の一點として既に位置づけられた者のごとく表われる格好となっている。そうした位置づけ＝評価、しかも肯定的な評価、を全篇に湛える形で個、を語られることは、陸逞ならずとも當時の士大夫にとって望むところだったのではなかろうか。

一方庾信の「周太子太保步陸逞神道碑」は、銘部分を除いた碑文が千二百一字。「公諱逞、字季明、吳郡人也」と型通りの冒頭の後、陸氏の系譜及び陸逞の資質

が幼少時から如何に優れていたかを述べ、陸逞本人の官歴とそれに伴う功績を順を追って示す段落に入る。

出身羽林監、輕車將軍、除尚書右丞。官聯會計、務應平準、水衡貫朽、長平粟紅。授使持節、車騎大將軍、儀同三司、增邑千戶。尋遷駕部中大夫、領吏部中大夫、歷蕃部、御伯。

羽林監、輕車將軍に出身し、尚書右丞に除せらる。官は會計に聯なり、務は平準に應じ、水衡は貫なり朽ち、長平の粟は紅らみくさる。使持節、車騎大將軍、儀同三司を授かり、邑千戸を増す。尋いで駕部中大夫に遷され、吏部中大夫を領し、蕃部を歴て、伯に御す。

傍線を付した對句二組以外は全て履歷事項の羅列、傍線部分「官聯會計、務應平準、水衡貫朽、長平粟紅」は、前掲の官としての務めぶりの見事さを『史記』平準書や『漢書』賈捐之傳に本づいて述べたもの。その次、傍線部に注意されたい。

東京鼎實、先加鄧騭之勲、西晉官人、多用山濤之啓。豈若五王登朝、必司賓主之禮、六龍御轡、取定鸞和之節。御正以官觸父名、不拜。會稽有王會之名、其子不爲太守、博陵有王沈之封、其兒不爲刺史。

東京鼎實、先に鄧騭の勲に加え、西晉官人、多く山濤の啓を用う。豈に五王朝に登れば、必ず賓主の禮を司り、六龍轡を御すれば、取りて鸞和の節を定めるが若からんや。御正は官父の名に觸れるを以て、拜さず。會稽に王會の名有れば、其の子は太守と爲らず、博陵に王沈の封有れば、其の兒は刺史と爲らず。

陸逞の父の名は政、故に「御正以官觸父名、不拜」。明らかに直敘式の散句であり、續く「會稽有王會之名、其子不爲太守、博陵有王沈之封、其兒不爲刺史」はそれぞれ『晉書』卷七六・卷三九に見える王會・王舒父子、王沈・王浚父子の故事に本づいて、上の句に比擬する内容となっている。このように直敘式の散體句の類が、同じ内容を表す用典の對句群の前に置かれて補い合うケースが庾信の碑傳文には目だって多い。このすぐ後にも、陸逞の清廉ぶりに關するエピソードを次のように述べる。

暗夜有人餉羅數十匹、公閉門不受。行人干觸、具以聞奏。朝野稱之。太尉楊震、直推故吏之金、涼州張奐、高揖人之馬。清畏人知、我無慚德。

暗夜に人の羅數十匹を餉るもの有るも、公は門を閉ざして受けず。行人干觸

すれば、具さに聞奏す。朝野之を稱う。太尉楊震、直にして故吏の金を推し、涼州張奐、高くして人の馬を揖む。清にして人の知らんことを畏れ、我德に慚ずること無し。

散體の傍線部は、下に續く四六對で示される故事の要點を述べたもの。對句部分の「太尉楊震、直推故吏之金」は『後漢書』楊震傳（卷五四）、「涼州張奐、高揖人之馬」も同じく『後漢書』張奐傳（卷六五）、いずれも官吏としての清廉さに通じる故事である。ところでこうして見ると、一見對句部分は故事、散體部分は陸逞自身のエピソードを直敘しているかのようであるが、實は「暗夜…不受」のほう楊震の故事を、「行人…聞奏」のほう張奐の故事を、それぞれ下敷きにしたと思しい。すなわち、「楊震傳」では王密が楊震に夜に紛れて金十斤をこっそりと贈ろうとした（至夜懷金十斤以遺震）のに對して楊氏は拒否を匂わせた、すると王密は「暮夜無知者」夜だから誰にもわかりっこありません、さあどうぞ、すかさず楊氏は「天知、神知、我知、子知。何謂無知」ときっぱり拒んだので、密は愧じて退出した、とある。この『後漢書』の「金十斤」を「羅數十匹」に入れ替えれば、碑文と話の枠組がぴたり重なるのは、一目瞭然であろう。また「張奐傳」では、羌族から馬二十匹と金鑠八枚を贈られた張奐は一旦それを受けておいて、「主簿」書記官を呼び羌人を面前で諭し改めてその金と馬を返した、とある。庾信の碑文にある「行人」とは賓客・使者及びそれを接待する官を指すことを考えれば、『後漢書』の記事との符合を論ずるのはそう無理ではない。これを要するに、通常であれば、二組の四六對に仕組まれた典故が表す内容だけで、陸逞のエピソードをもそこに込めて終わってしまうところを――前掲王褒の碑銘序がまさにこれに當る――、庾信の碑文は、敢えて散體句の形式を借りて、後續の典故の種明かしをしてしまう。一見、典故使用の技術的効果を台無しにしてしまいかねないこの數句であるが、結果的にはむしろ、その散體部分があたかもこの碑文が他の誰でもない陸逞の個、を表現する場であることを印象づける効果を生んでいる。同様の趣向は、陸逞の經歷を述べる段のうちにもう二箇所見える。一つは、持病に糖尿病を患っており、それが悪化して亡くなったことを述べるくだり。

本有消渴之疾、常餌金石自理。舊疾微增、奄捐館舍。茂陵之下、不留封禪之書、校尉之營、惟餘服食之器。

本より消渴の疾有りて、常に金石を餌して自ら理むるも、舊疾微や増し、奄

に館舎を捐つ。茂陵の下、封禪の書を留めず、校尉の營、惟だ服食の器を餘すのみ。

死亡を遠回しに言う決まり文句「捐館舎」を含み、かつ六六四四と、字数は整っているにしろ、傍線部は直敘の形式を取って一見陸逞のみに關する記述のようである。續く四六の對句部分「茂陵之下、不留封禪之書」で司馬相如の故事（『史記』卷一一七）、「校尉之營、惟餘服食之器」で宣秉の故事（『後漢書』卷二七）に本づき、死後の身辺が清廉であった内容を示す。しかし、この前後二つの部分は死因そして死後の情況という並列の關係を持つに止まらない。すなわち、一句め「本有消渴之疾」の下敷きとして司馬相如に關する故事「（相如）常有消渴疾」（『史記』）彼もまた糖尿病持ちだったこと、は誰にも容易に想起されるのであって、對句部分に對して、この傍線部が導入的役割をも果たし、一方對句部分は先行する一見陸逞の個別のエピソードを伝えるだけの部分に、司馬相如との符合、という一種時空間を超えた廣がりを与える効果を持つ格好になっているのである。

もう一つはやはり陸逞の清廉ぶりを伝えるエピソードに於てである。

家僮暮行還、得遺錢於道、并白絕十疋、公訪得其主、即以還之。見金於路、指以示人、得錢於道、持留掛樹。方之今日、異代同風。

家僮 暮行して還るに、遺錢を道に於て得、並びに白絶十疋あり。公 其の主を訪ね得て、即ち以て之を還す。金を路に於て見て、指さして以て人に示し、錢を道に於て得て、持ちて樹に留め掛く。之を今日に方ふれば、代を異にして風を同じうす。

手っとり早くいえば、落とし物をネコババせずきちんと持ち主を捜し、届けた話。對句部分で比擬されているのは、「披裘負薪」で著名な延陵季子と披裘公との故事（『韓詩外傳』他）及び、道で拾ったお金を私物化せず樹木の枝へ掛けておいたところ、その樹への「お金掛け、ブームを引き起こした、という三國魏の邴原の故事（『魏志』卷十一裴注引邴原別傳）で、それと陸逞の行爲とは時代を隔てて趣を同じくするものだ「異代同風」、という庾信による評がこれを結んでいる。

さきに見た王褒のような對句主體の表現であれば、「陸逞は昔の〇〇のように××である」或いは「昔の〇〇の××も陸逞には及ばない」式の單純な擬えに過ぎない。しかしここに見てきた如く、庾信の散句と對句を交えた構造からは、「いま陸逞は××であって、昔の〇〇も××であったのと、似る」というように、例えば

「清廉」という一つの性質をめぐる故人と陸逞の類似が、その兩者の間に在る「昔」と「今」の時間の隔たりを隠さずむしろ明かしてしまう装置を介して、並列的或いは重層的に提示されるに至っている。そもそも文章に於ける典故の技法とは、^⑤「今」と「昔」の擬えに依據するものであるが、庾信のこれは、その擬えの手のうちを明かしてしまつて、それさえも文章展開の一つのなる典故世界よりも一層重層的な類型的人物像の表現に結びついているのである。

さて、第三節冒頭で要約した庾信の碑文・墓誌文に於ける對偶の特徴（三）、『文心雕龍』麗辭篇の所謂「迭用奇偶」の實踐は、後に清の孫德謙『六朝麗指』では「駢散兼行」と呼ばれ、對句續きのダレを引き締める例として稱揚されている。

碑誌の文は、蔡中郎より後、皆 節を逐いて敷き寫す。有唐に至りて以降は、乃ち其の體を易うるも、六朝の若きは則ち猶お中郎の矩矱を守れり。王仲寶・沈休文より外は、庾子山を以て最も長ぜりと爲す。其の 一事を敘する毎に、多く單行を用い、先に事略を將て説き明かし、然る後に故實を援引し、聯語を作成するを觀れば、此れ 駢散兼行の證と爲すべし。…故に子山の碑誌諸文は、述べて行履に及ぶや、之を出だすに散を以てし、而うして駢儷の句は則ち其の下に接す。之を別種の體裁に推せば、亦た應に駢中に散有るべし。是くの如くせば則ち氣既に舒緩にして、平滯に傷われず。而して辭義も亦た復た軒爽ならん。（碑誌之文、自蔡中郎後、皆逐節敷寫。至有唐以降、乃易其體、若六朝則猶守中郎矩矱。王仲寶・沈休文外、以庾子山爲最長。觀其每敘一事、多用單行、先將事略説明、然後援引故實、作成聯語、此可爲駢散兼行之證。…故子山碑誌諸文、述及行履、出之以散、而駢儷之句、則接於其下。推之別種體裁、亦應駢中有散。如是則氣既舒緩、不傷平滯。而辭義亦復軒爽）。

孫氏のこの一節から窺うに、どうもこの「駢散兼行」は、六朝期の他の碑傳文には徐勉・沈約を別として、あまり見かけられないものらしい。しかし今見てきた通り、庾信の碑傳文に於ては非常にしばしば認められる。この『六朝麗指』の一節はその認識を肯うものと言える。「駢散兼行」のリズムに支えられた典故運用は、庾信の碑傳文を特徴づける人物表現の様式の一、と考えてよい。

五

『六朝麗指』には、前節で採りあげた「駢散兼行」とは別に、碑傳文に於ける故

事・故人への比擬のしかたをめぐり庾信の作品を例に引いた、次のような指摘がある。

或るひと曰く、庾子山の周大將軍懷德公吳明徹墓誌銘に、冠軍侯の兵を用うるや、未だ必ずしも古を師とせず、武安君の士を養うや、能く人心を得。其の倫に擬えんとすれば、公を之謂う矣、と。子山自ら 其の倫に擬えんとすれば と言え、則ち運典は宜しく確切なるべきに似たり、と。運典確切と曰うは、固よりなり矣。然れども必ず參うるに（沈）休文の法を以てすれば、乃ち枯窘を致さざるのみ（或曰、庾子山周大將軍懷德公吳明徹墓誌銘、冠軍侯之用兵、未必師古。武安君之養士、能得人心。擬於其倫、公之謂矣。子山自言擬於其倫、則運典似宜確切。曰運典確切、固矣。然必以休文之法、乃不致枯窘耳）。

「吳明徹墓誌銘」の一節「冠軍侯之用兵、未必師古。武安君之養士、能得人心。擬於其倫、公之謂矣」の末尾二句が焦點。先行する四句で、典故運用により古人への吳明徹の比擬を既になしておきながら、重ねて「擬於其倫、公之謂矣」と言って前四句の擬えの趣旨を我から明かしてしまうのを、確實な典故運用と見る人もいるけれども、孫氏自身の考えでは、沈約の典故用法を交えてこそよい、との意見である。ここには、比擬に於て、敘述對象と比擬對象との重なり度の合いをどうとるか、どうあるべきか、という問題が潜んでいる。

孫氏が獎める沈約の法とは、例えば「齊故安陸昭王碑文」の一節。下半分が孫氏引用の箇所、それだけではわかりにくいので先行の數句を上半分に參照させてみることにする。

●疑獄得情而弗喜、
宿訟兩讓而同歸。

雖春申之大啓封疆、
鄧攸之緝熙瀑庶、

不能尚也。

●而惡子咸誅、被以哀矜、
孚以信順。

南陽葦杖、未足比其仁；
潁川時雨、無以豐其澤。

沈約の文章のうちに、典故の内容を安陸昭王の行事と比擬比較する句はしばしば見えるが、上にも明らかな通り一度比擬してしまってから再度重ねて比擬比較の旨を明かしたりはしていない。言わば、評論する語も對句・用典のリズムの中にすっぽり組み込まれて、だぶったりすることがない。對して庾信の場合は、故人への比擬

比較の意が十分に達せられる對句を置いてなお一言比擬比較の意を明言することが度々あり、それを孫氏は沈約の例を盾に、槍玉にあげている次第である。

實は、庾信の碑傳文三十一篇のうちには前掲部分以外にも、同様の指摘を受けるべき同趣巧の部分がかかなりある。凡そ一篇に二、三箇所の割合、というところだろうか。それは、錢鍾書『管錐編』では非難の的となっている部分であるものの、孫氏の口吻からしても駢儷文研究の立場からはそう一概に排すべきものでもなさそうである。ちょっとばかりオーソドックスではないことは確かのようにだが。例えば「吳明徹墓誌銘」では、前掲の一節の他に、

葛瞻始嗣兵戈、仍遭蜀滅；
陸機纔論功業、即值吳亡。——公之仕梁、未爲達也。

葛瞻は始めて兵戈を嗣ぎて、仍りて蜀の滅ぶるに遭い、陸機は纔かに功業を論じて、即ち吳の亡ぶるに値う。公の梁に仕うるは、未だ達と爲さざるなり。この一節なども、六四の對句が表す故事のポイント、つまり葛瞻・陸機の各故事と吳明徹とが比擬されるわけ、を傍線部で重ねて述べてしまっている。これは、用典の種明かしであると同時に、一種の概括の文句として上の六四對を締める働きもしている。仕えようと心寄せる王朝が眼前で滅亡して志を達せずにいる者、古えに葛瞻・陸機あり、今に「公」吳明徹がいる。葛瞻・陸機に吳明徹が擬えられていることは確かだが、六四の對句に散體で一言付加するスタイルで示されることによって、對句の表す「古え、に對應する「今、という兩者の關係が強調され、結果「今、に存在感が加わっている。もう一例。

昔者裨將失律、衛將軍於是待罪、
中軍爭濟、荀桓子於焉受戮。——心之憂矣、胡以事君。

昔 裨將 律を失い、衛將軍は是に於て罪を待ち、中軍 濟を爭い、荀桓子は焉に於て戮を受く。心の憂うるや、胡を以て君に事えん。

これで「吳明徹墓誌銘」からの引用は三例めとなるが、こうして見てくると、故事・故人への比擬としての異色さも然ることながら、對句の後に續く傍線部散體句が、吳明徹についての書き手庾信による評語的な役割も果たしていることは、無視できない。對句による歴史的イメージの提示に對して、主人公吳明徹をはっきり強調する句が、そのまま書き手庾信の顔見せにもなる、つまりその部分では歴史的イメージの展開から「今、の時制へ一瞬戻るわけである。その繰り返しによって、こ

の墓誌文の主人公、敘述すべき対象が誰であるのか、歴史的イメージの層の中に埋もれかかった読者の関心を絶えず呉明徹の上に牽きつけることになる、そう讀むことは無理ではないように思える。

この獨特のリズムを伴う典故運用の形は、庾信の碑傳文のほとんどで見かけられるもので、故事による對句の後に續けて「類に連なる（連類）」「倫に擬う（擬倫）」「同年に語るべからず（不可同年語）」「何ぞ云うに足らん（何足云）」「未だ學ばず（未學）」「同じからず（不同）」などの評論的な語彙を添加している場合が随所で認められる。

●王武子以上將開府、未滿立年；

荀中郎爲十州都督、才踰弱冠。方之於公、已爲老矣。

王武子は上將開府たるを以て、未だ立年に滿たず、荀中郎は十州都督と爲りて、才に弱冠たるを踰ゆるも、之を公に方ふれば、已に老と爲す矣。

（「齊王憲神道碑」）

●生爲立廟、刻石頌功。

成都有文翁之祠、非謂生前、
漢陽有諸葛之碑、止論身後。

比之今日、豈可同年而語哉。

生きながらにして爲に廟を立てられ、石に刻みて功を頌えらる。成都に文翁の祠有るも、生前と謂うに非ず、漢陽に諸葛の碑有るも、止だ身後を論ずるのみ。之を今日に比ぶれば、豈に年を同じうして語るべけん哉。（「同」）

●趙儼之爲驃騎、正駕單車；

張堪之拜光祿、長乘白馬。以斯連類、朝野榮之。

趙儼の驃騎と爲るや、正に單車に駕し、張堪の光祿を拜するや、長く白馬に乗る、斯を以て類に連ね、朝野之を榮とす。（「莫陳道生墓誌銘」）

こうしたやや念の入り過ぎる典故運用が「儷事」すなわち對句の體例を潰している、というのは錢氏の意見。また前掲の通り、孫氏は「運典」の法としてやや不満を表明している。兩者の非難の趣旨も頷かれぬことはない。しかし、第三節で検討した履歷書的傾向と併せて、このように駢儷體のリズムに緩急をもたらす形式が、偶然にせよ故意にせよ、よりはっきりと庾信の「今」＝敘述対象、を對句の生み出す「古え」のイメージに對比して示す、という人物描寫に繋がっていることは確かであって、やはり六朝以來の碑傳文の流れの中で、注目に値することである。これ

を比擬の問題として見れば、似通った二つ以上のものの区別を曖昧化させ一事一物に限定されないイメージの擴がりを現出する、という比擬本来の効果を借りつつ、方や、比擬するもの・されるものの間を曖昧にせず、比擬の主眼がどこに在るかを明示する態度、と見ることができる。そして結果的にはそれが、敘述対象を、典故のもたらし歴史的人物のイメージの層への埋没から救っているのである。

ところで、このような對句形式が、千字前後の膨大な分量の中で一、二箇所挿入されるだけの場合と、四、五箇所或いはそれ以上、例えば段落の切れ目ごとに頻出するのでは、一篇に於ける存在意義が相當違ってくるだろうことは容易に想像がつく。何しろ「呉明徹墓誌銘」と同様、このような對句の型が頻出するのは「柳遐墓誌銘」である。

●王祥佩刀、世爲卿族；

鮑永驄馬、家傳司隸。

以此連類、差無慚德。（「柳遐墓誌」）

●魏侯之見劉廙、不覺斂容；

漢主之觀田鳳、遂令題柱。

比之今日、曾何足云。（「同」）

●昔馬游志氣、爲馬援所知；

班嗣才學、爲班彪見賞、

復聞於今日矣。（「同」）

など、話題の替わりめで必ずと言ってよいほど挟まれている。「呉明徹墓誌」については、経歴敘述部分で編年の記載法に由らないことを第三節で、また他の多くの碑傳文に見られるような類型的傳頌部がないことを第二節で、それぞれ言及してきた。今また四六對の直後に評語的散體句が追加する形式の具體例として比較的丁寧に見てみて、かなり多く認められることを知った。一方の「柳遐墓誌銘」も第二・第三節での検討を通して、明徹の場合とほぼ同じ型の敘述がなされていることを、その都度確認してきた。そしてここでの符合。これはもはや、單なる偶然の一致などではないだろう。兩篇とも、墓誌銘としての體裁を維持しながら、常に庾信作の碑傳文の中で多數派に屬する形式に由らず、少數派の趣向を示す。なぜだろう。やはり、対象の二人、呉明徹・柳遐が庾信自身と相通じる境遇を抱えた人物である、という條件が關與している、と見るのが自然ではないだろうか。

ここで再び、書き手と対象人物の距離の問題が、覗いてくる。故事に本づいた對句の後ろに散句を付して、リズムの上では對句の滑らかな流れを頓挫させ、その斷

絶の効果も借りて内容の上では、その文章の主人公へ、つまり「今、へ読者の目を引き戻す、その趣向を一篇のうち何度も繰り返すことは、當然主人公の存在の強調ともなるが、同時に対象を強調しようとする書き手の意思の表れそのものとも言える。これは書き手が、対象人物を評する句を介して、単なる書き手の立場から一步踏み込み、対象人物との距離を縮めたところに立って語る存在なる自己を、文の上に反映させている場合と、捉えることができるだろう。

つかみどころのなさそうに映る三十一篇の碑傳文も、こうして検討してみると、幾つかなの特長とそれに伴う作品同士の微妙な傾向の相違が見えてきたように思われる。

結び

以上、庾信碑傳文を、その特長となる事柄に即して点検してきた。主に対象人物の経歴を述べる部分と頌の部分に於て重點的に窺われる、その特長とはすなわち、年譜的内容に於ける編年型と非編年式在來型の使い分け、散句の挿入による所謂「駢散兼行」に伴う獨特の破調、典故運用の對句プラス論評的語彙という型による人物像の提示、であった。また、頌の部分に於けるかなり露骨な類型的表現の中にも少数ながら対象の「個」に即した書き分けの緒が認められた。こうした幾つかなの特長に、常に何らかの――對句の滑らかさを破るのを主として――リズム効果が伴う傾向を重視するならば、典故と對句で類型化の袋小路に陥りやすい性質を具える駢儷體碑傳文に於ける、マンネリ解消とでも言うべきものが結果としてここに實現しているように受けとめられる。それは單調になりがちなこの長い「傳記」を、聞き手受け手を如何に飽きさせずに聞かせるか、讀ませるか、という碑傳文にふさわしい實際的な配慮であったのかも知れない。

各篇、それらが相俟ってそれぞれ死者生前の「個」の表現に至っている。一篇一篇がどのような他者像を結んでいるか、について本論で十分に満足とは思われな
い、否、ようやくその解明のための外堀を埋めたに過ぎない。今後さらなる追求の必要があることを承知しつつ、本論の段階で次のように結ぶことは許されよう。すなわち、ここに見た「個」とは言ってももちろん、その言葉から予想されるような敘述対象その人だけの絶対無二の「個」としてではなく、隙間のない典故のイメージが齎す、既にある何らかの人物像の類型として語られることになる點では、六朝期碑傳文の流れから逸脱するものというわけではない。しかしながら、本論中、折

にふれて注意してきた通り、呉明徹や柳遐のような人物を対象とした場合、その墓誌文の敘述は、庾信碑傳文全體の特長のうちに一々例外を添える距離に於て、書き手庾信の「個」も、見え隠れしているのである。

- ① 吉川幸次郎・小川環樹『中國の散文』（中國詩文選Ⅰ、一九八四年、筑摩書房）中、吉川幸次郎「敘述の文——人間を対象とするもの——」（「中國の文の文學」）には歴史記述と碑誌傳狀の文學をめぐる考察が示されている。また小川環樹「敘述の文——紀傳と編年史——」「同——逸事の人物像——」（「中國散文の諸層」）。また、本論では、専ら書き手にとって、他、なる人物を対象とする敘述について考察を試みるものであるが、もちろん文學史の上にはもう一つ、己れ、なる人物を敘述する文章も展開している。川合康三『中國の自傳文學』（一九九六年、創文社）参照。
- ② 徐師曾『文體明辨序說』には、「行狀」から始まって一續きに「述」「墓誌銘」「墓碑文」「墓碣文」「墓表」「謚議」「傳」「哀辭」「誄」「祭文」「弔文」まで計十二種の文體について説かれている。ほかに、中田勇次郎「中國の墓誌」（『中田勇次郎著作集』第二卷、一九八四年、二玄社）「墓誌の文章」に、墓誌を軸とした論ではあるが、諸文體間の異同が言及されている。また前掲注①『中國の散文』一〇～一一頁も参照。
- ③ 封墓之文、自中郎以上罕著於簡策、魯闔里之石槨、陳都門之佳城、辭近讖言、未足徵信。逮乎齊梁周魏之世、王・沈・溫・庾、鑣轡竝馳、或病枝離、或傷華縟、猶難語該而要、雅而澤之旨、矧其下也。唐賢既興、首推昌黎、朱弦更張、古韵未泯。
- ④ 前掲注①『中國の散文』「（碑誌傳狀の）文學が量的にも質的にも、確固たる位置を文學史に占めるのは三千年の文學史の中ほど、唐の中頃以來である。…（六朝時代の墓誌は）人間の事実を韓愈以後のごとく描寫するには不便な文體であった」（三八頁～）。
- ⑤ 人物の生涯を対象として傳記的に敘述するものとして『庾子山集』中の一編「周使節大將軍廣化郡開國公丘乃敦崇傳」（卷十一）も、碑誌傳狀の文として考えることができると思われる。
- ⑥ 王瑤「徐庾與駢體」（『中古文學論集』一九八二年、上海古籍出版社）。また土屋昌明「庾信の碑銘について」（「費振剛著『銘文と碑文』譯稿」附、『富士フェニックス論叢』第一號、一九九三年）では、庾信の碑銘のうち「吳明徹墓誌銘」「思舊銘」に関する検討、及び庾信の碑銘が「六朝文學における碑銘の到達

點を示した」こととそれを承けた初唐文學との関係についての考察が示されている。

- ⑦ 趙王招との間には「奉和趙王春日」「奉和趙王隱士」等、唱和詩が十五篇以上及び啓文數篇（卷八）が見られるが、特に「趙國公集序」（卷十一）は、趙王の文章について述べ稱えたもので、ポイントを絞って人物を稱える性格を持つ文の一例として、本章第二節の参考にもできる。一方、滕王^①に關しては、王が寄せた「庾子山集序」への謝辭「謝滕王集序啓」ほか「謝滕王賁巾啓」「謝滕王賁馬啓」等、謝禮の啓文に限られるが、交流を窺わせる材料には違いない。
- ⑧ 「思舊銘并序」の題下倪璠注に「思舊銘者、悼梁觀寧侯蕭永作也。觀寧之卒、王褒有送葬之詩、子山著思舊之銘。…子山與蕭・王二君同時羈旅、是篇皆其鄉關之思」。その銘の「序」文は、本論の碑文・墓誌文との比較に有益な存在と言えるが、内容的には倪注にも見えるごとく「鄉關之思」に満たされ、その表現は典型的な四六基調の駢儷體文となっている。なお、前掲注⑥土屋氏論文参照。
- ⑨ 『周禮』春官・大史に「大喪、執^②、以^③勸防。遣之日、讀誄」。
- ⑩ 前掲注①引『中國の散文』「敘述の文——人間を対象とするもの——」参照。特に韓愈の、友人知人を対象とした墓誌銘に關する論述は同書二六～三四頁。
- ⑪ 前掲注②中田氏論文に「文體の構造」の一節があり、明の王行『墓銘舉要』の示す十三の要項「諱、字、姓氏、鄉邑、族出、行治、履歷、卒日、壽年、妻、子、葬日、葬地」を引き、さまざまな順序の組み替えもあることなど論じておられる。墓誌文に關しての説であるが、これをも参考しつつ、實際の碑文・墓誌文に即して概括すれば「出自・經歷・頌」そして「銘」が加わる、という構造で捉えられるだろう。なお誄をめぐるのは、福井佳夫「六朝文體論——誄について——」（『中國中世文學研究』第十四號、一九七九年）、林香奈「漢魏六朝の誄について」（『日本中國學會報』四五集、一九九三年）があり、誄の形式を「序・出自・頌・哀」の四大部構成と捉えるのが、定着しつつあるようである。本論では、林氏論文に於て六朝期に於ける誄と碑・誌銘のスタイルの融和の過程が考證されているのに鑑みながら、碑誌の主要部として無視し難い銘以外の文について、右のような構成で捉えるものである。
- ⑫ 神道碑文で頌に相當する部分が認められるのは十二篇中八篇、墓誌文のほうはやや少なく九篇中四篇。婦人の銘にはなべて見られない。無論、こうした比率に

は墓碑と墓誌との規模の違いが多少關與していることが予想される。

- ⑬ 錢鍾書『管錘編』第四冊一五二七頁～。「庾信《周上柱國齊王憲神道碑》。按信集中銘幽諛墓、居其太半；情文無自、造語謀篇、自相踏襲。雖按其題、各人自具姓名、而觀其文、通套莫文彼此。惟男之與女、撲朔迷離、文之與武、貂蟬兜牟、尚易辨別而已。…庾信碑誌、有兩慣技。一：駢文儷事、本借古比今。…信敘墓中人生平時、每於儷事後、亟自評所儷事之切當抑參差、藉作頓挫。本《碑》即有四處：…其謂「連類、擬倫、者、未必貼合；謂「不可同年語、何足云、者、又每爲所儷事不貼合之飾詞；謂「未學、不同、者、直是無事可儷而強儷事之供狀、譬如自首之得減罪也」。

⑭ 第三節（二）を參照。

⑮ 前掲注⑬傍線部參照。

⑯ 本章第三節冒頭部・第四節所引孫德謙『六朝麗指』參照。「駢散兼行、の語を用いて述べるのは孫氏。

⑰ 例えば、「公器宇淹曠、風神透遠、璣鏡照林、山河容納、置樽待酌、懸鐘聽扣、聲動天下、光照四鄰」（「齊王憲碑」）、「公經德秉哲、體道居貞、履貴思沖、居盈念損」（「慕容公碑」）、「公儀表外明、風神內照、器量深沈、階基不測。事君惟忠、事親惟孝、言爲世範、行爲士則」（「步陸逞碑」）等、少しずつ異なっているが、どれも同じカテゴリーを出るものではない。また中にはいきなり「公入仕四十五年、身經一百六戰。通中陷刃、疾甚曹參、刮骨傳藥、事同關羽」（「紇干公碑」）と武勇傳に入っただけに話題が終始してしまう場合もある。

⑱ 序章注①興膳氏書（一九八三年、集英社）（三）一二「歸田の夢」に、「小園賦」他に即した論がある。

⑲ 『文鏡秘府論』については、興膳宏譯注『文鏡秘府論』（『弘法大師空海全集』第五卷、一九八六年、筑摩書房）參照。

⑳ 『文心雕龍』書記篇に「狀、貌也。…先賢表諡、並有行狀」と簡単な解説があるが、さらに『文體明辨序說』「行狀」の項ではこの『文心雕龍』を引用して後「蓋具死者世系、名字、爵里、行治、壽年之詳、或牒考功太常使議諡、或牒史館請編錄、或上作者乞墓誌碑表之類皆用之」と説いている。つまり、諡を決定してもらったり、正史に傳を採用されたり、他ならぬ碑文・墓誌文を頼んで起草して

もらったりの際に、その資料となる文章ゆえに、履歷功績事項がことさら詳細に記述されるジャンルであった。なお『文心雕龍』で各種文章形式について網羅的に解説する篇で扱われていること、また『文選』で卷六〇に任昉「齊竟陵文宣王行狀」一篇のみの採録であることから推しても、六朝期に於て行狀はあまり、文章、として重きをなしていなかったらしい。

㉑ 例えば「唐右將軍魏哲神道碑」「唐昭武校尉曹君神道碑」（卷八）などでは、時を直示する編年式の敘述が目にとまる。倪璠注の『庾子山集』には、實際は楊炯撰に成る「彭城公夫人爾朱氏墓誌銘」「伯母東平郡夫人李氏墓誌銘」（卷一六）二篇が誤って収録されているが、これについて倪氏は「初唐四傑去庾最近、余喜其文似開府、遂不忍去、因附注釋」言っているが、庾信以後初唐に於ける碑傳文の展開をさらに追究しようとすれば、この楊炯が眼目になるのではなかろうか。

㉒ 徐勉「故永陽敬太妃墓誌銘」（『古刻叢鈔』所収）では「其先周靈王之後、自秦漢逮於晉宋、世載光□、羽儀相屬。既以備於前志、故可得而略焉」とある。この沈約・徐勉二例に本づいて孫氏『六朝麗指』は「吾於此悟、作文之法、有不待詳備、特又不可過略者」と言って、文の詳略をわきまえた文の例に推している。

㉓ 婦人を對象とする墓誌文は、軒並み短いこともあって、この場合検討對象とし難い。それを除いた二十一篇の中での割合である。

㉔ 前掲注②中田氏論文「墓誌の文章」に「碑の本質は公的な記録であり、事實の年月を明記するのに對して、墓誌はあくまでも私的なもので、事實の記録を本旨とするものではない」（『著作集』四八四頁）とある。但し「事實の年月」の記しかたの實情については、必ずしもそうきっぱりと整理してしまえるものではないこと本論で點檢する通りである。

㉕ 「墓誌」の當該部分と重なる語彙・語句に波線を付してみると、次の通り。
「更討信州、賊山彰、尋寶淪恃險、峽路五尺、絙約纔通、懸水三門、橋飛濟渡。既而風行草偃、谷靜山空、前後平十一城、獲九千餘口、馬歸平樂、金輸水衡」

㉖ 一部例を示すと「大同元年、年十六、封豐城縣開國侯、食邑五百戶。…大同元年、入直殿省。其年、轉太子中書舍人。…大同三年、授持節、仁威將軍、譙州刺史」。

㉗ 例えば、李兆洛『駢體文鈔』・王志堅『四六法海』いずれにも所収。また前掲

注⑥土屋氏論文参照。

- ②⑧ 「及湘州刺史華皎陰有異志、詔授明徹使持節、散騎常侍、都督湘桂武三州諸軍事、安南將軍、湘州刺史、給鼓吹一部、仍與征南大將軍淳于量等率兵討皎。皎平、授開府儀同三司、進爵爲公」（『陳書』卷九、一六一頁）。
- ②⑨ 北族の八姓について詳細は宮崎市定『九品官人法の研究』（一九五六年、東洋史研究会。のち一九七四年、同朋舎。のち『全集』第六卷所収）第二編第五章七「姓族の詳定」参照。
- ③⑩ 典故をはじめとする駢儷文の文體的特質については鈴木虎雄『駢文史序説』（一九六一年、油印本）及び福井佳夫「六朝美文序説（一）～（七）」「六朝美文による歴史敘述をめぐって—六朝美文序説補遺—（上）（中）（下）」（『中京大學文學部紀要』第二七號二～四卷、二八號一～四卷、二九號一・三・四卷、三〇號一・二卷、一九九二～一九九五年）参照。
- ③⑪ 前掲注⑬錢氏書。

第三章 從軍をめぐる詩について

序

文學作品のうち、詩や隨想、往復書簡形式の文などその作品を示すべき特定の相手を念頭に置いて作られたものは多い。その中で、今日文學研究の立場から目を引かれることの一つに、そうした詩文のうちに相手との距離が如何に反映されているか、或いは作者がどのように反映させているか、という問題がある。無論そこに作り手と受け手との現實の距離がそのまま表現されている、などと安直に考えられるものではない。しかし、少なくとも作者の側からの相手の捉えかた、或いは作者がそう捉えようとした相手と作者自身との距離が、さまざまな言葉の構造に於てそこには示されている。これはやはり、文學に於ける一つの「個」の表現の在り方として、検討に価する事柄ではなかろうか。

一

本論序章に於て述べたごとく、庾信の、江南の梁から北朝の地へ移って後の詩文には、故國梁が滅んだうえにその故郷を去らねばならなかった境遇に由來する故郷喪失の情を強烈に讀みとれるものが多いこと、またそうした作品に優れたものが多いこと、は夙に知られる。しかし、『庾子山集』所収の作品は、そのような定評にそのまま該当する作品ばかりがそのすべてを占めるわけではなく、五言詩でも文でも、亡國の悲哀、羈旅の憂鬱、といった感懷を基調とする作品以外に、より日常的な宮廷や社會の交流の場に即した作品も多く、その中には、庾信自身の感懷を述べるのではなく、敘述する對象やそれを示す相手との關係の表現に比重を置いたものも少なくない。そうした宮廷や社會の交流の場に即した作品とは、主に實用性の高い文章、つまり實用に即して形式や内容に對する拘束の強い文體。その最たる例は、第二章に於て論じた、庾信の三十餘にのぼる碑傳文であろう。本章では、さらに一つ、こうした辭賦や文に比べて、そのジャンル本來として作られる契機も多様で、幅廣い用途を持ち、そのぶん内容も多岐に互る性格を持つ五言詩のうちにも少なからず認められる、庾信の自己投影的傾向とは無縁の作品について論じてみたい。

信の五言詩は、約一百六十篇（倪璠注『庾子山集』）現存する。このうちには、それが江南時代の作か北遷後の作か判斷しかねるものをはじめ、作品をめぐる詳細な背景の不明な作品も無論少なからず含まれるものの、今おおよその見通しをつける便宜までに、それが詠懷などの自敘的なものか、或いは特定の唱和の相手、

贈る相手を持つものであるか、もし唱和の相手がいるのであればそれが庾信にとってどのような関係に在る人物か、という基準によって大別してみると、最も多いのは、北朝系の王族貴顯を相手とする贈答詩、應詔詩の類で、約六十篇。次に、庾信同様の北遷南人たちを相手とする唱和詩が約三十篇、また、詠懷のスタイルや雜詠のスタイルすなわち庾信の自敍である詩もやはり約三十篇、認められる。このほか南朝時代の作と推定されるものが三十篇近い。このように一人の詩人の作品の傾向が多彩であって一様に括ることができないこと自體は、むしろ自然なことであると言えるが、そうした傾向の相違が、文學史の流れの中でいかなる意義を持つか、という点から改めてこのことを見してみるなら、そう簡単に看過することのできないヒントがここには存しているのである。

因みにいま、この庾信の作品の背景をなす北周の時代は、一口に言えば混沌の時代である。政治・社會・文化等々あらゆる方面においてそれまで南北二分の状態から隋唐統一時代へ向けて收束の動きを始めた中で、文學史もまた、大量の北遷南人を媒介として、南北の文學が融合の段階に入ることが決定づけられた時期と言ってもよいだろう。但し、從來この融合の過程については、ともすれば「南高北低」、すなわち既に高度な成熟を遂げていた南朝文學に對して未だ熟さず質樸なままであった北朝文學が出會い、北朝側が南朝側の影響を如何に受容し消化していったか、という紋きり型の圖式で論じられがちである。言わば南が教師で北は弟子、とでもいった、やや一方通行的関係で、である。しかし、果たしてそう一方的な流動だけであったのだろうか。假に、南朝側の文化を繼承した者にとって北朝側の文學そのものに何ら取るところが無かったとしても、そうした相手と出會うことそのものによる衝撃、その影響、というものは、充分予想してよいのではなかろうか。まして庾信の場合、一時の接觸どころではなく、身ぐるみ「北」に取り巻かれた半生に互る間に製作した詩文なのだから、彼に於ける南北接觸は、何がしか相互乗り入れ的な要素をはらんでいた可能性を、全面的に打ち消すことはできないはずである。何と言っても、彼の同時代、彼と同様の北遷南人として北齊に身を寄せる運命を辿った顔之推が、明確に北朝側の文化、氣風のうちに南朝側には失われていた価値を見出だした、という顯著な例もあるのだから。

ともかく、こうした南北文學混交の情況下に在って、その核にやはりこの庾信が位置することだけは、諸々の文獻及び文學史研究に照らして間違いない。例えば『周書』王褒庾信傳論の記述。

既而革車電邁、渚宮雲撤。爾其荆衡杞梓、東南竹箭、備器用於廟堂者衆矣。唯

王褒・庾信奇才秀出、牢籠於一代。

既にして革車^{いなづま}電のごとく邁き、渚宮雲のごとく撤^ちる。爾して其の荆衡の杞梓、東南の竹箭は、器用を廟堂に備うる者衆し矣。唯だ王褒・庾信のみ奇才秀でて出で、一代に牢籠せらる。

周知の通り、北朝文壇の變遷を史的に辿る、一種の北朝文學論の側面を持つこの『周書』論は、北魏から北周への間を代表する文人たちについて列舉した後、この段に至り、彼らの限界を指摘し、そして彼らの限界を超越し光彩を放ったのが王褒・庾信である、と述べている。庾信の詩文の、周圍への影響の大きさについては、他にもこの時代の人々に關わる文獻中に幾つも認められるところでもある。ところが『周書』の論は、その同じ記述をつぐうちに、次のような庾信の詩文に對する糾弾もなされてくくだりがある、目をひく。

其體以淫放爲本、其詞以輕險爲宗。…若以庾氏方之、斯又詞賦之罪人也。

其の體は淫放を以て本と爲し、其の詞は輕險を以て宗と爲す。…若し庾氏を以て之（揚雄）に方ぶれば、斯ち又た詞賦の罪人なり。

すなわち、同時代に多くの北方人から、そして無論南方人からも歡迎され追隨者をも生んだ庾信の詩文の、北地に於ける影響力の大きさは認めながらも、批判の言葉で締めくくっているわけである。このような、庾信の存在への肯定・否定が抱き合わせになった認識を、身を以て示した個別の例としては、隋の煬帝に關する記事が参考にもなり、かつ興味深い。

初、王屬文、爲庾信體、及見^き已後、文體遂變。

初め、（晋）王 文を屬して、庾信の體を爲すも、^きに見えるに及びて已後、文體遂に變ず。（『隋書』卷五八柳^き傳）

この「晋王」とは、後の煬帝のことで、彼が柳^きの文風を信奉する前には、庾信の文風を慕を信奉するようになる前には、庾信の文風を慕い、それに倣っていた、との記述である。おそらく文學史上、庾信の詩文についての、「過度な修辭」を槍玉に擧げての否定的でマイナスの意圖を含む見方の多くは、多かれ少かれこうした隋代・唐初の頃の文獻に見える相次ぐ批評の流れを汲むものであろう。が、これを裏返せば、正史の文學傳論や序で、權威をもって否定しなければならないほど、庾信の詩文とそこに凝集された南朝の文學のエッセンスとは、當時の人間にとって實に魅力あり、影響力ある存在だったことを意味するのではなかろうか。

このように、南から移った士大夫たちの中でも、詩文の才において最も注目を浴びた一人である庾信は、その作品によって北朝の人々に影響を与えたはずだが、で

は、そのような場に身を置き、目に見えぬ拘束の中で詩文を操ることによって、庾信自身はその作品にそれをどう反映させたのか。また、賛否はさておき、庾信の作品自体は、その同時代の文學の情況に對していかに関わっていたか。それを確認する作業の手がかりとして、本章では、北遷後の庾信の詩のうち、最も數量の多い唱和詩を採り上げることにしたい。と言うのも、南北混交のこの時期を遠ざかって後の時代の詩人、例えば杜甫などに至っては、確かに庾信の作品のうち亡國の情をたたえたものが、より強烈な影響力をもって迎えられた経緯があるにせよ、北周から隋への混交の當時に於ては、おそらく實際の用に即して作られた唱和の詩のほうが南北文人たちの交流の場に、より頻繁に呈されたであろうこと想像に難くない。そしてそういう他者へ向けて示す可能性の高い作品ほど、「相手」側の流儀、好尚、を反映するものであって、庾信を通した「南」と「北」の文學の接觸の一端を窺うには、より適當な材料と考えられるのである。

以上のような視點から、本章では、庾信の唱和の詩を手がかりに、庾信自身が「北」の中に身を置くことによってどのような作用を受けたのか、その核心に行き着くことが無理なら、せめて、「北」と向き合う際にはどのような反應を示したのか、その反應をどのような手法手段によって表現したのか、そしてそれが同じ庾信が「南」的なものに接した時の表現との間で、どのような對比を示すものであるのか、について検討を試みるものである。

二

唱和の詩と一口に言っても、その唱和の内容もまた多岐に亙るが、以下本章では特に軍旅に関わる詩について見てみたい。前節で述べたような關心に従えば、實用に應じる内容の詩であればあるほど、この際資料として有効であり、その點で、軍事という紛れもなくきな臭く現實的な場を前提とする唱和の詩は、うってつけであると確信する故の選擇である。

さて、庾信には「奉報趙王出師在道賜詩」「和趙王送峽中軍」「奉和趙王途中五韻」「同盧記室從軍」「侍從徐國公殿下軍行」の五篇の從軍の場に即した詩がある。他に、軍事に関わるものとして『藝文類聚』では卷五九武部「戰伐」に收録されている「從駕觀講武」もこの際考慮に入れてよいだろう。

まず「同盧記室從軍」であるが、これは『文苑英華』では「從軍行」と題して樂府詩を録する卷一九九に收められ、また『樂府詩集』においても卷三二（相和歌辭）の「從軍行」作品群中に列せられる。

河圖論陣氣、 河圖 陣氣を論じ、

金匱辨星文。 金匱 星文を辨ず。
地中鳴鼓角、 地中に鼓角を鳴らし、
天上下將軍。 天上より將軍を下す。
函犀恒七屬、 函犀 恒に七屬、
絡鐵本千羣。 絡鐵 本より千羣。
飛梯聊度絳、 飛梯もて聊か絳を度り、
合弩暫凌汾。 合弩もて暫く汾を凌ぐ。
冠陣先中斷、 冠陣 先ず中斷し、
妖營即兩分。 妖營 即ち兩分す。
連烽對嶺度、 連烽 嶺に對いて度り、
嘶馬隔河聞。 嘶馬 河を隔てて聞こゆ。
箭飛如疾雨、 箭の飛ぶこと疾雨の如く、
城崩似壞雲。 城の崩ること壞雲に似たり。
英王於此戰、 英王 此に於て戰わば、
何用武安君。 何ぞ武安君を用いん。

唱和した相手「盧記室」とは、盧愷、字は長仁、『周書』卷三二に傳がある。その父の盧柔、字子剛は、『周書』庾信王褒傳論に擧げられる北周文人の一人であり、詩・頌・碑・銘・檄・表・啓など數十篇を著したと本傳に記される人物で、愷自身も「經史を涉獵し、當世の幹能有り（涉獵經史、有當世幹能）」と記載される、學識の持ち主であったようである。記室として仕えたのは北周宗室の一人齊王宇文憲。因みにこの齊王は、庾信が神道碑文を獻じた對象でもある（「周上柱國齊王憲神道碑文」。第二章參照）。詩の中で「英王」とあるのも齊王宇文憲のこと。

詩そのものについて詳細に見てみよう。すべて十六句。「鼓角」「將軍」「函犀」「絡鐵」「飛梯」「合弩」「連烽」「嘶馬」「箭」「城」といった武器、軍備に關係の深い事物の名がほぼ毎句點綴され「從軍」という主題に徹底した用典が目立つ。些かも私情をさしはさまぬ運びは、碑傳文におけるつきはなした對象の捉えかたに通じるものが認められる。盧愷の側の本歌に當る詩が佚して傳わらないので、これが「唱和」である以上、このような内容と運びによって釣り合うような作品だったのであろう。ともかく、ここで、作者庾信は、一場の陣容を捉え、それを雄大に表現することのみに徹している。唱和の相手盧愷と共有する詩の世界は、眼前の現實的な光景に限定されている。

ところで、『文苑英華』や『樂府詩集』は庾信のこの作品を「從軍行」の名で收

め、樂府詩として扱っている。これを念頭に置いて魏から南北朝にかけての樂府「從軍行」の流れを辿ってみると、そこに興味深い變化が認められるのである。

從軍という、現實には相當きな臭い事態であるはずの場が、詩や辭賦の題材として定着していること自體、中國士大夫文學を特徴づける一面と言つてよいかも知れないが、それはさきおき、この題名から直ちに想起されるのはやはり王粲「從軍詩五首」である。『樂府詩集』卷三二（相和歌辭）所收「從軍行」群の筆頭に於ては「從軍行五首」と題して排されるこの篇は、『文選』に於ては、卷二十七「軍戎」の項目に掲げられる唯一の詩でもある（『藝文類聚』卷五九「戰伐」の項でも、詩として收める）。その第一首めの冒頭「從軍に苦樂あり、但だ聞く 從う所は誰なるかを（從軍有苦樂、但聞所從誰）」と、從軍兵士の辛苦に焦點を當てた句で始まるのをはじめ、「征夫 親戚を懷う、誰か能く戀情無からん（征夫懷親戚、誰能無戀情）」（第二首）、「蟋蟀 岸を挾んで鳴き、孤鳥 翩翩として飛ぶ。征夫 心に懷い多ければ、惻愴として吾をして悲しましむ（蟋蟀挾岸鳴、孤鳥翩翩飛。征夫心多懷、惻愴令吾悲）」（第三首）「客子 悲傷すること多く、涙下ちて收むべからず（客子多悲傷、涙下不可收）」（第五首）等々、それと同類のイメージを喚起する表現が隨所に認められる。一方で、軍旅の統率者への諛辭、戰況を稱え士氣を鼓舞するような表現も多く混在していることも、この王粲詩については、夙に指摘されており、そのため、「七哀詩」のような抒情性に富む作品を生んだことで建安詩壇をリードする存在と目される王粲の詩文の中では、やや政治色に傾いた作品として扱われがちでもある。それだけに、文學史に於ても、常に流動的な地點に位置する一篇と言えよう。

さて、樂府題としての「從軍行」は、『樂府詩集』卷三二題下に引く『樂府解題』に「從軍行は皆軍旅苦辛の辭なり」と説かれるのに明らかなように、軍旅は辛いもの、苦しいもの、という慷慨の情が伏線となっているのが、むしろ常である。それは、王粲「從軍行」五首がまずそうであるし、王粲の後、晉・陸機、宋・顔延之の「從軍行」に於ても、それぞれの冒頭「苦哉遠征人」という一句に端的に窺われるように、從軍に伴う辛苦や羈旅の情、を織り込みつつ歌う型が模擬され繼承されていることが確認できる。ところが、さらに時代を下っていくと、少數だが明らかに、從軍の苦樂をうたう代わりに軍備の充實や勇壯さをうたうことに重點があると読みとれる作品が、見當るようになる。それは主に梁以降に目立ち、例えば、梁・元帝や戴嵩の各「從軍行」などは、それぞれ傾向に相違はあるものの、少なくとも「從軍有苦樂」というモチーフをその篇中に見い出せぬことに於ては、共通し

ている。さらに、庾信と同じ北遷南人である王褒の「從軍行」二首も、そうである。試みに王褒の第一首を次に見てみよう。

兵書久閑習、	兵書 閑習を久しくし、
征戰數曾經。	征戰 曾經を數う。
講戎平樂觀、	戎を平樂觀に講じ、
學戲羽林亭。	戲を羽林亭に學ぶ。
征西度疏勒、	征西して疏勒を ^{わた} 度り、
東驅出井陘。	東驅して井陘に出づ。
牧馬濱長渭、	牧馬 長渭に濱し、
營軍毒上涇。	營軍 上涇に毒す。
平雲如陣色、	平雲 陣色の如く、
半月類城形。	半月 城形に ^に 類る。
羽書封信璽、	羽書 信璽もて封じ、
詔使動流星。	詔使 ^{むか} 流星を動かす。
對岸流沙白、	岸に對 ^{むか} いて 流沙白く、
緣河柳色青。	河に緣 ^よ りて 柳色青し。
將幕恒臨斗、	將幕 恒に斗に臨み、
旌門常背刑。	旌門 常に刑に背く。
動封瀚海石、	動は瀚海の石に封じ、
功勒燕然銘。	功は燕然の銘に勒す。
兵勢因麾下、	兵勢は麾下に因り、
軍圖送掖庭。	軍圖は掖庭に送る。
誰憐下玉筋、	誰か憐れまん 玉筋下りて、
向暮掩金屏。	向暮 金屏を掩うを。

篇首から二十句めまではすべて軍事に関わる字句、用典から構成され、羈旅感や行役の苦痛につながるような要素は些かも差し挟まれていない。とは言え、梁簡文帝の樂府「楚妃嘆」に見える「金簪鬢下垂、玉筋衣前滴」（『玉臺新詠』卷七）など、涙を比喻する例のある語「玉筋」を含む末二句「誰憐下玉筋、向暮掩金屏」だけは、作品全體にやや哀情を附加して締めくくる要素となっている。玉筋、金屏、と宮體詩的な纖弱なものを連想させる語彙を「從軍」に結びつけるこの構造は、むしろこの篇全體に行軍の勇壯さとはまた異なる非現實的な傾向をもたらしはいるが、それでもやはり羈旅感や行役の苦痛のモチーフにも結びつかないものである點

で、庾信の詩と共通するものがある。

一方、樂府以外の一般の、從軍に即した詩の系統に於ては、詩の製作の契機・内容が現實と密接なぶん、軍事の總責任者である元首が作者である場合と否と、出陣の前と後と陣中と、といった具合に、各作品の背景はさまざまな場合があり、それに應じて個々の作品に表われる臨戦の色彩の強弱に相違は認められるものの、概ね軍行の勇壯さを賛え、武功を壽ぐ内容の歴代作品が大半を占める。少なくとも、樂府「從軍行」系が、梁陳に至ってやや希薄になっていくとは言え、主として王粲「從軍」五首の慷慨の型を繼承する形で展開するのとは異なって、慷慨のモチーフはほとんど見当たらない。そのように整理できる。北周の頃に至って、「從軍行」の系譜に於ても、また「從軍詩」の系譜に於ても、行役の辛苦・羈旅の悲哀を基調とする傾向が、それぞれの形でやや後退し、それと代わるように、從軍の場をいっそう彷彿とさせるような表現がとりこまれるようになっていたことを、ここに認めてよいだろう。

さて、庾信にはもう一篇、この「和盧記室從軍」と同工の詩「侍從徐國公殿下軍行」がある。徐國公とは、若干鳳、字は達摩、保定四年（五六四年）に徐國公に封じられている（『周書』卷一七）。若干という姓からも察せられる通り、北族の出である。

八風占陣氣、	八風	陣氣を占い、
六甲候兵韜。	六甲	兵韜を候う。
置府仍開幕、	府を置きて	仍ち幕を開き、
麾軍即乘旄。	軍を	麾きて即ち旄を乗る。
長旗臨廣武、	長旗	廣武に臨み、
烽火對成臯。	烽火	成臯に對す。
巡寒重挾纊、	巡寒	挾纊を重ね、
酌水勝單醪。	酌水	單醪に勝る。
陣後雲逾直、	陣後	雲は逾よ直く、
兵深星轉高。	兵深	星は轉た高し。
電燄驅龍馬、	電燄	龍馬を驅り、
山精鏤寶刀。	山精	寶刀を鏤る。
塞迴翻榆葉、	塞は迴かに	榆葉翻り、
關寒落雁毛。	關は寒く	雁毛落つ。

既得從神武、 既に神武に従うを得れば、
何須念久勞。 何ぞ須いん 久勞を念うを。

全て十六句という分量からして「和盧記室從軍」詩と同じあるが、その十六句中の構成も相似る部分が多い。まず冒頭の二句に於て、「八風」「六甲」という兵法に関わる辭句を掲げるのは、盧愷との唱和詩で「河圖」「金匱」と、讖緯に関わる代表的な書名を掲げるのと、同工である。その後は、「幕」「旄」「長旗」「烽火」「陣」「兵」「龍馬」「寶刀」「關」「塞」など、やはり從軍・戦伐を想起させる字句が列擧されて、最後の二句に於て、若干鳳の率いる軍の幸先を壽ぐ形で結んでいる。ともに、視線は勇壯な現状と戦勝の未來とへのみ向けられていて、詩を作る自分、贈る相手、またその場に關わるあらゆる人間のうち誰かの内面や、時間的な過去、など一切ここに浮かんでこない。徹底して陣營の場を表現することに意を注いだ作品としての形を呈している、と言ってよい。

さらにまた、庾信や王褒が入って行った先の、北朝側に於ける從軍・軍旅詩の傾向はどうであったか。北朝の詩文が南朝のそれとは傾向を異にして、質實を尚ぶものであったことは常に言われている。そうであれば、いま見てきたような、勇壯さを賛美し、武ばった光景を寫しとることに明らかに比重のかかった表現は、北朝好みのものでもあったろうことは、十分に予想される。試みに、北齊・祖珽、字孝徵の「從北征詩」（『藝文類聚』卷五九・『文苑英華』卷二九九）を見てみると、次の通りである。

翠旗臨塞道、	翠旗	塞道に臨み、
靈鼓出桑乾。	靈鼓	桑乾を出づ。
祁山斂雰霧、	祁山	雰霧を斂め、
瀚海息波瀾。	瀚海	波瀾を息んず。
戍亭秋雨急、	戍亭	秋雨急かにして、
關門朔氣寒。	關門	朔氣寒し。
方繫單于頸、	方に單于の頸を	繫け、
歌舞入長安。	歌舞して長安に	入らん。

また、祖珽と同じく北齊の裴讓之、字士禮、の「從北征詩」（『藝文類聚』卷五九・『文苑英華』卷二九九）は、次の通り。

沙漠胡塵起、	沙漠に胡塵起り、
關山烽燧驚。	關山に烽燧驚く。
皇威奮武略、	皇威 武略を奮い、

上將總神兵。 上將 神兵を總べる。
高臺朔風駛、 高臺に朔風駛く、
絶野寒雲生。 絶野に寒雲生ず。
匈奴定遠近、 匈奴 遠近を定めて、
壯士欲横行。 壯士 横行せんと欲す。

裴氏・祖氏の兩篇ともに、羈旅感や從軍する兵士の苦痛などのイメージを喚起する字句は一切用いられていない。陣營を取り巻く地勢をはじめとする情況（祖珽三～六句め／裴讓之一・二句、五・六句め）、盛り上がる士氣（祖珽・裴讓之ともに七・八句め）と堅固な軍備、統率者の有能さ（裴讓之三・四句め）、といった陣營の盛んなさまが、簡潔に描寫される内容となっている。これらに於て、作者である祖氏・裴氏の存在は、これらを描寫する機能であることに終始しており、彼ら自身の感懷は、ほんの類型的な形としてさえ窺い得ない。もちろん、どちらも題を見る限り誰かとの應酬詩として扱うには無理があるが、この構造から生じる統率者への贊美的傾向から推して、少なくとも作者自身に於ては、それぞれの陣營の統率者への獻呈を前提とする作品として見てよいだろう。たとえ、現實にそうした獻呈がなされなかったとしても。

さて翻って、庾信の前掲二篇は、唱和の相手が生粹の北朝士人である。その二篇ともに、行軍の實際とかけ離れた事物を點じずに、あくまでも軍中の勇壮さの表現に徹した作品となっている背景として、いま見た祖氏・裴氏の各「從北征詩」の例に窺われるような、北朝側に於ける從征詩の型とでも言うべきものを顧慮してもよいのではなかろうか。すなわち、盧愷・徐國公という唱和の相手を「北朝側の人間」として意識し、それを優先したればこそ、あのような從軍唱和詩の型が自ずと選擇されたのではないか。もちろん、祖氏・裴氏の詩は、「方繫單于頸、歌舞入長安」（祖珽）も「皇威奮武略、上將總神兵」（裴讓之）も、從軍を主題とする詩の結びに於て軍の統率者の徳を稱える際に常用される言い回しであることをはじめとして、凝った典故にも乏しく、まさに質實な作品であるのに對し、庾信の二篇のほうは、同じく軍中の描寫に徹しているにしても、地名の擧げかた、典故の排しかた、の功によって、はるかに空間的・時間的に廣がりのある内容となつてはいる。王褒の「從軍行」にしても、無論こちらは樂府題としての要素が色濃く、現實の「從軍」に即した作品とは考えられないものの、それでも、極端な修辭の技巧は影をひそめている。これらを、北朝側の求める型に、南朝選り抜きの修辭を投入した、そういう例として捉えることは無理だろうか。そう無理ばかりでもないことの

補強材料を求める目的も兼ねて、第三節の検討へと移りたい。

三

庾信による軍旅從征を主題とした詩の、残る二篇「和趙王送峽中軍」「奉報趙王出師在道賜詩」は、前節に見てきたような特徴が把握できる二篇との對比に於て、興味深い。こちらはともに趙王との唱和に係るものである。趙王宇文招、字豆盧突は、北周文帝の十三子の一人であり、庾信が長安に在つて最も親交あつた北周宗室側の一人であることが、現存の庾信の集に收録された多數の奉和詩や文によって知られる人物である。『周書』卷十三の本傳に「庾信の體を學び、詞に輕滔多し（學庾信體、詞多輕滔）」とも記される。庾信がこの趙王に和した詩は、無論ほかの從征詩の型を逸脱するような大きな相違を呈するわけではないが、しかし、よく見ればそこに微細ながら興味深い相違が認められるのである。二篇のうちの一つ「和趙王送峽中軍」を、見てみよう。

樓船聊習戰、 樓船 聊か戰を習い、
白羽試搗軍。 白羽 試みに軍に搗う。
山城對却月、 山城 却月に對い、
岸陣抵平雲。 岸陣 平雲に抵る。
赤蛇懸弩影、 赤蛇 弩影に懸かり、
流星抱劍文。 流星 劍文に抱かる。
胡笳遙警夜、 胡笳 遙かに夜を警しめ、
塞馬暗嘶羣。 塞馬 暗に羣に嘶く。
客行明月峽、 客行す 明月峽、
猿聲不可聞。 猿聲 聞くべからず。

漢武帝の昆明池での水戰演習、周武王の伐殷、という著名な故事を踏まえた一・二句め、以下にも酒杯に映つた赤い弩の影が赤い蛇のように見えて敵を恐れさせたという故事（『風俗通』）、呉王所有の寶劍六種のうちの一つ「流星」の名、をそれぞれ掲げた五・六句め、「山城」「岸陣」と軍事を連想させる字句は前章で扱った二篇同様にやはり多用されているが、ここではそれが、軍中の緊張や勇ましさを高らかに謳いあげるような方向に向かわない。すなわち、七・八句めは倪注にも觸れる通り、李陵「答蘇武書」中の「胡笳互動、牧馬悲鳴」を容易に想起させる構成となっている。「胡笳」は、葦の葉を卷いて作った笛、北方民族の樂器とはいえ、その音は蔡邕の故事に結びつけられる樂府「胡笳十八拍」に始まり「聴く者に

悲哀を呼び起こす樂の音」の代名詞として詩文の中に定着している言葉。「塞馬」北方の馬、も戦闘に適した優秀な馬のことではあるが、それが「暗嘶羣」夜の暗闇の中、見えぬ仲間の群れに向かって嘶く構圖というのは、まさに悲哀にまつわるさまざまなイメージを呼び起こす音の風景ではないか。そして、結びの九・十句め、「客行」は行旅一般を指す語で、この一語のみによって表わし得るイメージは悲喜のどちらもあるかも知れないが、やはり先だつ七・八句めの下敷きになっている李陵書の典故、「胡笳」の語の歴史を考慮に入れて見れば、ここで「古詩十九首」第十九首の一節「客行雖云樂、不如早旋歸」を想起することはそう難しくない。旅そのものの苦樂は問わず、それは一刻も早く歸るべき場所へ歸るに如くはないような状態なのである。そして、その旅の場、蜀の三峽の一つ「明月峽」で「猿聲」を聞くことができない、と言う。このように、從軍の場に即しての奉和詩でありながら、この詩は、出征先での邊疆感、それに伴う客寓感を色濃く出している點で、前掲二篇とは明らかに異なっているのである。主眼が、陣營の鼓舞、陣營の贊美のみに限定されていない。

もう一つの「奉報趙王出師在道賜詩」は、二十四句から成る比較的長い詩であって、ここにそのすべてを引用するのは控えるが、その二十一・二十二句めにやはり「哀笳關塞曲、嘶馬別離聲」とあり、これについて倪璠は「子山自ら羈旅爲りて、又た趙王と離別す、即ち李陵の書に所謂胡笳互動、牧馬悲鳴なる者なり（子山自爲羈旅、又與趙王離別、即李陵書所謂胡笳互動、牧馬悲鳴者也）」と注している。つまり、この詩は、出陣する軍容をうたいながらも、それをその將たる趙王との「離別」として捉え、軍旅特有の悲哀のモチーフを盛り込むことによって表明する構造となっているのである。

このように軍旅の勇壯さを列ねてうたう以外に、從軍に伴う兵卒の感慨に類する心情を詠みこんだものと言え、ここでまた王粲「從軍詩」五首の系譜を思い起こさざるを得ない。庾信と王粲との間では、既に時間的にずいぶん隔たりがあり、その間に五言詩であれ、辭賦であれ、文學史は相當な展開を遂げているわけで、ここに兩者の直接な因果關係を論じ得るものではないが、少なくとも王粲「從軍詩」に於ける、從軍の場をうたう中に天下國家に對する自己の憂愁を織り混ぜる型の流れを、ここにも窺うことはできる。窺うことはできるがしかし、庾信の趙王への唱和詩の場合、天下國家の混亂を嘆くというような、大仰な悲哀ではなく、親しい相手との離別を惜しむ、という、より個人的レベルでの悲哀である點にこそ、注目してよい。なぜなら、この離別を惜しむ心情の表現によって、他でもない庾信と趙王と

いう唱和の當事者二人の存在が、この詩の創出する軍旅の場に於て浮き上がってくる。つまり、この二篇に於ては、唱和の相手趙王との關係を「離別が惜しまれる」ほどである關係として盛り込む、という作者庾信の意志が、存在が、はっきりと打ち出されているのである。これによってこの二篇は、誰にでも作れる、誰に作らせても大して違いのない、儀禮的・武功稱贊的な單なる從征詩ではなく、この二人の間ゆえにこそ成立する、言わば代替不可な詩篇としての性格を帯びてくるのである。

結び

わずかに、從征をめぐる四篇を扱ったに過ぎないこの段階で、庾信の詩全體を覆うほどの結論は致しようもないが、以上本章の検討を通じて確認し得たことをここでまとめてみたい。

まず、陣營の場に徹底的に即した表現の型が認められることについて。これは、宋齊以降いくつかの從征に因んだ詩の上にも認められるうえ、字句・用典も多岐多様な範圍に互る點、まさに南朝文學の集積に見えるが、しかし、南朝の從征詩や「從軍行」に頻繁に表われる、過度なほどに難解な字句、從征とは無縁のはずの宮體詩風の華美繊細な修辭及び「從軍」にまつわる類型的なモチーフ、は一切用いられていないことに注意すれば、庾信の從征詩の型には、北朝在來の從征詩の、陣中描寫と武功稱贊を主とする傾向も決して無關係ではなかろうことも、十分考えられるのである。

次に、庾信自身の詩文全體に互って常に注視すべき、彼自身の「個」と著述の對象や唱和の相手などそれぞれの「個」との、表われかたの問題であるが、庾信の詩文全體に於てそれは、時に強烈に、時に微弱に、さまざまな度合で表され、その加減で、一篇一篇の性格も異なるのが隨所で認められる。いま、これら北朝系の勢族を對象とした從征の唱和詩に於ては、同じ北朝系の人物でも、それが庾信の集のうちただ一篇のみ庾信の唱和の相手として名を残す文獻となる、盧記室及び徐國公各々との唱和詩と、五言詩だけでも他に十篇近く庾信との交流の跡が知られる趙王とのそれとでは、やはり差異が認められる。すなわち、より「私」の要素の強い應酬に於ては、簡素で平明な作品となっていて、しかもこれは南人相手の「私」の表現ともまた異なるのである。北遷南人たちとの唱和では、眼目となっている事柄にプラスして、羈旅の情という、庾信の詩文を代表するテーマがほぼ必ず盛り込まれていて、まさに「篇篇有哀」といった傾向を呈するのとは對照的に、かなり日常的な感情の表現、と言ってよいかもしれない。

公式の、つまり求められた席に於ては、かなり技巧的な詩を作った彼が、同じ北朝系の勢族を相手にするにしても、趙王や滕王など、ごく限られた人々に對しては、南人相手の「私」とはまた異なるものの、簡素で平明な中に獨特の「私」の要素を見出せる作品を成したことについては、既に指摘がある。それが、こうした公式性の高い作品に於ても認められることは、庾信が、對象人物を實に鋭く意識して個々の詩文を製作したことを裏づけるものと言えよう。そして、これらの特長が、南朝文學特有の形ばかりで無く、また北朝文學の影響を紛々と示すような形でもない、独自の形に於て認められる。そこにこそ、庾信という一人の詩人の中に於ける、文學の南北接觸の、何よりの跡を求めることができるのである。

注

- ① 南北朝文學についての史的研究に於ては、ほぼ必ず言及されることなので、そのすべてをここに挙げることは控えるが、例えば王運熙・楊明『魏晉南北朝文學批評史』（一九八九年、上海古籍出版社）第五章第一節「北朝的文學批評風氣」、最近では羅宗強『魏晉南北朝文學思想史』（一九九六年、中華書局）第十章第一節「北朝文學思想發展的背景」に詳論される。
- ② 顏之推の文學に関する独自の傾向についても、諸論考に於て言及されているが、例えば前掲注①王・楊氏書第五章第二節「顏之推」に詳論がある。
- ③ 前掲注①第十章第三節「南北朝文學思想融合的趨勢」では、庾信を核に詳論が示されている。
- ④ 例えば、庾信と時代を同じくする北朝側の人物たちの生前最も親交を持った北朝側の人物の一人である滕王逵はその「庾子山集序」に於て「齒雖耆宿、文更新奇。才子詞人、莫不師教、王公名貴、盡爲虛襟」と述べる。
- ⑤ 前掲注①羅氏書第十章第二節「重實用、尚真實、求朴野的文學思想傾向」參照。
- ⑥ 下定雅弘「王粲詩について」（一九七八年、『中國文學報』二九冊）參照。
- ⑦ 『藝文類聚』卷五九武部「戰伐」の項に收められる詩のうちには、宋・謝莊「江都解嚴詩」や、傅亮「從武帝平閩中詩」、齊・虞羲「霍將軍北伐詩」など、主に武功を稱賛して統率者に獻ずる性質の強い作品に於て、樂府「從軍行」の虚構性とは異なる、軍事に即した表現が認められる。
- ⑧ 序章注①興膳氏書、一四九～一五五頁參照。

結語

以上、三章の検討を通して、庾信の主要な作品に於て、それぞれの表現の構造とその來源について分析しつつ、そこにさまざまな「個」の表現が實現していることを確認してきた。庾信の辭賦・文・詩は、南朝詩文の諸要素を幅廣くふんだんに汲みとりながら、しかもどの場合も、單なる繼承や模倣に終わらない、独自の變換とも言うべき部分が認められるものであることは、各章の検討を通じて明らかにできたと思う。この検証から得られる成果をまとめると、凡そ二點に絞ることができる。

まず第一點は、一變したと言われる庾信の後期の詩文もまた、その前半生・梁時代に於て彼が身につけた南朝文學の「素地」に裏づけられた成就であり、庾信の詩文はやはり文學史の上で六朝文學の集大成を示す存在として位置づけられることの確認ができたことである。

第二點は、その「變換」の確認に本づくものである。すなわち、最終的にそれを可能にしたのは庾信の作者としての才であったかも知れないにしろ、そのきっかけ或いは背景として、庾信自身が北朝文學史の展開の場に身を於て接觸した存在であったこと、北朝の諸環境との関わりの一面を無視できない、という示唆である。このことについて直接に取り組んだのは主に第三章であるが、本論全體を通じても微妙ながらクローズアップされてきたことである。

先に本論序章に於て、庾信が屬した北周を指して「魏晉南北朝期文學史の最末端」と言ったが、この表現は實は妥當ではない。より偏り無く言えば、その後にやってくる隋唐の統一帝國時代と、その前にさきだつ南北、短命王朝興亡時代との狭間に當る。つまり北周期は、前者から見ればその發端に當り、また後者から見ればその最後尾に位置する、のである。分裂から融合へ、大きな時間の流れの中の一つの轉換點的な位置、と言えなくもない。もとより、北周そのものは百年にも満たぬ、短くしかも流動的な時期であり、殊更にこの時代を重大視しようという企圖など持たない。只だ強調したいのは、その時代が歴史的に上のような性格を持つのと似て、そこに居合わせた庾信によってなされた詩文もまた、文學史に於て微妙な轉換點をなす存在かも知れない、ということ。すなわち、明らかに別々の流れを辿ってきたものとして捉えざるを得ない南朝・北朝の文學史が、再び一つの流れとなる動きの發端として位置づけ得るかも知れない、ということである。無論周知の通り、後に中唐以後の文學に於て、庾信の文學は南朝文學の流れもろともに克服されてしまうことになり、後代から決して發展的な受け入れかたがなされるわけではな

い。しかし、だからと言って、庾信の詩文は、單に南朝文學の飽和點を示すだけの意義しか持たぬものでもない。本論で扱った作品に於て、南朝的要素だけではない變換の跡が見出されたことは、果たして、この見通しの補強となろう。庾信の詩文は、それがたとえ微細な形跡ではあっても、時代と環境に即した變化を遂げていて、故に、文學の流變の一端を窺い得る存在として積極的に位置づけられるのである。

こうして、本論で行ってきた庾信の詩文の検討は、彼が存在した北周が、魏晉南北朝と隋唐の狭間に位置することを考慮に入れることによって、いっそう興味深い見方が可能となるし、一方また、庾信という人物の作品を通して見ることによって、漢魏晉南北朝期文學と唐代文學、とどうしても疆界をつくって語り、語られがちな、この間の文學史も、また從來とは些か違った繋がりのある一つの流れとして觀察可能となる。この見通しについては、無論まだ論證は十分ではない。しかし、本論を通じて得られた些かのこの手應えを、庾信の周邊或いは庾信以後の文學を対象とした、今後さらなる検討を経て論證していく必要があることを確認して、本論の結びとしたい。